

うに書く、御國自慢か己惚か。快感を減すること五割強。」と書いてゐるのを見ると、當時同氏も彼のライフなどは頼と御存じなかつたと見え、批評も一部見當外れに陥つてゐる。其後、「東京日々」紙上であつたか、平田禿木氏のコンラッド評論が載つてゐたから、早速同氏の宅を訪れて色々聞いて見たが、同氏はコンラッドをよく知らない。新聞紙上の評論は「ブックマン」誌上のを紹介したに過ぎない、悉しいことは同誌を見よと教へられて歸つたこともある。當時英本國には彼の評論やライフなどが澤山出てゐたかと云ふに、決してさうでなかつたやうである、と云ふのは當時コンラッドは、まだ賣り出した許りの處であつたので、其評論などもチヨイ／＼雑誌などに断片的に出る位であつたからである。

此様な譯で私は直接コンラッド氏に向つて、ライフの一端でも人生觀の片影でもよいから洩して貰ひたい、との意味を認めた書面を送つた。其後其返書を貰つたり、又一二年の後であつたか、私が「早稲田文學」にコンラッド論を載せたのを一冊同氏に送つたりして、會はない先から餘程心易いやうな氣がしてゐた。

それで渡英後早速十年の知己にでも會ひたいやうな氣持で、訪問したいと思つてゐたが、同氏はロンドンを去る七八十哩も隔つた地に卜居してゐるので、おいそれと云ふ譯に行かず、其中に霧の時節が来て、あつちこち出歩くのが何となく億劫になり、七八ヶ月も経過して終つた。やつと四月の半頃、前からの事なども書いて面會を求めてやつた、すると同氏のセクレタリーから

足下

コンラッド氏は御手紙に對し深く感謝の意を表し、且以下のやうにお傳へしてくれとの事でありませう——同氏は目下健康が餘り勝れませんが、今月末頃迄には十分快復する事と存じますから、其際御來訪下さる事を希望致します、敬具

一九二二年四月二十日

ケント・ピショップス・ポーン・オヴ・ワルズ コンラッド方

エル・エム・ハロース

此返書を得て、早速コンラッド氏健康回復の際は何時訪問してよいか同氏に尋ねた上報らせ

て貰ふ様に同秘書に頼んでやつて置いた。四月の末になつても、五月の初になつても何の音沙汰もなかつた。其中に私は一ヶ月許り大陸旅行に出かけたので、其儘訪問の機を得なかつた。それから歸英後英國内地の文學上の古蹟や背景等の探究に出かけて、八月末ロンドン郊外の宿に歸つた。と再び手紙をコンラッド氏に送つて再度面會を求めてやつた。すると、前に擧げたやうな電報が來たのである。

九月三日(日曜日)約によりコンラッド氏を訪れんとて、ロンドンの郊外ハムステッドの宿を出で、バスに乗つて、ヴィクトリア停車場に急いだ、十八志一片で三等往復乗車券を買つて、チャーサーの物語で、殊に記憶に鮮かであるカンタベリーに向つて、馬上ならで、汽車に身を托して出發したのは、豫定の時刻十時四十分であつた。

汽車は英國の南部、ケントの野を走つて行く、ケントと云へば沙翁の作中キング・リアの悲境を思はしめ、嵐の夜のヒースを偲ばしめるけれども、今は英國中最開けてヒースなどの影もなく、緑の牧場や果樹園や麥畑や野菜畑などが起伏して遠く擴がり、稀に、ウインド・ミル

が昔を語り顔に大きな腕を彼方の木蔭に突き出してゐる。羊や鶏などが果樹の間の芝生に遊んでゐるかと思ふと、麥の收穫時とて刈りつたのが束にして畑中に曝されてゐるのがある。こんな野を一時間も走つたと思ふ頃、帆船や蒸汽船などの集まつてゐる河口の入江といつたやうな處に着いた。此處はロチェスターと云ふ港で、彼方に見える古城は十二三世紀の遺物である、並ぶ民家も何となく古めかしくて、田舎くさい。此地方からヤーマスにかけてはディッケンスを育んだ地で、其作の背景も自ら偲ばれ、デーヴィッドもベゴッチイもピクキックも其處らあたりをうろついてゐるやうな心地がした。ディッケンスと云へばコンラッドが十三歳の時故國で彼の作ニコラス・ニッケレビーのポーランド譯を読んだことが思ひ出される。やがて、汽車は再び歩みを初めて、ファヴァンムで私たちを他の車に移した。かくてカンダベリー東部停車場に着いたのは十二時三十四分であつた。

汽車を降りると、見上げる許りの髻むしやの大男が私を目がけて、にこ／＼と進んで來た、これこそかねて寫真で見覚えのある顔、一見コンラッド氏であることが分つた。ハアディ氏に面會した時は大地から生えた老木のやうな氣がしたが、今は大洋の巨濤の中から現れ出した

大櫓のやうな氣がした、氏が鼻下と云はず、頬と云はず、顎と云はずむしや／＼と生ひ茂る斑白の粗髯をや、短くかつたのは波打つ岩にくつ着く藻のやうである。頭には白つぽい中折帽、身には霜降色の背廣服、がつしりとした長太い面には、少し尻下りの太い眉毛が、象の眼のやうな優しく、而も力と權威のある兩眼を護つてゐる。額に險に刻む皺、面を染めなす赭色は幾年月の海上生活が作り上げた物と首肯させる。彼が及び腰になつて差し出した大きな手は權を握つたり、帆綱を扱つたりした跡が今猶残つてゐる心地のする頑丈なもので、此方から差し出す小さい手をぐつと暖く握りしめて、

I am glad to see you.

と吐く深切な言葉は力のある而も快活の氣を含んでゐた。

其言葉、其態度更に其面は何となく拉典民族的の快活さを含んでゐる、而もそれは、輕忽でもなく、粗野でもない、力があり、深みがあり、沈着がある、其中には彼のソールの姿がある、ライフの光がある、藝術の色がある、其快活にして而も暖く胸を開いて他を迎へるコスモポリタンの態度はやがて氏の思想の基調であつて、同時に藝術の態度である。「オールメ

イヤス・フォリイ」の末尾にあるニイナの言葉「力と愛とを意味するライフ」は又彼自身の心であり姿である、——と思つた。

幼にして不法の專政に苦しむポーランドに人となり、暴虐の鐵窓に父母を失つた彼は、想像に豊かに、ロマンスと自由とに憧がれる心の満足を求めて、無限の力、無限の神祕、無限の自由を有する海に身を委かす事になつた。海は果して彼を迎へて「航海用の「物」でなくて、親密な友」となつた。

「長い水路や、段々募る寂寞の感や、今日は其質を變じないで、只其力を出して親切に盡し、明日は危険と變はる其海の力に切に依頼することやは海は自分の友であると云ふ感を起さすのである」(「ミラア・オヴ・ザ・シー」)

と云ふ感を深くするに至つたのである。而も海は人間よりか遙かに力強い者、時あらば、彼が幼時から悪んだ暴君をも打懲らす威力を示す者であつた。

「陸地から千哩も離れると何處でも神の眞の平和が初まる、神が、其力の使者を送り賜ふ時は、其れは罪や、僭越や、痴愚なのに對して怒つてなすのでなくて、親心にも生を少し

も知らない單純な心——無智な心を責め警め、只の嫉妬や貪慾を打ち懲らさんが爲である……

生の問題は餘りに大にして、人間の言葉の狭い範圍では迎も表はす事は出来ない様である、——大海は初から其大きな掌中に其問題を握り込め、萬てを知つてゐて、萬ての過誤に隠れた叡智ウイザダム、疑惑中に潜める確實、悲哀と恐怖との境外にある安全と平和との領土を、遂に間違なく、各人に現はすのである」(「ザ・ニガア・オヴ・ザ・ナアシサス」)

此海の心が彼にも體現せられてゐるやうに見えて、親しみと力とを同時に感ずるのであつた。

傍へを見ると細長い瘦せ形の青年が立つてゐる、コンラッド氏は自分の二男であると紹介し、一緒に迎へに來たのだと附け加へた。早速其禮を述べながら握手を交はした。相並んで構外へ出る。コンラッド氏は歩きながら、かすれたやうな口笛を吹くくせがある。丁度潮風が橋頭に鳴るやうにも思はれ、嘗て怒濤逆巻く大海に吸ひ込んだ海氣を少しづつ吐き出すやうにも思はれた。構外には自動車待つてゐて、早速三人を中に抱いてくれた。コンラッド氏の



宅住のドツランコ

宅は其驛から三哩も隔つた處にあるのであるが、其處から態々自動車を驅つて出迎へに來て貰つたのである。

やがて畑や芝生の野を走つて、着いたのはコンラッド氏の自宅、——西洋家屋としては大きな窓を持ち、扁く横に擴がつた二階建の家屋は西洋風と云ふよりは寧ろ東洋風、殊に氏が親しんだ印度沿岸あたりのパンガローを思ひ起させるものである。——氏は先に立つて中に導いてくれた。入ると、玄關は普通の西洋風のよりは馬鹿に廣く、左の壁には昔を記念する爲か帆船の繪が掲げてある、これは何かと聞くと氏は自分の嘗て乗つてゐた思出の多い船であると答へた。

其れに向き合つてゐる部屋に招じてくれた。其處は氏の書齋で三方の書架には本がぎつしり置かれて、中には氏の推賞し、感化も受けたヘンリー・ゼームスやデイッケンズやツルゲーニフやドフトエフスキイやモーパッサンなどの全集もある、キーツやバイロンなどの詩集もある、アメリカ版と英國版との氏の著作集も並んでゐる。窓は例の大きなので、而も低く殆ど床と平行してゐる。窓外には緑の芝生が目路遙かに續いて、草の海と開け、楡か榛かの大木が此處彼處に時を得顔に縁を競うてゐる。氏は其書齋に座を占めて、英海峽から吹き来る潮風の木々に渡る姿に昔を思ひ出しながら、海の香の高い著作に筆を驅るのであつた。

此書齋の影は氏が此處に執つた筆の跡を記憶の鏡に映じ出して、氏が藝術の世界を大海原の如く展開して見せるのであつた。――

「私は海上生活の特殊の境遇の下に人となつたので、其過去の生活様式に特殊の敬虔を有して居る……：「ザ・ニガア・オヴ・ザ・ナア・シッサス」にでも「ザ・ミラー・オヴ・ザ・シー」にでも「青春」にでも「颯風」にでも、私は殆んど親に盡す赤心で、大きな水の世界や、其大海原を幾代も乗り切つた純朴の民のハートや、船に住むと思はれる、正體の分らない有情の物

やに生の揺曳するのを表はさんとは試みたのである」(「思出の記」の序文)  
彼は實に眞摯、忠實、敬虔の念を以てライフの心核に觸れ、且其れを表現せんとするのである。

「私は議論好きでもなく、佞人でもなく、又聖者でもないから、非難することも、賞讃することも、又教へることもしないのである。少しも干渉しない人にはインシグニフィカンスと云ふ事が付き纏はるのであるが、自分は進んで其れを忍ぶのである」(「思出の記」の序文)  
彼は捉はれない純な心でライフに對せんとするのである、其態度が自然主義的であり、リアリスチックである。

「隠忍とは無頓着と云ふことではない。私は多くの人を運び行く大河の岸に、只の傍觀者として立つてゐることを欲しない、同情の聲に表はされる洞察力を自ら要むるのである」

(「思出の記」の序文)

だから彼は只の觀察者でなくて、ソールの底から發する直觀の光にライフの心核を照らさんとするのである、ロマンチックである。

「深く徹せんとするのは無頓着なことではない、ハートの歴史家は情操イデオロギイの歴史家ではない、併し如何に自ら情を制するとも彼は更に遙かに到徹するのである、蓋し彼の目的が笑や涙の底の泉に達しようとするにあるからである。(「思出の記」の序文)

これは彼がライフの心核に徹せんとする態度である、徒らに情に浮かされてライフの皮相に止まらない心相である。

「藝術家は人間の本性中の智識に據らない部分を動かすのである——人間の中に潜むものの中で先天的のものを動かすのである。——それ故に後天的のものよりは、一層永續的の人間性を動かすのである。藝術家は人間の歡喜、驚愕の性能を動かすのである。人生を圍む神祕感を動かすのである、憐憫とか美とか苦痛とかの感性に訴ふるのである。萬有と人間とは同胞であると云ふ潜在感を動かすのである。——利害共同の連帯感を動かすのである、此感こそ、全人類を合致せしめる、即死者を生者に、生者を未生者にと相結合せしめるのである」。(ザ・ニガア・オヴ・ザ・ナアシッサスの序文)

彼は只のリアリストではない、さらばと云つて、只のロマンチストでもない、或人はリア

リスチック・ロマンチストと呼び、或人はロマンチック・リアリストと呼ぶ、「近代小説家」の著者であるフォレットは「コンラッドが一見ロマンサーの様に見えるなら、其れは普通認められるよりはもつと深刻なりアリストであると云ふことである。ツルースの外にツルースがある、それがロマンスである。ツルースの中にツルースがある、それがツルースの生きた心核である。其ツルースの心核こそ最大なりアリストの目ざすもので、而も根氣強く發見しなければならぬものである。コンラッドは實に此ツルースの心核を發見しようとする最大リアリスツの一人である」と評してゐる。

彼は昔のロマンチストの様に夢幻的空想に出發して唯漠然としたロンギングや盲信から神祕夢幻の境界に遊び、徒らに地上を放れ、現實を捨て、只管主觀の幻影を以て、空中に樓閣を作る手合ではない。併しリアリティに出發はするもの、自然主義の文藝家の如く、單に物の外面に止らないで、其内面に透入し、ファクトを單にファクトと見ないで、ファクトとファクトとの間の關係、部分と部分、部分と全體との連鎖を洞察し、更に進んで其根柢に横はるサムシングを透視し、これを表現するのである。畢竟、彼は新ロマンチストであり、新コ

スモポリタンであり、新人道主義者であるのである。

こんな感想の対象を前に私の渡英の目的など語つてゐると、四十餘歳とも見える、梅ヶ谷其處除けと云はん許りにデブブリ太つた女が杖を弓手につき、ちんばをひきながら入つて來た。コンラッド氏は立つて、「これが私の家内です、リユーマチスで足をなやんでゐますので、」と紹介しながら、夫人の跛を辯護する。夫人は髪は左寄りに分けたおかつば、英人としては餘りに横太りに肥えた童顔をにこ／＼させながら、白い熊の手の様なのを延べて握手を與へてくれた。

それから夫人は客室へと二人を連れて行つた、客間と云ふのは其書齋の隣室で廣くはあるが、極めて簡素で、餘りごてごてと飾つてない。

194 私を持つて行つた日本製の縮緬のオペラバッグと、刺繡をした絹ハンカチーフとを夫人に、扇子と浮世繪のプリントしたのをコンラッド氏に贈つた。夫人は殊の外悦にいつたと見え、ハンカチーフをバッグに入れてさげて見たり、此ハンカチーフは餘り美しく、使へないなどと

御世辭を云ふ。

日、「御長男は何處に居られますか」と聞くと、

夫人、「彼は技師になつてセッフィールドの工場に勤めてゐます」

日、「ラフカアイオ、ハーンさんの作をお読みになつたことがありますか」

コンラッド、「え、一三三讀みました、『こゝろ』や『東洋から』<sup>ワットキック・ザ・イースト</sup>などを。非常に面白く感じました。それに刺戟を得て、機會があれば日本に行つて見たいと幾度思つたか知れません」

日、「では、海上生活の御當時、日本へは一度もお出でになりませんでしたか」

コンラッド、「ハイ、残念な事をしました、支那迄は行きましたが、只今日本の品を頂戴すると一層行つて見たい氣がしますが、もう此年では行けさうにありません」

日、「お年は幾つですか」と問ひかけようとしたが、外國で他人に年齢を聞くことが非常に失禮なのを思ひ起して此言葉はかみ殺し、

「何に、其お體では大丈夫です」

などゝ談をしてゐる間に中飯時(一時半頃)となつたと見え、給仕人の相圖に、食堂——入口

の左の室——に案内せられた。

私の右にはセクレタリーが坐し、向ひにはコンラッド父子、横には夫人が座を占めた。新鮮な肉や肴の御馳走、最後のデザートに出された李や梨は氏の庭に出来たものであるとの夫人の説明に一層美味しく感じた、續いて出された茶には、普通の英國風のと違ひレモンの薄い片が入つてゐた。今度はコンラッド氏がこれは故國ポーランドの風習である、と説明してくれた。氏の作の色に香にスラヴ的の所があるのが、茶にも偲ばれるのであつた。

食後少し庭を散歩しようとのコンラッド氏の提議に私は同氏夫婦と共に裏の庭に出た、コンラッド氏は烏打帽にステッキ。夫人は帽子も被らず、杖をついて難儀さうに足を運ぶのであつた。庭には種々果樹が植わつてゐたり、薔薇や色々の草花などが咲いてゐたりした。夫人は木に美しく熟してゐる李や梨を指しては、先刻食卓に上つたのはこれの兄弟であると話したり、大輪の薔薇の花を摘んでは私のモーニングのボタンホールに挿してくれたりなどした。其處に二男が自轉車を走せて来て、やがて、生籬の中を割つて外庭に出た。

「ラフカディオ・ハーン氏の妻君は日本人だと聞いてゐますが事實ですか」とコンラッド氏が話の緒を出す。

日、「ハイ、日本婦人です。私の宿の直き近くに住んでゐられます」

コンラッド、「君はハーン氏を知つてゐますか」

日、「え、知つてゐますとも、私等の英文學の先生でした」

夫人、「ハーンさんの遺兒は幾人ありますか」

日、「慥か四人と思ひます、御二男はハーン氏の長男によく似てゐられます」

コンラッド氏の二男が丈がすらりとして、面長で、姿と云ひ、態度と云ひ、何處となく小泉一雄君を思はしめたので斯う云つたのである。すると二人は

「へー、さうですかねえ」

と殆んど同時に言葉を發して、其類似點を非常に不思議に思ひでもするかのやうであつた。或はコンラッド氏は自分の一生をハーン氏の其れに思ひ合はせたのかも知れまい——一は東洋の島國に歸化して日本婦人との間に子を擧げ、一は西洋の島國に歸化して英國婦人との間に



子を擧げたのである。

やがて籬の外に出ると、遠く擴がる芝生に小溝を隔つて續いてゐる外庭。二人の影を撮らうと思つて許しを乞ふと、二人は喜んでそれに應じ早速相並んで芝生に立ち、永い記念として、私のカメラに入つた、今一枚住宅の影も其後を追うて、ロールの中に加はつた。

コンラッド氏は再び私を書齋に導いて呉れた、相對して色々と言ふ。

「日本には少しは私の作が讀まれてゐますか」

「え、讀まれてゐます、尤も凡十七八年前私が貴著を讀み初めた頃はたんとは無かつたやうですが、段々色々の人によつて紹介せられ、貴著の文學的の價値が知られるやうになると共に今や一般に愛讀せられてゐます、私も數年前に貴下を日本文壇に紹介し、當時其所載雑誌を一冊お送りした筈ですが御記憶ですか」

「え、有りがたう。慥かに貰ひました、記念に保存してあります。頼と讀めませんが」  
「貴著が大陸に翻譯されてゐますか」

「え、「ザ・ニイガア・オヴ・ザ・ナアシサス」と「決闘」<sup>デュエル</sup>とが獨逸語に譯され、ジャン・オーブライ氏は依つて『アンダー・ウェスターン・アイズ』が佛蘭西語に譯されてゐます。オーブライ君はよく私を解した、文筆の才のある人で、これからも續々拙著を譯さうとしてゐたのですが、惜しいことには最近病歿しました」

といひながら、其翻譯書を出して見せる。

「日本には未だ私の譯はありませんか」

「短篇が一二譯されてゐる筈です。長いものでは、文學書出版で日本一の稱ある新潮社といふ書店から「オールメイヤス・フォリイ」を出したいとか、出すとか云つてゐました」と、私は版權の關係が如何なつてゐるかがよく分つて居なかつたから、出る筈になつてゐる事は聞いてゐたが、曖昧の返辭をして置いた。

「まだ續々貴著の翻譯を希望してゐますが、御承諾下さいますか」

「よろしいともく、どしどし譯して下さい」

先づこれで日本でコンラッド氏の譯書を出しても大丈夫だと一安心すると共に、氏が案外翻譯

權などに無頓着なのに驚いた。談をしてゐる中に時は容赦なく経つて時計を見ると三時近くとなつた。

「餘り長居しては失禮ですからお暇を致します。それによい序ですから、私はこれからチーサーの物語で有名なカンタベリー古刹に参詣して見たいと思ひますから、これで失禮致します」

「イヤ、私には別に邪魔ではない、今日は一日君の爲めにリザアツして置いたのだから、今少しチイ・タイムまでゐてくれ玉へ、すると、私がああ寺院迄お送りするから」  
如何にも親切な言葉に濟まないと思ひながら、其れに應ずることにした。

「まあ落着いて、緩つくり談し玉へ」

「有りがたうございます。先月トマス・ハアディさんを訪ねましたが、大分の歳ですね」

「さうでしたか、それは結構です、私も前はちよい／＼遇ひましたが、此頃は頓と遇ふ機會がありません。翁は私よりか二十も年上です」

「ハアディさんに遇つたのと貴君あなたにお遇ひしたのとは餘程違つた氣分が致します」

「さうでせうとも、私のやうに海にばかりゐたものとはね」

「作も大分違つた感じが致します」

「それはその筈です、同じ自然でもハアディ翁のやうに静止した自然に對するのと、私のやうに動く自然、飛躍する自然に對するのとは自ら違ふ譯です、人は靜の中に動を讀むことも出來ますが、動の中にも靜を讀むことが出來ます。又、其表現の姿も自ら異つて來ます」  
「ですが、ハアディ翁の作からも宇宙は Will とか Power とかの現はれであるやうに感得せられるのでありますが、貴下の作にも結局さう云ふ意を伺はれるやうであります、如何ですか」

「一面さう云ふ點もありますが、又異つた點もあります、がそんな事はチト理に落ちますから、よしませう。よく私の作を讀んで感得して頂きたい」と議論の道を切つた。

「チト談が理に落ちて濟みませんでした。時に英國の詩人中であなたは誰がお好きですか」

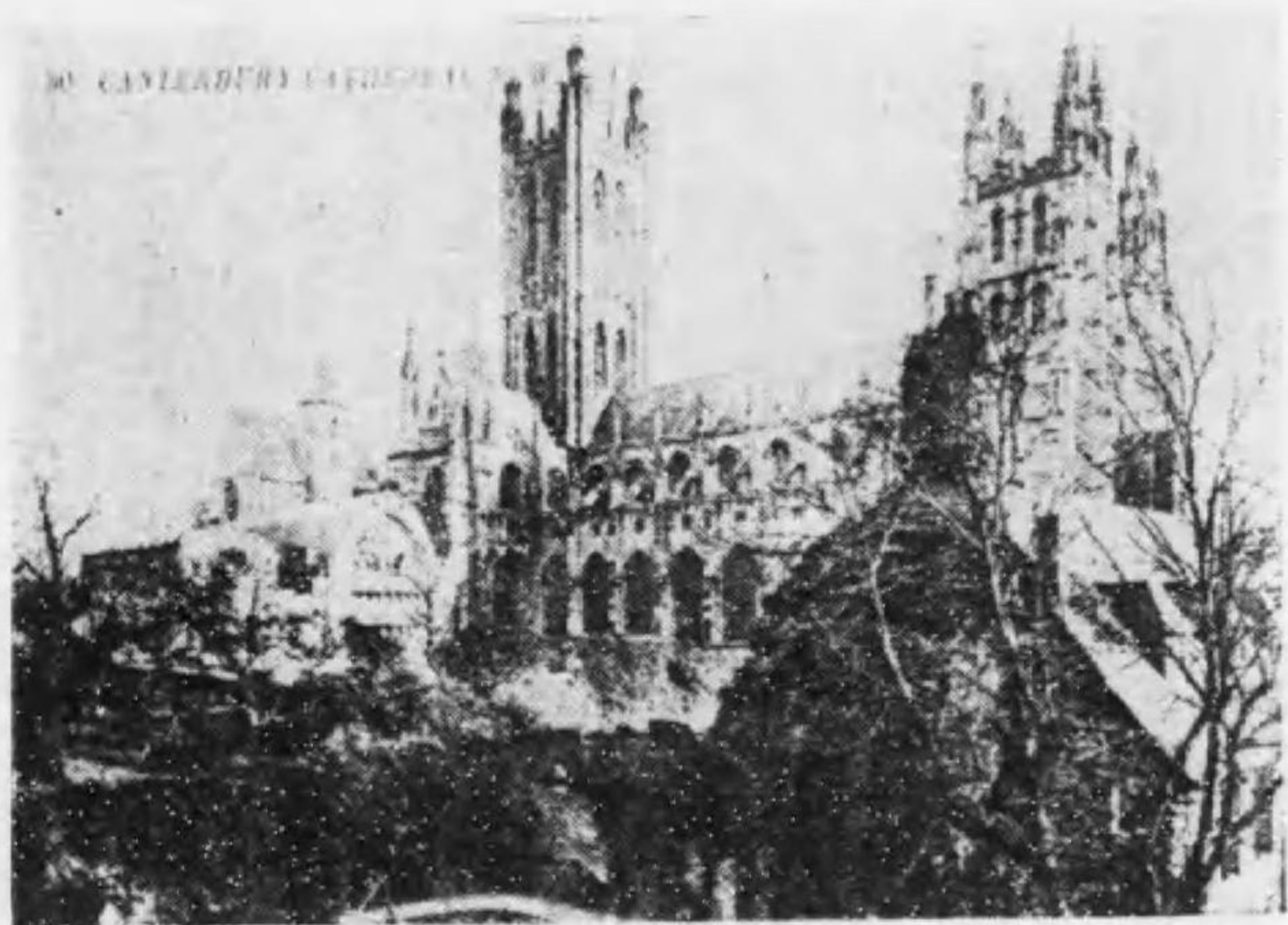
「さうですね、まあキーツですね」

「何處がお好きですか」  
 「あの表現法がです」  
 如何に氏が表現法に苦心してゐるか、察せられると共に氏が「思出の記」の序文に云つてゐる。

「我に適確な言葉、適確なアクセントを與へよ、すると吾れは世界を動かさう、——他を深く動かさんが爲めには、吾々は注意しながらも、普通の官感の強度をも越えなくてはならない、——それは天真爛漫にして、而も亦止むに止まれずして、其策に出でなくてはならない、丁度役者が舞臺上に立つて普通の會話以上に聲の調子を高めるのと同じである。がこれも猶已むを得ず爲なくてはならない、これは確かに罪ではない、併し危険は作者が自己の誇張の犠牲となつて、確乎たる眞摯感を失ふに至るにある……」

の技巧論が思ひ出でられて、スタイリストと呼ばれたり、言葉による色彩の彫刻家と云はれたりするのが、實にもと首肯されるのであつた。

「談は異ひますが、現代の英文壇の新進作家では誰が有望だと思ひですか」



院寺大イリペタンカ

「さうですね、一寸六かしい問題だが、私の感じてゐる所を挙げると、小説家ではローレンス、メイ・シンクレア、クレメンズ・デーモン、モーリス・ヒューレット、詩人ではミッドルトン・マアライ、ジョン・フリーマン、ドリンクウォーター、詩人として又批評家としてはエドワード・シャंकス、ジョン・スクアアなどであります」

色々談をしてゐる間に時は何時しか経つてチータイムの五時頃となつた、で食堂に招ぜられて、レモンチーにケーキ、薄く切つたブレッダンド、バターなどを御馳走になつた。

家を辭するに當つて、コンラッド氏は、記念にとて、氏自身の大きな近影と、自著“Secret Agent”

とに署名して恵んでくれた。尙、最近出版の“Notes on Life and Letters”を書店から送らすことを約した。(果して、一三日後出版書肆から“With the Author's Compliments”の言葉を有するカードを添へて其書を送つて来た。)

其れから、夫人に禮を述べ、別れを告げ、迎へられた時のやうに自動車に乗せられ、コンラッド父子に送られて、カンタベリイ古刹にと向つた。

やがて巍然として天空に聳える大伽藍の古びた門前に着いた。早速自動車を降り、コンラッド父子に本日の厚い好意を感謝し、暖い握手を交はして別れた。

カンタベリイ古刹は其初を此地が六世紀頃ケント王朝の首府であつた頃に發してゐるが、其れが名聲を博し、と同時に英國の教權を司り、最高の寺院となつたのは十二世紀の頃、當時の大僧正トマス・ア・ベケットが殉教したのに初まる。今も猶英國寺院中の最高權を有し、宮中の席次なども、王の次が首相、其次がカンタベリイの大僧正である。ベケットが神壇の下に殺されるや、聖者よ、殉教者よと崇められ、其五體は寺院中壯麗な廟中に祭られた。奇蹟其處に現じ、祈れば病者は忽ち醫せられ、拜すれば貧者も富者となる、と世に傳へられた。そこ



アサーヨチのカタマナイリ物語に出る來る  
騎馬の巡禮隊

で上下貴賤の別なく、遠くより近きより、此處に巡禮する者其數を知らないほどであつた。處が泥棒が大道に出沒して參詣者を襲うた。そこで參詣者は其れを防ぐに足るだけの人數となる迄待合せて騎馬隊を作り參詣したものだ。其隊の仲間は旅中の無聊を慰める爲めに馬上順繰りに珍談奇聞を語り合つた。十四世紀チヨーサアの頃には、カンタベリイ詣は時の流行となり、慰みともなつたのである。夙にルネッサンスの風潮に吹かれたチヨーサアは自己の文藝を盛るに其カンタベリイ詣、馬上物語の形式を思ひ付いたのである。かうして出来たのが彼の有名なカンタベリイ物語なのである。

門を入つて見ると、日曜の事とて、戸は閉されて、中に入る由もなかつたが、六時頃昔ながらに響く鐘の音に善男善女の參集する其夕暮のサーヴィスに戸が開くのを待つて中に入つて見た。ウ

エストミンスター寺院のより更に大きな廣いネーヴの薄暗い光や色に昔を偲ぶと共に、チャーサーの文勳を追懐し、ルネッサンスの一顯現であるチンダルの宗教改革の偉業をも偲んだ。日も漸く暮れかゝつて來たので、折柄昇る夕月に送られ、沈み行く入日に導かれて、車中の人となつた、昔の様に馬上の旅行でもあつたらチャーサーのやうな面白い物語を聞くことが出來たかも知れないが、殺風景にゴウ／＼と走る車中では別に興味ある談も聞くことが出來なかつた。只窓外に暮れて行く野原に見える牛や羊や鶏の影、綠葉の蔭に腕を夕日に光らせてゐる大きなウインドミルなどが、チャーサーの昔を偲ばせ顔にしてゐるのみであつた。

(一九三二、九、三)

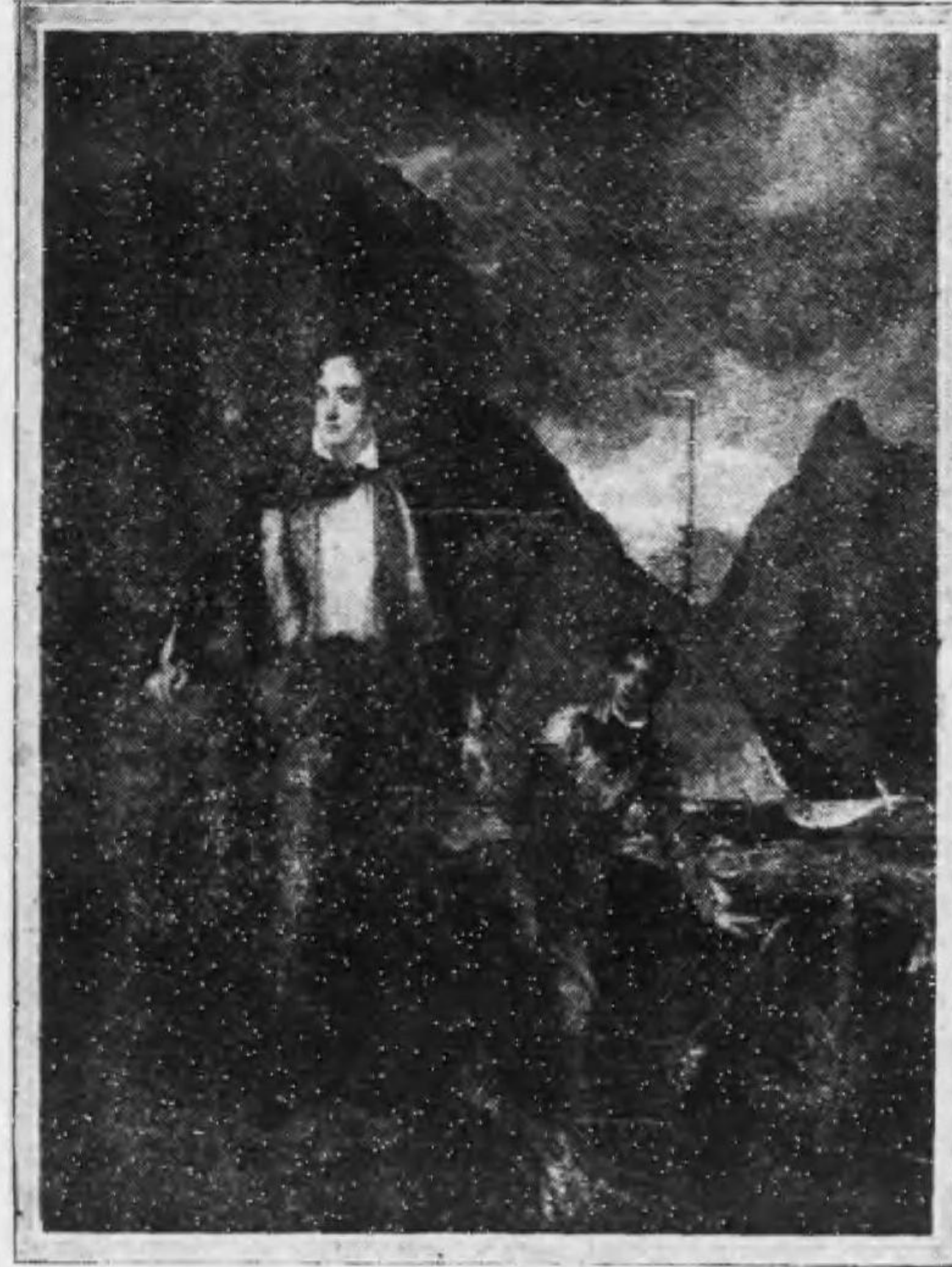
## バイロンの自然觀

自然！

人間が習慣に陥り、人工に捉へられて、眼を外に開いて、天地の意に徹する力を失ひ、眼を内に轉じて、自我の本性に目ざめることが出來ない時に、其天來の福音として、訪れるものは常に此「自然」である、「自然」は解放の姿であり、永劫の相であり、眞實の面影である。宇宙の意も其中に讀まれ、自我本然の聲も其處に聞かれる。かくて、十九世紀のロマンチズムも亦「自然に歸れ！」の福音から源を發した。

「自然」を狭く見れば、外界即人間以外の天地の諸相を指す、これを廣く見れば、人間をも含む大宇宙の全相を指す、人間が習慣や、常套や、形式や、人工に捉へられ、自我の本性に目が眩む時、飄然面を轉じて、自我本然の姿を映し見る鏡は偽らない、捉はれない外的自然である。此外的自然に直面して、自我の内的自然に目を開く時、其處に共通の力の流れてゐる。

るのに気がつく、其處に自我は自然と融和し、共に呼吸を一にする。其境地に於ては自然は



革命の詩人ロイバ

單なる自然でなくて、宇宙の靈の顯現である。自我も亦只の自我でなくて、宇宙大我の一分身である。其處に自我の解放もあり、主張もあり、常套打破もあり、改造もあり、革命もある。其れ故に、「自我の解放」を根柢の精神として起つた十九世紀の英國ロマンチズムも亦ワッヅワスを先頭に

「自然」を其大なる特徴の一とした。

併し其自然を見るのに人に依つて其見解若しくは基調を異にしてゐる。

吾れは感じたり――

氣高き思想の喜びもて、

吾れを動かす幻影を、

更に深く融合する、

云ひ知れぬ物の莊嚴の感を、

其の住所は入日の光、

空吹く風に、大和田つ海

青空に又人の心。

其云ひ知れぬ物こそ

思考力ある物みなや

思考の有ゆる對象を

動かし、

萬有を流轉し行く  
 動機にして又靈たるなり。

〔チンタン寺院の數哩川上にて詠める詩の一節〕

これは自然詩聖ワヅワスの自然觀である。此萬有神教的自然觀は、又シェリイにもあり、バイロンにもある。併しワヅワスに在つては、自然は冥想の自然であり、靜寂の自然である。其處に

吾が最も純なる思想の錨、

吾がハートの乳母、指導者、保護者、

吾が徳性の本源。(同上)

を見出だしたのである。彼は又斯う歌つてゐる――

嗚呼自然!

汝は吾が氣高き默想を養ひたり、

吾等の此不安なる胸にとて、

喜びと、最純なる情の

永久の原理とを

吾は汝に見出だしたり。

〔「アレルド」の一節〕

實にワヅワスに在つては自然は哲人であり、指導者であり、原理であり、理想である、更に靈想の發現である。

シェリイの自然を見るのはワヅワスの如くに哲學的でないけれども、矢張宇宙は生きたもので、其各部分は生ける全體の一部であると云ふ思想に於ては一である。併しシェリイに在つては自然は哲人や、指導者でなくて、暖い友愛の同胞である。彼は鳥獸草木を呼んで兄弟姉妹となす。實に彼に取つては「自然」は愛の顯現である。「解放せられたブラミーシューズ」のエシヤこそ此宇宙のライフを作る愛の體現である――

(虚空に聲ありエシヤを歌つて曰く)

「生中の生! 汝の唇は

其愛もて口より洩るゝ

吐息を輝かす。

汝の微笑は冷き空気を

火となして後消えて行く

.....

エシア

吾が靈は美しき船にこそあれ、

眠れる白鳥の如く浮び行く汝の

妙なる歌の銀波に乗りて、

吾が呼吸する氣は愛にして

波上の風に抱かれ行く。

かくてぞ吾は此地と天そらに感ずるものとを

調和する。」

シユリイはかくて暖い自然、聖い平和な自然を見た、愛した、且歌つた。

バイロンに至つては、自然を見ること、此二詩人とは大に趣を異にしてゐる。

「自然の普通の玉座、

自然の森を、自然の荒野を、

自然の河湖を、

吾等の理智に對する自然の熱烈なる

應へを、」

如何に屢々吾々は忘るゝぞ

寂然として獨り暮す時。

星や山は生きざるか

彼に靈あらざるか

水滴垂るゝ洞窟も



暗涙にむせぶ情を有せざるか、  
否々、——彼等は吾等を口説き

拉し去りて

自己の境界に導き行く。

此土の五體を溶きて

吾等の靈を其大なる濱邊に併呑す。」(「島」の一節)

此の如くバイロンもワヅワスやシェリイのやうに、宇宙の靈の瀰漫してゐることを觀する。併し彼の見た自然、彼の歌つた自然は、靈想の表現でもなければ、愛の顯現でもない、實に力の發現である。だから、彼は英國の平和な、靜穩な自然を好まないで、瑞伊の雪を頂く峻峰、荒れる水、狂ふ嵐、飛ぶ雲を愛した。更に土耳其、埃及などの蠻地の自然を愛した。彼に取つては自然は生であり、意であり、力であり、動である。

ワヅワスは永劫不死の靈を小兒に見出だした。微笑む小兒の如き英國湖水地方の自然に其れを感得した——

「空に虹見れば吾が胸躍る

生れし時にしかありき、

大人となりし今亦然り、

老いたる時もかくあらん、

さらずば寧しろ死なまほし

實に子供は大人の父

願はくば生れしまゝの孝心もて

吾が一生の一日一日をつなぎたし」

が、バイロンに至つては人跡稀な峻峰幽谷に基督教的文明に馴致されない野蠻未開の地や民に自然の力に生きる境地を見だしたのである——

「親愛なる自然は

なほいと懇切なる母にぞある

常にやさしき顔ばせを變ずれども。

自然の肌もあらはの胸より  
 飽かん許りの食を取らしめよ、  
 彼女の愛兒ならずとも  
 なほ其乳飲兒なれば。  
 嗚呼！ 彼女は粗野なる顔ばせの時こそ  
 いと美しけれ、  
 如何なる文化も  
 彼女の道を汚し得ざれば、  
 彼女は日夜吾に微笑めり、  
 誰しも彼女に氣づかさり  
 吾は心にとむれども。  
 かくて吾は彼女を求めに求め  
 憤れる彼女をこそいと愛しけれ。

アルバーニアの地！  
 汝に目を注がしめよ  
 蠻人の粗野なる乳母たる汝、  
 未だ十字架の影なくして  
 汝の尖塔聳ゆ、  
 青白き上絃の月は  
 谷に輝けり、  
 都の視野にながめやる  
 糸杉の森の木蔭を洩れて。」

〔チャイルド・ハロルド〕の一節

實に赤裸々な自然、粗野なる顔ばせの自然、憤れる自然、基督教的文化の及ばない天地が最

パイロンの心を引き、美を感じしめた、力の壯美が其處に表はれてゐるからである。」

「嗚呼！ 夜よ嵐よ闇黒よ

汝等はいしくも強し、

されど其力の中にも愛の現はるゝは

宛ら女の黒き眼の光に似たり、

遙か峰より峰に

殷々たる雷霆躍りて

轟々と巖間に響く。

淋しき一團の雲より來る聲ならで、

山又山の發する言葉ぞ聞こゆる、

ユラ山は霧の幕の中より

應こたへをなす

高く呼ばはる樂しげなる

アルプスの峰の言葉に。」

〔チャイルドハロルドの一節〕

夜にぞある、いとも壯烈なる夜！

汝は眠る爲めに送られざりき、

吾れをして汝の猛烈にして

大なる歡樂に與からしめよ——

嵐の又汝の一部とならしめよ、

如何に湖面輝き、燐火海に燃ゆるぞ、

大なる雨滴は躍つて、地上に下る

或は暗黒となり、或は丘陵山岳

相應じて聲高らかに歌ひ樂しむ、

恰も若き地震の誕生を祝するが如く。」

〔チャイルドハロルドの一節〕

パイロン嵐を愛す、其れは力の現れであるから。彼は夜を愛す、其れは神祕幽玄の魔力を蔵するから、鬼火も其處に燃え、電光も彌力を語り、星辰も宇宙の悠久無限の大を示す。

(ユングフラウの山頂)

「月は昇れり満々と山まかにも又輝きて、

其處なる雪を

世の常人つねびとの足に踏まざるも

吾等は夜なく踏みて

足跡更に残すなし、

山の氷の荒海の玻璃と輝く其上に

吾等がかすめて飛んで行く

其起伏せる白波を。

其波状は宛ら

轉び行く暴風雨の

泡の忽ち氷れるが如し、

又恐ろしき渦卷の面影にも

さも似たり、

此のいとも險しき異様の尖峰は

何時の昔か地震の作りし物、

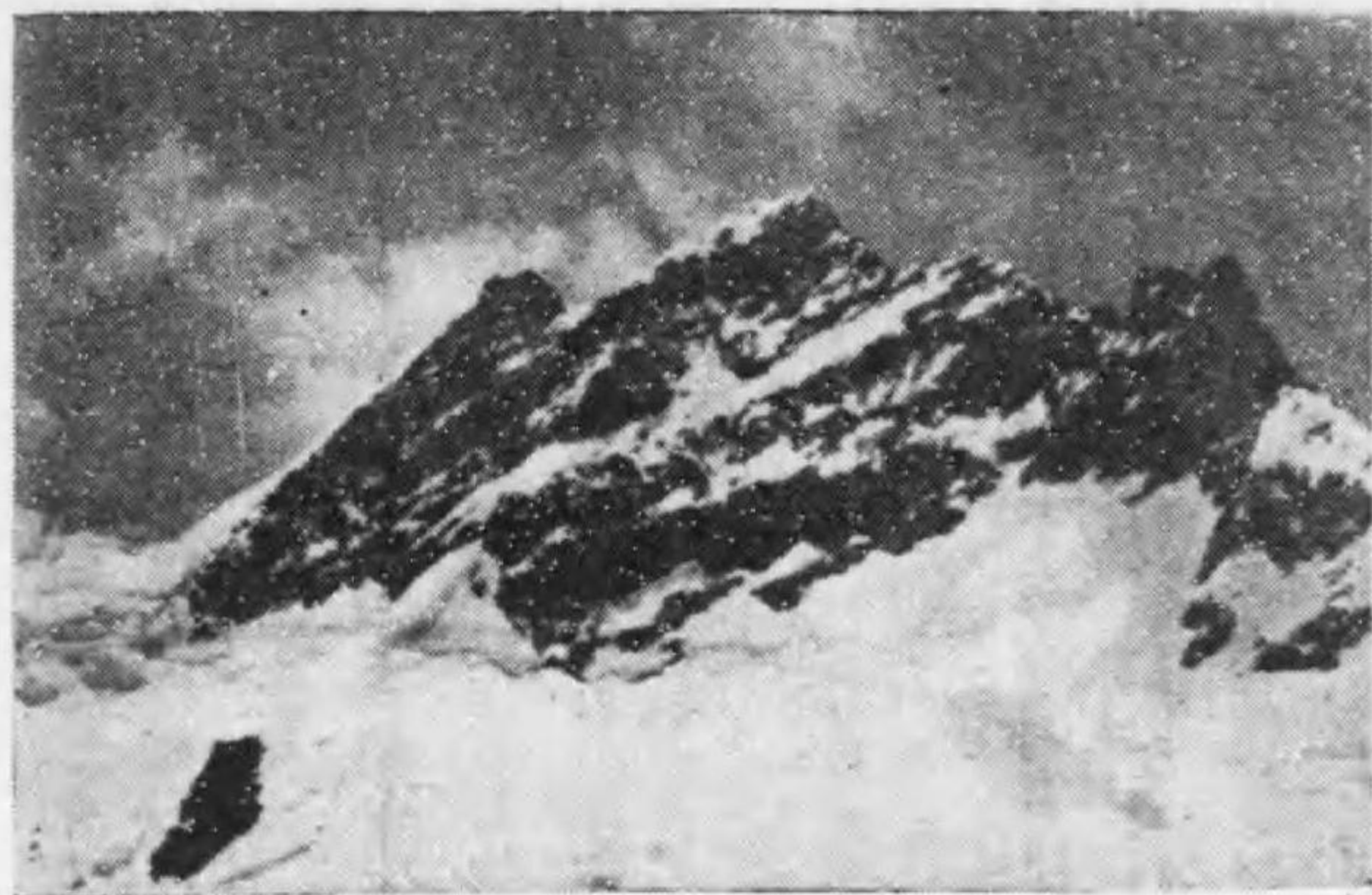
過ぎ行く雲も足を止めて休むなり、

此處ぞ我等の酒盛に

又勤行こんぎやうに聖き所なる」

(「マンフレッド」の一節)

ユングフラウの山！ ラスキンは「世界中最美しい」と「思出の記」中に述べ、テニスンも亦「自分の見た中の最莊嚴な景色」と云つて、讚歌を捧げてゐる。時の力を脱し、太陽の偉力に屈しない千秋の雪は夏猶峰を覆ひ、谷を埋めてゐる、今は登山電車が設けられて、六月の初から九月の初迄九合目位迄開通する、六七合目あたりからは、車は全く隧道をくゞつて



ウラフゲンユ峰一の山連スプルア

登る、寒い爲めに車中暖房の設備がある、高い爲めに呼吸困難を感じる、九合目迄登ると、其處すら、極暑の頃猶白雪皚々として四邊を掩ひ、其れから上はスキーにでも依らなければ登ることが出来ない。嵐は四方の谷から雲霧を吹き上げ、吹き下ろして、或は暗く、或は明るくする、時には白雪粉々四方に飛散して、天地晦冥となる、辛うじて雪の岩角に立つ時

「自ら強くあれ、然らざれば

吾れ汝を殺さん」

と何處よりか囁く聲を聞くやうである。此處に善惡の觀念なく、慈悲救援の力もない、弱者怯者の聲を許さない。山はアリマネスの靈に、斯ういふやうで

ある――

「土や大氣の王！

雲や水を歩み

手には四大の笏を持つ、

彼の至高命令に

其四大は碎けて渾沌となる、

彼れ呼吸すれば嵐起りて

海を動かす、

彼れ語れば雲はこれに應へて

雷霆を轟かす、

彼れ凝視すれば其眼よりは

日光飛ぶ、

彼れ動けば地震ゆるぎて

世界を千々に碎く。」

彼が踏む所には火山噴出し、

彼の蔭には疫病起る、

彗星は彼の先驅となつて

爆聲高く空を飛んで行く、

彼怒れば遊星も灰と化す、

戦は日々に彼に犠牲を捧ぐ、

死は彼に貢を納む、

生は彼のものにて無限の

苦痛を伴ふ、

彼は有りとする物の靈にぞある。」

〔マンフレッドの一節〕

アリマネスこそ「見えざる力の王」である、其れはユングフラウに宿り、マンフレッドに宿る



景風の湖アグネゼ

と共にバイロンに宿り、更に人類に宿る、又更に宇宙に宿る。ユングフラウの雪の峰に立つ者、誰かマンフレッドと共に

「力なくして、汝の仲間に在ること能はず」と叫ばない者があらう。

力は休止することなく、動いて止まない、宇宙は此力の具現である、だから、夜に於いても――

「天地静寂たるも眠らざるなり  
呼吸を控ゆるも

吾等の最深く感ずる時の如し、

静寂なるも

吾等のいと深き想に耽る時の如し、

天地静寂たり、空に輝く星辰より

静かなる湖水、山なす岸に至る迄  
凝つて強烈なる生となる」

〔「マンフレッド」の一節〕

と観するのである。だから此静寂は消極的でなくて、積極的である、力のない、死んだ静寂  
でなくて、力内に充滿し、鬱勃として、時を待つ姿である。實にバイロンにはゼネヴ、湖畔の  
夜は生きた、力の静寂であつた。

「吾は自分のみに生きずして

吾を圍む物の一部となる

されば吾には高き山は感情なり、」

.....

山や波や天は吾の又吾が靈の

一部たること

恰も吾が彼等の一部たる如からんか」

〔「チャイルド、ハロルド」の一節〕

「自我」は自然——宇宙の一部で、自然——宇宙も亦自我の一部である、言葉をかへて云へ  
ば自然——宇宙は自我の顯現である。而も自然は力の顯現であれば、自我はやがて、力を其  
根柢とし、更に力の本源意志を本體とする。

意志の發現！ 動いて已まざる力！ 其進路を妨げる物があれば、善惡の差別なく、破壊し  
て假借する所がない。

「罪なるもの絶對に罪たらず

罪となるも徳となるも

四圍の事情に依るのみ」

（カイン）

「善も惡も其れ自體には

何の力を有せざるが如し、

只汝の意志に依りて然るのみ」

(カイン)

「神力強しとて必しも

善なりとは限らず」

(カイン)

力は宇宙の法則である、力の前には人の作つた道德も宗教も其價値を失ふ、力はこれを破壊して更に顧みない、悪魔的である。「マンフレッド」も「カイン」もかうして生れた。バイロンが近代悪魔主義の始祖と云はれるのもこれを以てである。

破壊しても進む力！ 其處に努力があり、奮闘があり、苦悶がある。奴隸、服従は力の屈辱である。服従して安きを求め、奴隸となつて幸福を求めることは力ある者の欲せざる所である。だからルシファは

「彼の力の奴隸たる以外には

我れ何たるも妨げず」

「若し幸福が奴隸たることにあらば

吾は幸福ならず」

と云ひ、カインは

「吾れ幸福に何の關する所あらん、」

其は吾れを吾が種族を

卑しくするなれば」

と叫んで、奮闘苦悶の快を選んだのである。

力は永久に動いて止まない、其處に奮闘あり、抵抗あり、苦悶がある。だから苦悶のある所力があり、生命がある。かくて、苦悶は不死の證左である、苦悶があればこそ、生の永遠、力の無窮を豫想することが出来るのである。

シェリーのヒーローは解放せられたプラミューシューズで、愛と喜悅とを以て、理想の境地を築かうとするが、バイロンのは縛せられたプラミューシューズであつて、奮闘、苦悶、無限の力



を以て自分の縛繩を断ち切つて、自由の境地に至らんとする。そこでシュライに在つては革命は建設を意味し、バイロンに在つては破壊を意味する。

要するにバイロンの自然は力であり、意志である、力、意志を本體とする自我である。其現はるゝや、激する自然、奮闘活躍の自然となる。火は發して火山となり、水は躍つて瀧となり、渦を巻き、泡を立てる。土は凝つて巖となり、断崖絶壁となり、峻峰を氷に尖らして天を突く、大氣は飛んで嵐となり、雪を降らし、雹を投げる、雲を驅り、雨を御して、雷霆霹靂を發射する。其四大凝つて、五體となるやマンフレッドとなり、カインとなる。此自然の怒號咆哮は勇しい壯美の樂となつて、天に轟き、地に響く。此力の自然、此壯美の樂こそ筆に籠つてバイロンの詩となつたのである。

## イエーツが藝術の精神と能樂

所謂ケルチック・ルネッサンスとして知られてゐるアイルランドの新文藝運動はデューヂ・ムーアが其自序傳とも云ふべき「Hail and Farewell」の中「Vale」の文中に云つてゐるやうに「イエーツに起り、イエーツに歸へる」と云ふも過言ではあるまい。實際イエーツは此新文藝の先導者でもあり、中心でもあり、支配者でもある。就中アイルランドの新劇運動の如きは殊に然うである。此新劇運動は或批評家の云つてゐるやうにイブセン劇即思想劇の新運動が歐洲の天地を風靡して、其餘波が此アイルランドにも及んだやうにも見えるが、必ずしもさうと見ることは出来ない。中には思想劇に傾いた作家も出てはゐるが、其れがアイルランド劇の特色ではない。素よりイブセン劇が一種の刺戟となつたには相違ないが、其實質其藝術的態度に至つては大に趣を異にしてゐる。其證據にはイエーツに依つて認められ、勵まされ、引立てられて、其天才を發揮し、而もイエーツと同じ藝術的見地に立つシングは「イブセンヤゾ

ラは人生の印實を取扱ふのに歡喜のない、色彩のない言葉を以てする。舞臺にはリアリティがなくはならないが、同時に歡喜がなくはならない。智的近代劇の失敗したのは此點を缺いてゐる爲である」(プレイボーイの序文中より)「劇はシンフォニーのやうなもので、物を教へたり、證したりするものではない、問題を解剖したり、主義主張に依つて教へたりする手合は希臘の醫師ガレンの處方書と同じく、舊式になつて仕舞はう、イブセンは即ち其れだ。——」(チンカアス・ウツディングの序文中より)と云つてゐる。これを見てもアイルランド劇がイブセン劇と同種のものでないことは點頭かれるのである。

イエーツは「アイルランドの文藝運動」と云ふ論文中に斯う云つてゐる——

「アイルランドの文藝は文化人の特質である思想感情の複雑と云ふことを排除しないでは其最初の靈を得ることは六ヶしからう、なぜと云ふに、アイルランドの文藝は、文化が未だ深く及んでゐない所なら何處であらうと、平民が有らゆる宗教有ゆるロマンスの根柢に眼を注いでゐると云ふ事を覺るからである。此様な人々の詩は近代の詩人間には殆んど知られない烈しい情熱の尖端にわなゝくのである。……………」

貧しくて、質朴な民の子等は、彼等の不斷の宗教的信仰から、傳統的信念から斯ういふ事を覺るのである——此物質界は何の意義もない、有ゆる夢想の實現せられる靈界こそ此上もない貴いものである……………」

情や神祕はアイルランド文藝の特色であつて、やがてシングヤイエーツなどの文藝の根柢である。近代人の所謂理智の分析の手を離れ、情の根柢に立つて、眼を宇宙の大に放つ時、其處に神祕が現れ、宗教が生じ、ロマンスが生れる。其處に傳説が意義を生じ、メタファーが力を發する。其處には分析がなくて、統一があり、調和がある。其圓滿な表現の姿は即美である。アイルランドの文藝否イエーツの文藝は潜んでは神祕、幽玄の靈となり、發しては音樂的、詩的調和の美となる。

神祕幽玄の靈が現はれるには常にシムボルの姿を取る、即「シムボルは神祕の言葉」とも云ふべきもので、神祕主義の文藝は常にシムボリズムの相をなして現はれる。

だからイエーツの文藝はアイルランド文藝の特色である神祕主義を含むと共に、シムボリズム

ムの相を具へてゐるのである。アーサー・サイモンズも其著「シムボリスト・ムーヴメント」をイニーツに捧げて、巻頭に彼を英國象徴運動の代表者と揚言し、アイルランド文藝運動は其表現の一であると云つてゐる。

シムボリズムにも種々の相があつて、其分類も人に依つて一様でない、イニーツは其著「Ideas of Good and Evil」の中、「繪畫に於けるシムボリズム」「詩歌のシムボリズム」及「キリアム・ブレイクと彼の神曲の挿畫」の三章に於て、彼のシムボリズムの意義を明かにしてゐる。即ち彼はシムボリズムを智的のものとの情的のものとのに分ち、前者は眞のシムボルでなくて、後者こそ眞のシムボルであるとなし、次のやうに云つてゐる——

キリアム・ブレイクは「幻像或は想像は——シムボリズムを是等の言葉で表はして——」フレイタム「實際に或は變ることなく事實存在する物の表現である。寓話或は諷諭は記憶の娘に依つて作られる。」

とブレイクの言葉を引いて其意見に賛同し、智的象徴の一種である寓話或は諷諭を排斥し、尙獨逸人のシムボリズムに對する見解を引用して——

「シムボリズムは他の方法では其れほど完全に云ひ現はせない物を云ひ現はし、其れを理解するには相當の本能を要するのである。が、アレゴリイは他の方法でも同程度に又はもつとよく云ひ現はせるものを云ひ現はし、又其れを理解するのに相當の智識を要する。前者は無言の物に聲を與へ、無形の物に形を與へるが、後者は聲も形も具へた有意物中に更に聞かれもし、見られもする何かの意味を判讀するのである——

「單なる物語又は單なる肖像畫でない藝術のみが象徴的である。——  
「若しも人や風景を動機と行爲、原因と結果の羈絆、其他愛以外の有ゆる羈絆から脱せしめると其れは目の當りに變つて無限の情緒、完全な情緒、神の本質の一部の象徴とならう。何ぜと云ふに吾々は只完全を愛し、萬物を愛せんが爲めに、吾々の夢想は萬物を完全化するからである。……シムボルは萬ての羈絆を充分に脱して完全を語る唯一のものである……」

(繪畫に於けるシムボリズムの中より)

實にイニーツの意味する眞のシムボルは理智の羈絆を脱し、ハートの底から生れ出る靈妙無

碍の情緒の中に完全を感得するものでなくてはならない。彼のシムボリズムはシムボリズム分類中のムード・シムボル或はイモーション・ナル・シムボルに属するものである。

「有ゆる色、音、形は其本来の精力の爲めに又永い聯想の爲めに説明し難い而も繊細な情緒を喚起する。或は或肉體を離れた力を吾々の間に呼んで來るとも思はれる。其肉體を離れた力の吾々のハートの上に残した足跡をこそ情緒とは呼ぶのである。而して、音、色、形が音樂的關係、美しい相互關係にある時こそ恰も一の音、一の色、一の形のやうになつて、其音、色、形の三の喚起から生じながら、尙渾一の情緒を喚起するのである。」

有ゆる種類の相となつて現はれる形式フォームの重要なことは誰れしも否定することは最早出來ないのである。と云ふのは、たとひ言葉を選ばなくとも意見を述べ、事物を敘述することは出来るけれども、其言葉が花や女の肉體のやうに微妙で、神祕の生命に充ちてゐなければ感覺を超越して動く云ひ知れぬ形を與へることは出來ない。眞面目な詩歌の形は通俗な詩歌のとは異り、時には朦朧となり、時には非文法的となることがあるかも知

れない。けれども分析を免れる完全、日毎に新しい意味を持つ美妙的な點がなくてはならない——「詩歌の象徴主義」中より

此イエーツの言葉は愈々彼のシムボリズムがムード・シムボリズムを意味することを明かにしてゐる。蓋しムード・シムボルは先づ感覺的手段で神経を刺戟し、其處に一種の情調を起さしめて、其れに依つて或る非感覺的のものを暗示するのである。即シムボルを借りて、他の心にも作者のと同じの若しくは類似の情調を起さしめるものである。智的象徴のやうに内容と形式と云ふ二つの要素があるのでなく、形式がやがて内容である。現はされた形式其物の神経に與へる刺戟が直に詩となるのである。で其情調をさへ表現し得れば詩句の意味の解釋などは讀者に任せて置いて差支ないと云ふのである。だから極端なものになると語句の意味は全く分らなくとも音律だけが一種の情調を傳へれば、其れで充分であるとするのである。

シムボルを此様に考へ、殊にイエーツの藝術を此様に考へる時、イエーツの尊重する表現の形式——音や色や形の感覺美の意義が明かになつてくるのである。而して其形式に重要なのは彼の所謂音樂的關係、即音律的のハーモニーとユニチイである。此の様な全體感からの暗

示に依りてこそ「肉體を離れた力」を感じるのである。  
 暗示は象徴の生命である、暗示は複雑分析の中に存しないで、シムボルチク單純、調和、統一の中に存するのである。

右の様に考へて來ると、イェーツが詩劇を作し、舞臺上の美を唱導し、ゴードン、クレীগの審美劇を推賞し、更に我が能樂劇に深く興味を感じ、果ては能の手法に倣つて作を試み更に演出するに至つた藝術的徑路が、點頭かれるのである。

ゴードン、クレীগの唱へ出して、歐洲の劇壇に一革命を起した彼の審美劇はイブセン劇の智力に訴ふるに對して、感覺に訴へ、智的快樂を與へるに對して、感覺的快樂を與へんとするのである。尙他言すると先づ感覺に訴へ、其れを通じて想像に訴へる美を創造し、更に進んでハートを動かさんとするのである。だから形式フオームの美は内容の美よりも貴く、殊に視覺に映する美的形象、聽覺に響く美的音律が重要である。アクションは性格の發展をも、思想の發展をも意味しないで、裝飾的な運動を意味する。而して何れの表現も個々別々の分離を許

さないで、聲と云はず、動作と云はず、形、色、光と云はず、更に背景と云はず、舞臺裝置と云はず調和と統一とに依つて構成される一系體美若しくは總合美を形造らなくてはならない。徒らに現實に即して、調和、統一の美を缺く寫實劇の如きものであつてはならない。渾然たる美の創造でなくてはならない。併し其れは只の感覺美だけに止る安價の形象美でなくて、神祕幽玄のものを暗示するものでなくてはならない。従つて暗示に必要な單純化がなくてはならない、言葉をかへて云ふと、シムボルチクが無形の或物を暗示するシムボルとなるものでなくてはならない。かうして生じた觀衆の印象は思想でなくてムード而も其ムードは神祕幽玄の一象徴としての力を有するものでなくてはならない。

してみると單純と暗示、神祕と象徴、調和と統一、内容よりも外形の美的表現を生命とする我が能樂こそ實に此審美劇の精神に最適するもので、やがてイェーツが藝術の精神にも一致するものである。

謡曲は只美しい文句のつきはぎであり、寄木細工に過ぎない非藝術的の物であると貶する

者が往々あるが、其内容を主とすれば如何にも其れに迷ひない。が、若し謡曲を只の読みものとして見、只の文學として解したなら、其れこそ其精神を知らない没分曉の骨頂である。謡曲は讀んで字の如く謡ふものである。謡つて耳に快を與へるものである。更に進んで舞踊の律調美と相待つて、調和、圓渾の美を作り上げるのである。内容の美よりも形式の美に重きを置くのである。而も其美は華麗の美でなくて、シムブリンチイの衣に包む幽玄の美である、神祕の靈感を生ずるムードを作り上げる美である。「三井寺」の中にある「月落ち鳥鳴いて——」は「月落ち鳥鳴いて霜天に滿つ」と云ふ張繼の句を借り來つたのであるが、「鳥鳴いて——」としては一音伸びて、音律美に支障を生ずるから、英斷を以て「鳥鳴いて」と更めたのである。これ全くイニーツやゴードン・クレীগなどの藝術の精神と一致するのである。

イニーツは我が能藝術の概念を謡曲に就いてはフェノロサの英譯から、舞踊其他に就いては伊藤某のそれから學んで「鷹の井の邊りにて」を作し、其音曲、舞臺、假面、舞踊等を能樂に眞似て作り、伊藤某其他をして演ぜしめた。六年前に出版した「四ツの舞踊劇」の初篇が其れで、後三篇も同精神から生れたものである。此事は篇後に附してあるイニーツ自身の註言

にも告白してゐる。又「The Cutting of an Agate」中に含まれてゐる「Certain Noble Plays of Japan」と云ふ論文にも彼が感得した能藝術の理解と賛意とを表はしてゐる。其文中に——

歐洲は餘程老いてゐる、多くの藝術は同じ圈内を廻り來つた、して有ゆる花の果を學び、其果の與へる物を知つた。で今こそ東洋に學ぶべき時である——

と云つて、歐洲の行詰つた文明に生命の泉を東洋から取入れよと説いてゐる。就中イニーツの心を惹いたのは我が能樂であつた。

是より先、單純シムプリファイケーション化を欲して「砂時計」サンドウオッチを上演する時には緑の幕の前で演ぜしめ、更にゴードン・クレীগの象牙色のスクリーン・システムスクリーン・システムの舞臺を用ひ、遂に「鷹の井の邊りにて」を上演する際は日本の能舞臺の單純化を採用したのである。

「非想像的藝術は浮世の一片を吾々が知るが儘に寫實的に表現して満足してゐる。所が吾々に興味を感じしめる藝術(想像的藝術)は浮世から、吾々から隔たつたかの如く見え、ても形象、影像、象徴などの一團が吾々をして暫し心の奥底に入らしめるのである。其

心の奥底は此想像的藝術に觸れない時は餘りに微妙で吾々の入り得ない所である。……」  
此精神からしてイニーツは非現實的な、想像的な、浮世離れのした我が能樂に共鳴したのである。

「<sup>マスク</sup>假面は決して汚い面とは見えない、如何に接近しても尙藝術品である、耳目の運動を靜止することに依つて更に失ふ所はない、幽玄の感情は五體全部の運動に依つて現はされるから。」

と云つて、彼は「鶯の井の邊りにて」には能式の假面を用ゐた。

「顔面に變化する表情の不足を感じたと演了後誰も私に語らなかつた。蓋し、假面が其れを照らす光と共に變化するやうに見えたからである。」

實に假面而も名工に依つて作られた假面の美、全體の綜合美のリズムに調和する形體美は、諦ひ出る音樂美、舞ひ出る運動美、形象美のリズムに伴れて幽玄な感情を其假面上に搖曳せしめるが如く見えるのである。若し假面がなくて、演者が徒らに自分の感情の動く儘に寫實式に耳目を動かす時は全體の系體美を破壊するのである。

「鷹の井の邊にて」は勿論能樂のやうに舞踊劇であり、音樂劇であり、詩劇でもあるのである。これに用ゐた樂器は太鼓、銅鑼、一種の一絃琴であつた。其奏樂者の顔面は假面に似せて作つた。三人の演者中井守だけは假面其儘に顔面を作り、老翁と青年とは然るべき假面を着けた。

此舞踊劇の筋は能のやうに極めて簡單で、不老不死の井の傍に老翁が空しく水の充ちて來るのを待つて居ること五十年、其處に青年が又同じく其井を憶がれて來る。老若二人の問答、其處に鷹の聲、鷹の眼をした乙女が出來る、其れは此山腹に徘徊して、そゝのかし、迷はし、亡ぼしもする魔女なのである。其魔女は樂の音に伴れて踊り出す、二人は夢心地になる。夢醒むれば泉は故の如く空しくして、飲むべき水一滴もない、と云つた様な何處となく「邯鄲」を思ひ起させるやうなものである。

尙イニーツは「羽衣」の傳説が丁度アイルランドの傳説「海の妖女が陸上に来り、赤い帽子を盗まれると、海に歸ることが出來ないと云ふのによく似て居り、「錦木」の傳説がグレゴリー夫人の作中に出て來るアランの男女が死後結婚をしようとして、僧の許に來るのに髻髻

してゐるなど、能樂中の傳説がアイルランドの傳説によく似て、神祕的の所が多い。だから此様な傳説を有する民はグリーク、ローマの民よりもアイルランドの民に近く、セイクスビヤヤコルネイユよりもアイルランド人に近い、其情操は内省的で、追憶的で、常に繪畫や詩歌に連結させる。——此様な民の間にはペーターアの散文やシャヴァンヌの繪やマラルメ、ヴェルレーヌの詩を解する者もあらう、などとも云つて能樂を有する日本民族に非常に興味を感じ、詩味を感じ、如何に日本の能樂が内容から云つても、形式から云つてもアイルランドの殊にイーツ自身の文藝によく似て居るか、同時に如何に多大の尊敬をこれに拂つてゐるかを自ら筆を取つて語つてゐるのである。

## 米國の民衆劇運動

『祝祭と演劇』の著者パーシヴァル・チャップの言を借りて云ふと「現今の教育は何等詩的蘇生感を與へることを努めない、情操を等閑に付して、更に意としない、徒らに智に走つて、感情を飢餓に陥らしめる。兒童の手と頭とを發達せしめることにのみ努めて、ハートや、想像や、創造的、劇的本性をば無視してゐる」。此れは只だ兒童教育に於て許りでなく、一般社會に於て見る現今の大缺陷である。

十九世紀の科學的文明は人のハートを侵害し、血液を涸死せしめ、物質主義、爲我主義、殖産主義、商業主義、資本主義などを産んだ。科學が振りかざす分析や解剖の斧、專業や分業の鉞は人間社會のみならず、個人の全的生活を破壊して部分的生活をなさしめるに至つた。科學文明の利益を受くること米國程甚しい國はあるまい、と同時に其弊害を受ける事も又同國に勝る國はあるまい。機械に運ばれ、機械に動く、人間が機械を使ふのでなくて、機械が



人間を役とするの感がある。世界中こんなに敏活な生活をする國もあるまいが、又こんなに機械的な所もあるまい。幾十層の大厦高樓を見上げた時は如何にも物質文明の象徴だと云ふ感を深くするのである。一昨年死んだ英國のプライスであつたか、米國はビッグネスとグレートネスと同じに思つてゐると云つた事があるが、此間の消息をよく傳へてゐると思ふ。

併し三百年の昔精神生活の自由を求めて、墳墓の地を棄てた開國始祖の精神、更にタイラントに抗して、獨立を贏ち得た祖先の血潮は涸渴し盡すことはない、今や科學のタイラントが振ふ斧の威力にも抗し初めたのである。虐げられたハートを復活し初めたのである。眞のヒューマニチィに生きんとし初めたのである。此意圖、此勇猛心こそ、亞米利加民衆劇運動の根本動機である。かくて民衆劇絶叫の聲イヤ其實行の盛なのは世界中恐らく米國に如く所はあるまい。

紐育市には民衆教化演劇局(The Bureau of Educational Dramatics of Community Service)と云ふのがあつて、嘗てフィラデルフィアで兒童劇場を興して、盛に活動した事のあるホップス夫人が其主宰をしてゐる。私は同夫人の記事が「演劇雜誌」シアター・マガジンに載つてゐるのを見て、誰の

紹介もなしに、一日、出し抜けに其事務所を訪ねた、所が快く會つてくれ、色々と参考になる事を話してくれた。元來此局は文藝に依つて、米國の文化を改造しようとする運動の一部を示すもので、一般民衆の爲めに劇の臺本を提供したり、参考書を示したり、上演の相談にのつたり、其他種々の便宜を與へてゐるのである。

私はホップス夫人の所で、來合はせたアームズと云ふ夫人——「演劇雜誌」シアター・マガジンの民衆劇の寄稿家——にひきあはされ、更に其夫人から、同雜誌民衆劇方面擔任記者キーホーに紹介された。同記者は私の爲めに色々の劇壇や、研究會や、祝祭の演藝などに紹介したり、有益な報告などをして、多大の便宜を計つてくれた。其報告の中に斯う云ふのがある——

「演劇雜誌」社は米國の學校が演劇の爲めに何の位努力してゐるかを統計的に知る爲めに、設問して答を求めた所、次の様な結果を得た。

○亞米利加の學校數

ハイ・スクール

大學又は専門學校

一、六〇〇

六〇〇

師範學校

○右の内回答した學校數

七〇〇

此生徒總數

四一三

内

四三四、四一六

劇の上演に與つた者

三六、六一九

○右の内統計的に報告した學校數

三〇〇

其一年間に上演した脚本數

一一、二〇六

其學校の建設當初から現今迄上演した脚本數

一一、二四八

同ペーヂェント劇

九一七

同樂劇

一、八五〇

右一年間の上演費

一三三二、〇五四弗

○右の内八十九校のみが次のやうな統計的報告をした。

背景

九八、六三〇弗

ライチング  
照明

三八、五四五弗

道具

二一、三四六弗

○右の内十七校の小劇場の建設に投じた資金

一二七、一〇〇弗

○學生の書いた脚本數

五九四

或時紐育市十八丁目ワシントン・アーヴィング・ハイスクールに開かれたペーヂェント劇の研究會に行つた。集まる者約三千、大部分は學校の教師であつた。一人の男子と四人の婦人とがペーヂェント劇に用ゐる衣裳の色や材料などを實物に依つて講演し、最後に演出法などを學生に演らせて説明した。

一昨々年初秋の頃約三ヶ月紐育市民衆奉仕局の演劇部で夜間隔日に民衆劇と宗教劇との講習會があつたので、私も續いて出席した、集まる者約百人、學校の教師や僧侶や演劇愛好者などであつた。講習項目はペーヂェント劇、兒童劇、一般演劇の理論、舞臺裝置、衣裳(選擇法、作り方、色の配合、染色法)、背景、ライチング、照明、演出法實習等であつた。

其他紐育及シカゴの兩ドラマリーグは月々雑誌を發行したり、時々演劇講習會や研究會などを開いて一面民衆劇の指導に努めると共に他面演劇の改善を計つてゐるのである。

ハーヴァード大學にはベーカー教授あり、カーネギー・インスティテュートにはスチーヴンス教授あり、コーネル大學にはドラモンド教授あり、夫々一種の小劇場や田舎劇場カントリー・シアターなどを有して、劇の研究に従事し、民衆の演劇指導に努めてゐる。

シラキユースと云ふ市には民衆劇の舞臺装置、背景などに要する金具を専門に賣つてゐる店がある。

右の如きはほんの一例に過ぎないが是だけを見ても米國の教育界や民衆一般が如何に藝術に目醒めつゝあるかを伺ふことが出来る。

前にも述べた紐育市「演劇雑誌」記者キーホーは私を名演劇雑誌として世界に知れてゐる「シヤタフ・ア・フー・ニ・ガ・ヂー」の記者で「Open Air Theatre」「The Art Theatre」等の著者チニイ君に紹介して、同君の關係してゐるスカーポローの小劇場の上演劇を見るやうに取運んでくれた。

スカーポローとは紐育を去る二三十哩、ハドソンの大河に沿ふ村落である。米國の富豪ヴァンダリップは此湖水とも見える廣い大河を見下ろす小高い森地を開いて大きな邸宅を構へてゐるのであるが、數年前其邸内に米國で有數な小劇場を設け、此地方の民衆の爲めに提供してゐるのである。其名を「The Beechwood Theatre」と云ふ。チニイ君は自用の自動車でタリタウン（ワシントン・アーヴィングが住んでもゐたし、永久に眠つてもゐる所で、彼がサンニイ・サイドの遺屋も今尙存して、彼が昔を偲ばしめる）まで出迎へ、懇ろに案内してくれた。此小劇場は見物席三百を有し、而もそれが悉く平土間で、バルコニーはない。凡て最新式劇場建築法に則つたものである。此夜の出し物は「The Hunchbuckle」と云ふトマス・ロピンスン作のお伽噺を脚色したものであつた。演者は主として此地方の素人で中には印刷職工も居れば、小學校の女教師も居り、商人もゐた。一體此小劇團は此地方の民衆から成立つてゐるので、中に十二人の經驗ある者と百人以上の素人とがある、場合に依つては村民に臨時に出演せしむる事もある。

チニイ君は興行本位に墮落した劇界を救ふには民衆劇運動に依る外はないと云つてゐた。

實際、米國の藝術殊に演劇はコムマーシヤリズムの毒に害せられてゐる、大都會の興業物は殆んど全部猶太人の手にある。彼等の眼には金錢のみあつて、藝術はない。チニイ君は又、米國劇界のスター・システムを改めなければ、演劇は眞の生命を復活することは出来ないと言つてゐた。と云ふのは斯うである——これも矢張コムマーシヤリズムの影響であるが、スターになる役者は藝の如何を問はず一座中最人氣を得て、客足を多く引く、換言すると多數の収入を得しむる者なのである。で、役者は藝を磨くよりも只管俗情に媚びて、人氣を取るツリツクにのみ腐心するに至り、藝は卑俗に陥つて來るのである。

米國の小劇場運動には二様の目的がある。即民衆の藝術衝動の表現機關、高尚な休養又は文化機關である場合が其一で、藝術其物の向上發展を計る試練場である場合が其二である。歐洲諸國にあつては小劇場は多く大都會の智識階級を中心として起つてゐるので、其目的は多く後者であるが、米國に於ては、ひとり大都會許りでなく、郊外に、小都會に、海岸の村落に、山間の農村に、其設立を見るのであつて、其目的も寧ろ前者か又は兩者をかねるかであ

る。「民衆劇」の著者バーリイも民衆劇大家として知られてゐるバーシイ・マカイも共に小劇場を民衆表現の一機關と見てゐる。前のスカーパーローの小劇場の如きは即此部類に屬するものである。だから、亞米利加の小劇場運動の多くは民衆劇運動の一部と見ることが出来る。

マカイは劇の傳統をアングロ・サクソン系と、大陸系と、希臘系とに分ち、甲はコムマーシヤリズムに陥り、乙は貴族主義に煩はされて、何れも藝術の本義に遠ざかる傾がある。がひとり希臘系のみが藝術乃至民衆劇の理想と根柢とに一致するのである、と云つてゐる。

希臘劇の起原がお祭に發してゐることは今更事新しく云ふの必要はない。古來人間として、自分の内的生活を何等かの藝術的形式に表現しようと思はない者はない。而も其慾望の最強く動くのは内的生命の最鋭く向ふ方面にである。古代の民には科學もなかつた。哲學もなかつた、彼等は直觀に依つて神を見、想像に依つて天國を作つた。彼等の生活意識の燈明となるものは只神のみであつた。彼等の内的生命の根柢に生けると云ふことは、やがて神に生くることであつた。かくて、希臘古代の民は自己の悲哀歡樂の情を劇的動作に表して、生

活意識の燈明である神に捧げたのである。神の前には階級的意識は更がない、だから希臘劇の初には有ゆる階級の人が自發的に加はつたのである。これから段々進んで、エスキラスやソフォクレスやユーリピデス等の天才が出で、民衆意識を代表して、劇に現はしたのである。それすら、今日の如く専門の俳優が、日日やるのではなくて、成べく多數の而も全く素人の民衆が、年に一二度祭禮に演じたのである。だから彼等の演劇は單なる娛樂ではなく、神に捧げる最も神聖な供物であつて、やがて最高の内的生活の表現であつた。此様な藝術的境界には上下貴賤の區別なく、利得損失の念の入る餘地がない。此處に眞の藝術もあり、眞の民衆劇の生命も存するのである。マカイの民衆劇の理想を希臘系の劇に置くのも尤であると思ふ。

米國の民衆藝術が一面、藝術をコムマーシヤリズムから救ひ出さうと努力してゐるのを思ふ時、佛の民衆藝術がブルジョアジーの手から藝術を救ひ出すことを主張もし、努力もしてゐることを思ひ浮べざるを得ない。紐育が商業の都であるのに巴里が享樂の都であるのを思ひ

比べる時、更にマカイの言葉「アングロサクソン系の劇がコムマーシヤリズムに陥り、大陸系のが貴族主義に煩はされる」と云ふことを再び思ひ浮べるとき、米佛民衆劇發生動機の相違が點頭うなづかれるのである。更に又ロマン・ローランの言葉が現はれて、此間の消息を明にしてくれる。――

「少數の人が藝術の特權を握つて、民衆は藝術からかけ離れた位置に立たされて居る、藝術を救ふ爲めには藝術の息の根を止めてゐる特權から藝術をもぎ取らなくてはならない、萬總ての人を藝術の世界に受け容れねばならない、つまり民衆の聲を擧げねばならない、萬人の劇を興して、萬人の努力が萬人の喜びの爲めに營まれねばならない――ブルジョアの藝術は已に老人の藝術となつた、夫れを生かしめ、健かにすることが出来るのは只民衆的氣分がある許りである」

マカイは又民衆劇の原則を(1)非營利的なること(2)藝術的なること(3)ディモクラチックなる事とする。(1)は前にも述べた事であるから、此上云ふを要しない、(2)も改めて説くには及ばないが極めて重要だから數言述べてみる、元來民衆劇は一面瀕渴した民衆のハートを蘇らす爲

めに、他面墮落した藝術を救ふ爲めに起つたのであるから、第一藝術的でなくてはならないのは云ふを待たない。が世には民衆劇を非藝術のやうに思ふ人があるが、これはブルジョアの藝術思想に捕へられた偏見に過ぎない。ロマン・ローランの云ふが如く、「若し藝術が民衆を容れなければ其代表する社會と共に滅亡しなければならぬ」。③も、民衆劇が希臘系の劇に則るがよいと云ふ言葉の中に、其精神は十分含まれてゐるのである。即ち、民衆劇は階級意識に支配せられてはならない、捕はれない藝術でなくてはならない、又限られた階級のみの有でなくて、貴も賤も、富も貧も悉く與らなくてはならない。即ちデモクラチックでなくてはならない。世にはデモクラチックであることは藝術の墮落を意味するやうに思ふ人があるが決してさうでない。元來デモクラシイの根本精神は動的ダイナミックのもので、靜的スタティックのものではない、人は等しく或偉大な力を有する、只機會を得ないが爲めに、否機會が等しくないが爲めに、人々其表現を異にしたり、表現し得ないでゐたりする。そこで、其機會均等の上に立つて根本の人間性を發揮せしめようと云ふのが、デモクラシイの理想である。だからデモクラシイは表現であり、發展であり、向上であり、不斷の上達である。其れ故、デモクラチック

であるべき民衆藝術は墮落を意味しないで、向上を意味し、發展上達を意味する。

マカイは又民衆劇の根本原理を更に他の方面即ち民衆自體の方面から觀察して、

(1) 参加 (Participation)

(2) 自己表現 (Self-expression)

の二つとする。これは *by the people* と云ふデモクラシイの根本精神に基くのである。併し参加するといふ以上、小が大の一部となり、個が全の中に加はると云ふ事である。「民衆劇は民衆をして、階級的、種族的、人種的、宗派的精神を脱却して、普汎的、共通的な境界に向上せしむるのである。人生に於て、最神聖なものは吾人を普汎的人間性の絆で結び、人類とか同胞とかの全的精神を體得せしむる事にある」。此精神は民衆が共に手を携へて、藝術の中に自發的に活動し、共に力を協せて、一大美を作り出だし、知らず／＼動く命の鼓動と、愛の血潮に我を忘れる時に於て、最も發現せられるのである。民衆劇に於て、「参加」を一大要素とするのは之を以てである。併し單に参加する許りが能ではない、個を殺す意味、個を

無視する意味の参加ではない。一面自己の表現でなくてはならない、或は全を通しての自己の表現であり、自己を通しての全の表現でなくてはならない。即個は全に依つて生き、全は個に依つて生きるものでなくてはならない。

#### 民衆劇の心理的原則——

凡そ人の藝術衝動は二様に發現する、即一は能動的で、一は受動的である。民衆劇が民衆の参加とか自己表現とかを必要條件とする以上、心理的には前者を根柢の原理としなければならぬ。尙言葉を換へて云へば鑑賞本位の劇でなくて、共演本位の劇でなくてはならないのである。人は立派な藝術品を鑑賞して、自己の藝術衝動を満足せしむるのは勿論であるが、自ら歌ひ、自ら踊る時に、更に——藝術衝動の満足を得るのは人の経験する所である。但歌民謡の貴きは此點にあるのである。此場合客観的には専門家の作り出だすものよりか、劣つてゐても、主観的效果の上から見ると却つて大に優るのである。否客観的にも、時には眞の藝術的生命がより多く發現せられてゐる事さへあるのである。若し藝術が人間の藝術衝動の満足を一要素とするならば、鑑賞本位の藝術と共に自作若しくは共作本位の藝術がなくてはな

らない。殊に人の諸能力は自ら活動する時に於て、最も發現し、最も發展し、同時に最も満足を覚えるのである。だから民衆劇は複雑であるよりも寧ろ、簡單にして、而もより多く民衆の意識を代表し、やがて、より多く藝術衝動を能動的に働かしめるものでなくてはならない。世には鑑賞本位の藝術的立場に立つて、共作本位の劇を評する者があるが、夫れは甚だ當を得てゐないと思ふ。かと云つて鑑賞本位の藝術を悪いといふ意味ではない。それは何處迄も尊重し、發展させなくてはならない、只此場合に於ても作者の胸裡に眞の能動的藝術衝動が漲つてゐなくてはならないことは勿論である。コムマッシュリズムやブルジョアジーに捕はれたる藝術は此重要點が缺けてゐるから、價值がないのである。此場合眞の能動的藝術衝動に依つて生れる民衆藝術が却つてこれを救ふ役目をなす事があるのである。

右の精神を最もよく具體化した民衆劇の一は近代ペーチェント劇である。一體ペーチェント劇の起原は非常に古く、其形式も種々雑多であるが、これを近代化して、一層劇的にし、藝術的にしたのは英國人ルイス・パーカーが試みたシャーボン・ペーチェントに初まる。それは英國南部の古い小都會シャーボン市の開都一二〇〇年祭に其古城内に催したのである。これは此

都會の歴史を材料として仕組んだ新しい年代記式の劇であつた。彼は其上演に關する一切を上下貴賤貧富の別なく普く市民に當らしめた、此様にして、彼は一面市民の血潮に流れ、頭に宿つてゐる此都市特有の時の姿を活現して普く市民のハートにアッピールし、他方共作共演の作業に依つて胸を動かし、友愛、協力、同情等の如何に美しく藝術的活動の上に現はれるかを覺らしめ、やがて其感化を永く後に残らしめた。此様にして生れたペーチェント劇は其後英國の所々方々で、或はパーカー自身に依つて、或は他の人に依つて作られ、演ぜしめられ、發展せられた。此様な歴史的のペーチェント劇を英國式と云ふ。

これが海を渡つて米國に來ると型を變じ、若しくは新しい型を附加するに至つた。と云ふのは英國式のは、古い歴史を有する英國にあつては、其材料も豊富で、従つて變化に富ますことも出来るが、短い歴史を有する米國に在つては單に歴史を年代記的に取扱つたのでは、兎角單調に流れる嫌ひがある許りでなく、種々の民族の集まりである國の事として、民衆にアッピールする力が乏しいのである。其れ故、或は寓意的、象徴的のものをインタルド（間の曲であることも、間の行列であることも、間の舞蹈、間の活人畫であることもある）として挿

入したり、或は歴史的的材料を用ゐないで、全てを寓意的、象徴的に取扱つたりして、變化を計り、人心にアッピールする事を努めるのである。そこで英國式を歴史的ペーチェントと云ひ、米國式を寓意的若しくは象徴的ペーチェントと云つてゐる。尤も現今米國でも英國でも其兩方をやつてはゐる。是迄米國で行はれた數多くのペーチェント劇中沙翁三百年祭の際紐育でマカイがやつたカリバンが寓意的のもの、最大なもので、一昨年プリマス三百年祭の際米國劇界の巨匠パーカー教授のやつた「ビルグリム・スピリット」が歴史的のもの、最大なものである。

ペーチェント劇には色々の形があつて一樣に云ふことは出来ないが、色々の點で普通の劇とは異つてゐる、其主なるものを二三擧げて見ると、其脚色は劇的と云ふよりも、寧ろ物語的である。又其物語は一部落、一社會、一團體など或民衆のライフを年代記風に順序正しく排列する、一場一場の話は其場其場で解決され、完成されてゐるので、普通の劇の様に、前場が後場の原因となるとか、發展の經路を示すとかがない。即全體を通じて物語や人物の發展がないのである。只全體の統一は其全體の印象とか、氣分とか、民族發展の經路とか、民衆



意識とか、思想とか、理想とかに依つてなされるのである。

又物語を表現するには耳に訴へるよりも、目に訴へる方が多い、耳に訴へるにしても歌謡、音楽に依ることが多い、従つて、パントマイムやダンスなどを多く用ゐる。これは多數の民衆を参加せしめる必要上、非常に廣い舞臺を要するので、普通な言葉は用をなさない、それに多くの民衆を動かすには只の言葉よりか、目に訴へる感覺美の方が餘程力があるからである。此點がやがて、現代の新劇運動の精神と契合するのである。新劇運動と云つてもイブセン系統の思想劇ではない、却つて之に反して起つたクレীগ、ラインハルトなどの一派のアーティスト・ムーヴメントを云ふのである。イブセン系統の思想劇は智的の快感に訴へるのであるが、これは感覺的快感（高尚な感覺美感、單なる耳目を喜ばす快感ではない）に訴へるのである。一は發展を意味するアクションに基くが他は審美的運動を意味するアクションに基く、一は内容の思想に重きを置くが、他は動、線、色、集團の美的表現に重きを置く、一が人に或思想を與へるのに對し、他は印象的な創造的なムードを生ぜしめる。これ丈述べると直にショーや、ヴォードヴィルや、ヴァライチーのやうな徒に感覺を喜ばすドンチャン騒

ぎの物のやうに誤解せられ勝であるが、決してそんなものではない、アーティストは感覺を通じて想像を動かし、人のハートに歡喜と希望とを起さしめるのである、世の苦難を忘れしめるのである、元氣を與へるのである。それは想像的、印象的、創造的、調和的、統一的でなくてはならない、従つて現實生活の複寫であつてはならない、サッセ、シヴなものでなくてはならない。其爲め全てに互つてシムプリシチーを必要條件としなくてはならない。此派の運動が日本の能を讚美するのは其爲めである。日本にも近頃クレীগやラインハルト式の舞臺装置を段々採用してゐるやうであるが、どうも右の精神を呑み込まないで、單に *the stage craft* だけの問題と思ひ、目先をかへる事だけに用ひてゐるのではないかと疑はれる節がある。尙右に就いてロマン・ローランの或言葉を思ひ出す。

「民衆劇の第一條件はそれが樂を與へる休養でなくてはならない、吾々が民衆劇に持たせたい休養の力は精神的元氣を犠牲にするものでなくて、却つて元氣の源でなくてはならない、活動の浴場でなくてはならない、且又賢明に導く燈火でなくてはならない、——民衆劇は二つの相反した極端、即生きた事實の中から冷たい教訓を引出して來る倫理教育であ

つてはならない。かといつて唯々民衆を悦ばさうとする無暗なディレクタンチズム、不眞面目な遊びであつてはならない、唯々民衆の精神生活に健康を與へるものでなくてはならぬ  
501

米國の民衆劇は成るべく多くの民衆に参加を與へようといふ精神からして、戶外劇場を多く採用する、或は林間、或は庭園、或は砂濱、或は山麓などを用ゐる。又グリーク式のを常設してゐる所も澤山ある、就中有名なのは、加州大學のハースト希臘劇場、同じ加州のポイント・ロマやボモナなどのそれ、ミシガン州クランブルックのそれなどである。戶外劇場を採用することも、戶外劇場の多いことも恐らく世界中米國が第一であらう。

264  
現今米國が人類の藝術史上或は文化史上に盡す所がありとすれば實に此民衆藝術の方面であらうと思ふ。是迄米國の劇壇は世界に優れた地歩を占める事は出来なかつた、が世界に類ひない程に盛んな民衆劇運動を目撃した自分には將來此間から世界的劇作家の出る事は丁度

265  
エスキラスや、ソフォクレスや、ユーリピデスなどが民衆劇の中から出たのと同じではあるまいかと思はれる、否かく希望するのである。

## 近代ペーチェントの開祖ルイス・ パークアと語る

私が翁の名前を知つたのはペーチェント劇の諸書を読んだ時である。而も其名は近代ペーチェントの開祖としてあつた。それから又近來ペーチェントの最盛な米國でも屢々其名を聞かされた。

渡英後間もなく面會しようと思つたが、容易に紹介してくれる人がなく、時期の到來を待つてゐたが、一月經ち二月經ちする中に、時は段々過ぎ行くのみで中々其機會を與へてくれなかつた。霧の時季も過ぎて、鬱陶しい空も晴れ渡り、花咲き鳥歌ふ楽しい五六月の頃となつた。或時倫敦のドラマ・リーグに行つた所が、フリック古城下でパークア翁指導のペーチェントが催されることを知らせてくれた。これは好機會と、紹介者の有無を氣にする餘裕もなく、早速書面を翁の宅に出し、面會を求めた。すると計らずも、フリックから、翁が指導の民衆オペラの臺本と共に次のやうな返書が來た。

### 拜復

御懇切な御手紙有り難く拜見致しました。誠に残念ですが、今の處、倫敦の自宅に御迎へすることが出来ません。別封で御覽の通り私は貴下が研究御志望の事に偶ま目下從事してゐるのであります。

併し此度のはペーチェントではなくて民衆オペラであります。

私は田舎旅館カンツリイ・ホテルに泊つてゐますので、残念ながら大して御款待することは出来ませんが、フリック訪問が御有益と思召し



Louis N. Parker

祖開のトンエゲーベ代近  
アカアバ・スイル

て、御出でになり、此處で中食を共にしながら私の上演の目的や方法をも御話すること

が出来れば大層仕合せに存じます。併し、二十一日の金曜には御出で下さいますな、と申しますのは其晩だけは是非倫敦に歸らなくてはなりませんから。ですが、他の上演日には何時も此處にゐます。

天氣さへ好ければ美しい、面白い出来栄えを御目にかけることが出来ると存じます。

若し此地に御出でが六ヶしければ、二十三日倫敦の宅で御目にかゝることが出来ると幸であります。

十時四十分パッティントン驛(倫敦市中の一大停車場)を立ちますと十二時四十一分には當地に着きますが、それで、晝の上演には充分間に合ひます。 敬具

此懇切を盡した手紙にもう十年の知己のやうな氣がして、早速返辭を出して、民衆オペラ見物にと出かけた。

あの白鳥スワンの浮ぶ、沙翁を偲ばしめるエーヴォンの川に幾百年の影を寫すワリック古城の下、ウール・バック旅館の一室に翁を訪ねたのは七月二十二日土曜日の中食前であつた。翁は少し

横張りの顔に始終微笑を浮べ、腦天毛薄く禿げかゝつて、少し白い猫毛の髪がふわり／＼と頭にのつかつてゐる。體も顔に調和を取つて英人としては短く、づんぐりである。年は六十を越す幾つかであらう。暖い握手を交はした後先づ要求せられたのは耳が遠いから高聲で話してくれとのこと、従つて自分の話聲も馬鹿に高い。時々補聴器を耳に當てがふ。(これは後に見たことだが、外出の時にも、ステッキに補聴器の附いたのを持つ)。

私は友人に畫いて貰つて持つて行つた菊の扇子を贈ると翁は非常に喜んで、印象的で暗示的だと云つて日本畫の特長を讚美した。(翁はかねてから日本畫に興味を有し浮世繪など澤山持つてゐる。其後倫敦の自宅に茶に招かれた時見せられた北齋や、廣重や歌麿など幾十枚の浮世繪は悉く、本物の立派なプリントであつた)。それから話はベーヂェントに入り、翁の最初其れを起した動機や精神——民衆の能動的藝術衝動をはたらかしめて、生の健全と更新とを得しめ、かねて友愛、同情、和衷協力の精神を發揮せしむると云ふ趣旨——を語り、續いて次の様な話をした——

「私がバヂェアントを初めたのは一千九百五年六月であつた、其れは英國は南方の小都會シヤ

「イボンの開都千二百年記念の爲めに催したのである。併し私は其れより十數年前シャーボンの學校に奉職してゐた時、其校庭で、樂的民衆劇を演つてみたらと思つたのである。が其後辭職して、其機を得なかつた、偶まシャーボンのアーサー・フィールドと云ふ副牧師から開都千二百年祭の記念に何か催しを工夫してくれないかと頼まれたので、此時こそと思つて、前からの計畫を實現することになつたのである。

「先づ委員會を作り諸種の準備に着手した。

「元來、此都の民衆自らに劇の製作演出に關する全部の任務に當らしめ、其れに依つて、娛樂を得ると共に郷土心とか和衷協力の友情などを養ふ目的であつた。

「初めは出演者の數も五百にする積りであつたが、最後には八百となつた。此れに加はつたものは上下貴賤貧富の差別はなかつた。

「衣裳の如きも其意匠から裁縫迄全部市の婦人が當つた。又其材料の如きも縞子絹布に至るまで、此市の機にかけて織つたものを用ゐた。

「舞臺はシャーボン古城の廢墟であつた。苔のむした壁、匂ひ上がる蔦蔓などを背景に、野

天の下に、此古都千二百年の歴史を演出するのは誠に適はしく感ぜられた。

「此パチアントは十一のエピソードから成り、最後はファイナル・タブローで終る。出演者全部で一齊に歌を唱ひ、更に觀衆も加はつて、國歌を合唱して、全部に共作共演の氣分を起さしめた。

「一體最初は此劇をパチアントと云はないで、民衆劇と云ふ積りであつたが、其名では在來のフォーク・プレイと混同せられたり、従つて其人に與へる印象も微弱であるので、其精神と形式との根柢に類似點がある所から、昔のパチアントとは非常に異つたものながら、其名を採用したのである。」

其時、私は

「“Pageant” と云ふ言葉は一體何と發音した方がよいのですか」

と聞いた。私がアメリカにゐた時、或所では「ペーヂェント」と發言しなければ通じないことがあつたり、或所ではパチアントと發言しなければ通じないことがあつたりした。所が本家本元の翁は頻りに「パチアント」と發音する。で此んな問を發してみたのである。すると

翁は

「それはパヂャントでもよければペーヂェントでもよい、が自分は前者の方が耳さはりがよいから其れを口にするのである」と説明した。

我邦では坪内博士が唱導せられて以来、ペーヂェントが普通となつて、今では其方が通りがよい。此は畢竟、間の延びる、アクセントの無い日本語と混用するのには「ペーヂェント」の方が「パヂャント」をアクセントなしに發音するよりか耳への響がよいからである。

翁は話しを續けた。

「其翌年千九百六年に二度目のパヂャントを此處ヲリックの市民に其古城内の庭園でやらせた」。

「其後私も指導すれば他の者も私のに倣つて所々方々で演り出した。後にはアメリカに迄渡つて盛に演るやうになつた」。

「日本人は永い、且興味ある歴史を持つてゐるのだから、これをパヂャントに生かして、

日本特有の文化の精神を現はすと共に藝術に依つて、前にものべたやうに人に蘇生乃至更生の泉を供し、友愛、同情、協力の精神をもかね養つたら、今の世の中にどんなに爲になることであらう。

「此度、此處(ヲリック)でやる民衆オペラは此方面での最初の試みで、恐らく他には未だ此企てはなかつたらう。併し其精神はペーヂェントと同じである。此處の民衆に演らせる民衆本位、藝術本位のものである。一體これは大戦以前に試みようと思つたのであるが、戦争に妨げられたり、機が熟さなかつたりして、今迄延び／＼になつたのである。此度採用した「オーフェーズ」は音曲はグラックの作其儘だが、所作や、舞踊や、集團的演技などは全く自分の獨創になつたものである。併し其を活かすのは市民の民衆的スピリットである、其中に潜む藝術的慾望乃至は精神である。」

話はそれからそれへと津々として盡きなかつた。こんな話を聞いてゐる中に私が是迄讀んだペーヂェントや民衆藝術の著書中の意見が一部若しくは大部分此翁に胚胎したものだと點頭く節が多かつた。

記念に寫眞をと乞ふと、フリック古城内の芝生——此度の民衆オペラのグラウンドで撮つたのを出して、署名してくれた。鷺ペンで！初めて貰つた手紙の字形が世の常ならず雅致のあるのに點頭いた。其後翁の自宅で貰つた記念の品——翁が最初の試みであるシャーボン・ペーヂェントや六千人の民衆が参加したと云ふヨーク・ペーヂェントの記念帳や臺本にも翁は又鷺ペンを振つた。それからと云ふもの翁の手跡に接する毎に「ア、あの鷺ペンで！」と思ひ出すやうになつた。

翁は近代ペーヂェントを興したと云ふので、世界に名高いが元來翁は劇作家でもあり、作曲家でもある。其作は殆んど五十に近く、就中「ドレーク」、「ボマングア・ヨーク」「ヂスレイリ」などが最評判の作である。

(一九二二、七、二二)

### フリック古城内に民衆オペラを見る

パーカア氏の民衆オペラ上演に關し、特別刊行の新紙附録は先づ氏のペーヂェントの功績を擧げて「ペーヂェント界の霸王ルイス・パーカア氏は已に民衆劇の方面で、如何に英國民が盡し得るかを示したと云ひ、進んで「此度の民衆オペラの試みも同じ成績を擧げる希望を有してゐる」との讃辭を捧げた。尙、パーカア氏の言葉を斯う掲げてゐた——

「君はフリックでグラックのオペラの完全な上演を見ることが出来ないかも知れないが君は生きた上演を見ることが出来るやう」

生きた上演！これこそ實に型に捉はれない民衆藝術の生命である。

パーカア氏から郵送せられた民衆オペラの臺本「オーフェウス」の同氏自身の序文に——

一九〇六年の立派なフリック・ペーヂェントは忘れられない。其れは恐らく、是迄戶外或は戸内で演ぜられた此種のもので、最美しく、最壯大な觀を呈したものの一であらう。併

し、當時此壯觀を可能ならしめたフリック市民及び其友の精神こそ、ペーチェント其物よりも、遙に注意すべきものであつた。其精神は十数年の今日までも残存してゐる。それは大戦中に現れた。戦後も猶消えずにゐる。そこで、私はペーチェントではないが、何かそれと同じ主義に基く目醒しい物を仕組む助けをしに来てくれとの招きを受けた時、少しも驚かなかつた。……………

私はペーチェントを盛にやつてゐる頃、友人ブラッカル（英國の有名な音楽者）に斯う云つた事を記憶してゐる——フリック城の園内青天井の下で、グラッカスの美しいオペラ「オーフェウス」をやつたら、どんなに面白からうと。其時彼は同意したけれども、當分見合はずことにした。其處へ大戦が勃發した。……………

昨年彼は手紙を送つて、「オーフェウス」は如何だ、と云つて來た。……………私は其言葉に應じた。其れで、フリック市民は、昔ペーチェントをやつた時のやうに騒ぎ出し、道具や衣裳などを工夫したり、意匠を凝らしたり、作つたりした。又謡ふことや、演ずる事や、踊る

ことやを稽古した。

私は此序文を讀んだ時、形こそ違へ、これも矢張パーカー氏が、近代ペーチェントを創始した時と同じ精神、同じ原則に依つて試みられるものであることを首肯した。

其精神とは藝術に依つて、民衆に慰藉と元氣と生命とを與へ、かねて、友愛とか、和衷協同とかの精神、進んでは郷黨を愛慕するの精神を養ふと云ふことである。而もそれは外部から民衆に働きかける藝術作用に依るのでなくて、民衆自らの内部から湧き出でる能動的藝術作用に依るのである。他言すると、民衆自らの内部に潜める若しくは眠れる力を、藝術に依つて導き覺醒せしめ、活動せしむるにある。フリック・ペーチェントは、パーカー氏が近代ペーチェント創始以來二度目に試みたもので、非常に盛なものであつた。これをして可能ならしめたフリック市民及び其友人の精神こそ、右に擧げたのと同じもので、實に「ペーチェント其物よりも遙かに注目すべきもの」である。近代の物質文明は、餘りに人を個人的、利己的、物慾的に傾け、友愛とか、協同一致とか、更に民衆共通の母である郷土を愛する念とかを棄



てしむる傾向を生じて来た。パーカー氏が、ペーチェントを創めた一面の動機は、此悪傾向を防止して、民衆を生命の源、愛の本性に蘇らさうとするのにあつた。此心が發して、個人に對すれば友愛とか、協同一致の精神となり、郷土に對しては愛國心となる。これが大戦中に現はれた、今も猶残つて居て、最初の試みである民衆オペラを可能ならしめた十數年前と同じく、フリック市民は自ら進んで、心を同じくし力を協せて道具衣裳などを工夫したり、意匠を凝らしたり、作つたりした。又謠ふことや演ずる事や、踊ることやを稽古した。彼等は役者でもなければ、職を賣つて口を糊する職人でもない。與へられる藝術に満足しないで、彼等自らの内に動く藝術心を能動的に働かせ、自ら進んで、藝術を作り出だすのであつた。

こんな精神からして生れたのが、近代ペーチェントであり、民衆オペラである。

パーカー翁に對面して、右の民衆劇の精神や氏のペーチェントの創始或は此度の民衆オペラの創始等に就き種々詳しい解説を聞いた後、伴はれて、民衆オペラ上演事務所に行き、入場切符を買はうとしたが、翁は其れには及ばないと云つて惠んでくれた、此度のは慈善興行の爲め凡て寄贈切符は出さないから、残念ながら贈呈することが出来ない、豫め手紙で辭つてよこした位で、私に惠んでくれたのは實際翁が自腹を切つたのであつた。

此度の民衆オペラは、フリック(人口約一萬二千の小都會)、レミントン(人口約二萬六七千の小都會)を中心とせる此地方の民衆が、慈愛と敬虔の念からパーカー氏指導の下に催すものであつた。即ちフリックのピーチャン教會堂再建費と、レミントンのラインフアド養育院の資金を補助する爲めのものであつて、其上演は五回で、入場料は一回一等一パウンド(日本の約十圓)二等十志半(日本の約六圓)三等五志九ペンス(日本の約二圓八十錢)であつた。

出演者は約四百から成り、オーケストラが五十餘から成つてゐたが、主役は總て婦人が當つた。即ちオーフェウスにはラッセル夫人、ユーリデイスにはフィンチ嬢、エロスにはデヴィス嬢、口上役にはウエストコット嬢であつた。フリック市長夫人は、衣裳を作つたり、模様を付けたり、澤山の花を作つたりする婦人團體の頭となつて、其指揮に任じた。又其市長婦

人の姪子ピッツ嬢は其圖案の任に當つた。其他男子と云はず、女子と云はず、此地方の民衆は舉つて、此上演の成功を助けた。

中食を済まし、此民衆オペラの戶外劇場であるヲリック古城を訪れた。城は一千年の昔フレデリック大王の娘エッセルフリーダが初めて築き、幾多封建の星霜を経て、或は改造せられ、或は増築された物である。此處彼處に蔦に飾られる城樓、高く聳えるシーザアの塔、ガイの塔は古い緑の木蔭から抜け出て、昔を語り顔である。影はエーヴォンの川に落ちて、白鳥の足に亂される。苔むし、蔦のまつはる高い城壁を左右に有する、高く嚴めしい煉瓦作りの城門に入る、一間許りもあるかないかの路が古い石垣に挟まれながら、導いてくれる。幾多の星霜に磨り減らされた城樓や高塔、大きく高く茂る古木は、如何にも古城の感を深くして、身はさながら幾百年の昔にあるを思はしめる。其間を點綴する幾つもの美しい芝生、廣い庭、——其一つ而も大木の掩ひ茂つた下に擴がる緑の芝生が此民衆オペラの劇場であつた。スレース遠隔の美しい森に適はしい自然である。其奥まつた所にお寺、前に神壇、向つて右横に



死のスイアリーユ

榻狀の椅子がある。何れも大理石の希臘風の態。

二時三十分、奏樂の音と共に開演。先づ口上役が舞臺面に現はれて、序詞を叙べる。

實にやよく集られたり美しき淑女よ、

やさしき紳士よ、

十六年の星霜を経たる後、

吾等は再び美しきエーヴォンの川邊に

集れり

吾等には只自然の舞臺あるのみなれば

背景も變ふる能はず此世より冥府迄

美しき意のまゝに配する能はず、

吾等には綿にて造れる天空もなく、

半ば眼を欺く晝ける衣もなし、

日の大神——大なるアポロの化身こそ

吾等の照明となり、雨をも斥け玉ふべし、

諸子の想像は吾等の足らざるを補ふべし、

吾は拙き言葉もて、諸子の想像喚起に遣はされたり。

時は八百萬の神が若かりし頃

所はスレース遠隔の美しき森

.....

カリオプスの美しき子オーフェースは

大アポロに教へられし樂をば人に齎らし

嘗ては黙せし此世に聲を與へたり

沙翁は吾等に語りけり

琵琶もてるオーフェースは

木々や氷れる山の頂に頭垂れしめぬ、

ユーリデイスを喜ばさんとして歌謡ふ其時は。

かくて彼は此乙女の愛を獲て縁を結びたり。

されど恐ろしきアリスチアスは、

邪念にかられて彼女を求めたり。

彼女は甚く恐れ絶望狂氣して

オーフェースの名を呼びながら

森の中をば走せ廻りぬ。

嗚呼彼女は認め得ざりき

草に潜める毒蛇のあるを

其は怒氣を放ちて突如飛びかゝり

足に噛みつき彼の女を殺したり

.....

今こそ羊牧ふ男の子も乙女もなべてみな

ユーリリデイスの骨壺載する神壇に花を投げぬ。

されど失望せしオーフュースは琵琶を投げすて、

已も亦命絶えなんことをこそ神に祈りけれ。

はては戀の神エロスが其悲みに動かされて現じ給ひ、

彼のなげゝる心に救ひをぞ齎せる、

ユーリリデイスを冥府より還へす爲め

彼の踏むべき恐ろしの路を示しながら。

口上役が去ると其序詞の場面が或は默劇に或は歌劇に演ぜられる。

次の場は冥府の態、——亡靈が復讐の女神に追ひ立てられて現はれる。オーフュースが近づくと女神を取巻き、其進路を妨げ、宛ら彼を八裂きにでもするやうな様子を示す。併し遂に彼の懇願は女神をして憫情を起さしめた。亡靈と女神は歌ふ。

「開け眞鍮の門を

開け廣く彼にとて

勇ましの人をして

我等の征服されし

下界に行かしめよ」

かくてオーフュースは、恐怖も挫く戀、死よりも強い戀の心に守られながら、自分の奏でる樂の魅力に依り、無情な復讐の女神の心をもとろかして終つた。彼は遂に樂土へと行く。若い乙女が二頭の仔羊を率ゐて出て来る。續いて花環を持てる幾多の乙女が、ユーリリデイスを擁して現はれ、嬉々として踊る、歡樂の精靈である。彼等が影を隠くすとオーフュースが入り來り、



る踊てしと々嬉靈精の樂歡

「如何に清き風！

如何に澄める日影！

やさしき光は我目を迎ふ

.....

と歌ふ。と其美しい歌の音にひかれて歡樂の  
精靈再び現はれて、彼を取り巻き、歌ひなが  
ら誦る。

「來れ靈郷に

偉いなる英士よ

.....

オーフユースが

「我が悼む戀人を

返へせ吾に



る歸に世此てき過を門花。り蘇スイデリーユ

汝は我胸に燃ゆる炎を

只管に感じ能ふらん

.....

と歌ふと、歌の音につれて、ユーリディスは  
出現す、ユーリディスが精靈に導かれて、オ  
ーフユースの側に行くと、彼は戀人の手を取  
つて去る。併し彼は、人界に達する迄は戀人  
に目をくれるなどの神の試煉の命に依り、戀  
人に面を背けて歩む。忽ち嫉妬の炎は、ユー  
リディスの胸に燃える。それがやがて憤怒と  
變り、悲嘆となる。其極彼女は再び息の根が  
絶えた。するとオーフユースは痛嘆の極。

「やがて息の根悲みの根を絶たん

此惨酷なる運命の鞭に耐ふる能はず

.....

吾れ行かん、待てよ吾を

吾れ君が跡を追はん

生きて添ふ能はざれば

死して共に手を取らん」

とオーフェウスは、短剣に手をかけ自殺せんとする、戀の女神エロス再び現はれてそれを止め、ユーリディスを甦らして遂に戀の勝利を得せしめる。幾多歡樂の精靈が現はれ出で、樂の音につれて二人の爲めに踊りに踊る。最終の曲。一人の僧が寺院から現はれる。オーフェウスとユーリディスは、戀の女神と共に神壇の下に感謝の赤心を捧げ、三人相携へて寺門を過ぎつて消え去つた。

終つたのは五時少し前。

パーカア氏の希望に反かず、非常に美しく演了せられた、殊に心を惹いたのは反響演奏が主體樂團から三ヤード許りも隔だつた藪蔭から微かに響き出て緑の木の葉を渡つて聞えて來るのであつた、又群衆の姿體動作が調律を亂さず、衣の色や樂の音と調子を取つて一幅の活畫を出現するのであつた。千古の老樹の蔭、右から左から踊り出で踊り消えて行く様、或は緑の芝生に色のコントラストをなして、赤、黄、白、黒、紫と様々の衣を翻へして、歌ひ踊る様の如何に美しくあつた事ぞ、宛ら古代エリシアムの樂園に遊ぶの感を起さしめるのであつた。

パーカア氏に會つて、成功を祝し、寺とか、神壇とかの舞臺装置や、小道具などを見せて貰つたり、説明されたりした。

千年の古城を後に残すも猶美しき影は目に踊り、妙なる樂は耳に響く、エーヴォンの涼しい夕風に吹かれながら宿に歸つた。

## 歴史的大ペーチェント劇「ピルグリム・スピリット」を見る

私がプリマスで歴史的大ペーチェント劇のあることを聞いたのは五月下旬紐育市社會教化演劇局で、其主幹ホップス夫人の口からであつた。其時同夫人から此劇の作者で、舞臺監督であるペーカー教授に宛て紹介状を書いて貰つた。今月初コーネル大學の夏季大學に行くと、其處の演劇科の教授ドラムモンド氏もまた此ペーチェント劇の事を語り、且つ附け加へて「作者ペーカー氏は米國第一の劇文學者でハーヴァード大學の教授、且つ自分の師である。年齢已に六十以上、最後の思ひ出に、力を此作に注いだのであつて、歴史的大ペーチェント劇としては、此國初めての大作である。尤も、前に沙翁三百年祭の折マカイの大作キャリバンがあつたが、其れは寓意的アレゴリカルのもので、歴史的小のものとしては他に此度のに匹敵するものはな、。で、他のつまらない作を多く研究するよりも、此の大作から研究を始めた方が餘程増しだ」と云つて、プリマス行を非常に勧められ、且つ電報で再三懸合つたり、紹介したり、色々の便宜を頼んだり、

宿の世話まで依頼して貰つたりした。

かくて周圍數十哩の湖面を瞰下しながら、海拔九百呎の高地の勝景——コーネル大學の所在地——に別れたのは此十六日の雨の朝であつた。其夕方に着いたのはボーストンの舊都。それから、ボーストンの三日を経て、十九日プリマスに向ふことにした。南停車場サウスステーションに行つて見ると“Pilgrim Pageant at Plymouth”と大書したのに開演の日時迄書き加へて、人目に着くやうに、大きく廣告してある。發車を待つ間に、賣店で、プリマスの案内記はないかと問ふと、ボーストンからプリマスへかけてのはあるが、プリマスだけはないと云ひながら“The Pilgrim Spirit”の臺本を出して要らないかとさぐく。これこそと思つて早速一本を購ひ、ベンチに腰を下ろして読んで居ると、若い婦人レディが來て、何處で買つたのかと聞く。教へてやると“Thank you very much”と如何にも有り難さうに賣店さして買ひに行つた。其本の店頭飾られたのは昨今らしかつた。汽車は午前十一時三十九分ボーストンを後に残した。約一時間半の後、私を乗せた汽車は大西洋沿岸の小都會プリマスに着いた。此地は三百年の昔米國人の祖先清教徒(Pilgrim Fathers)が初めて上陸して、今日の基を開いた土地であ

つて、米人の神聖視し、且誇りとして居る所である。一體は昨年十一月二十日が丁度三百年目に當るのであつて、當時已に其祝祭を行つた所が米國中所々にあつたさうであるが、開闢の祖地プリマス丈は寒い爲めに、お祝ひの催しも十分出来ないと云ふので、半年許り延ばしたのである。政府は此祝祭の爲めに記念の切手や貨幣を發行し、八月一日には大統領ハーディングが来て盛な祝典が行はれると云ふ騒ぎ。ペーカー教授は此祝祭用のペーチェント劇を書く爲めに英國やオランダや其他關係の所々に行き史料研究に一年を費したとの事である。

小さい驛を出ると、萬客歡迎の幕を額様に張つたり、國旗やら、色取りの幕やらで町を飾つたりして、お祭気分は全街に漲つてゐる。先づ三百年祝祭案内所に行つて、ペーカー教授の住所を聞き、ペーチェント本部に教授を訪ぬると、教授は快く會つてはくれられたが、非常に多忙の爲め、長くは會談が出来ず、後は萬事の指圖を其秘書に命ぜられた。早速ボーイ・スカウト(少年義勇團員)が命を承つて、豫め私の宿に頼んであつた素人屋で、小高い處にある家に私を案内した。一休みしてと思つてゐる内に、ボーイ・スカウト(少年義勇團員)は引き返へして

来て私をペーチェント本部に伴れて行つた。今度は某女が私の案内役を承はる。某女は先づ私をペーチェント劇場Playhouseの小高い所にある塔上の事務所に伴れて行つた。此塔は半ばは射光塔で、一町許り隔たつた今一つの高い大きな射光塔と相對峙してゐる。其塔上の事務所と云ふのは遠く海上かけて、ペーチェント劇場を見おろし、中には電話器が備へ付けてあつて、ペーカー教授の指揮用になつてゐる。二人の女事務員は電話以外教授の命令指導傳達の用を承つて、頻りにタイプライターを打つてゐる。ペーカー教授はペーチェント劇開演の際終始此塔上に居て、電話で諸方に命令を傳へ指揮をするのである。電話は衣裳部屋や共演者控所や奏樂所や射光塔などに通じてゐて、教授は其電話を通じて、色や動作や形や音やで、自分の美意識に盡いてゐる美を作り出だすのである。某女は私を事務員に紹介し、委細を語り、ペーカー教授の旨を傳へた。すると、其事務員は、私に表面には“Pageant member”と記し、裏には私の名前と、教授の名前とを記した札を作つてくれ、何處へでも勝手に行つて、勝手に研究が出来るやうにしてくれた。それから、某女は衣裳部屋、道具部屋、衣裳調製所などに伴れて行つて説明してくれた。某女は其夕の五時に此町民共の行列paradeがあるから、それにも案内したい



が、自分は晩の試演に出なければならぬからと云つて、一應私をペーチェント本部に伴れ歸り、年頃十二三のボーイ・スカートに改めて案内をさせてくれた。其行列は米人祖先清教徒 (Pilgrim fathers) の後裔五十人許りから成り、三百年前祖先上陸當時の服装をして、最初建立の教會からねり出で、樂を奏しながら、町を通り、其後ろの海を見下ろす小高い丘——最初埋葬地——に行き、此處で “O! God, beneath whose Guiding had——” “Sons of renowned Sires” の讚美歌二曲を祖先の靈に手向けるのであつた。

其晩と翌晩と二回「ピルグリム、スピリット」の試演を見、それから續いて實演を見た。試演の際は少しだけ氣味で、餘り感心しない點もあつたが、實演の際は、餘程引締つて、豫想外に成功であつた。一體、此劇を全部演ずるには四時間かゝる。試演の際は全部演じたのであるが、實演の時はボーストンから來る觀客の爲めに時間短縮の必要上或場面場面を隔晩に取りかへて二時間半に演じたのである。此短縮策が却つて實演をして引締まらしめ、意外の効果を表はしたのだと思ふ。

此劇の共演者はプリマスを中心に、其近郷の者で、清教徒 (Pilgrim fathers) の後裔とか、或

は其れと關係の深いノースマン (古スカンデナヴィア人) 和蘭人、英國人、インディアン (アメリカ土人) などの末裔である。彼等には祖先の血潮が流れてゐるのである。舞臺は戶外で、彼等の祖先が昔浮んだ水、踏んだ土地である。序詞を發する岩は祖先が初めて足を置いた物である。四邊を包む宵闇は現代の光景を奪つて、空にまたゞく星は三百年の昔を語る。彼方に輝くガーネット島の燈明臺は劇中に出て來る手負のノースマン酋長の落ちのびて死んだと云ふ傳説を囁く様である。こんな舞臺に立つて、祖先が國の基を開いた苦心慘愴たる史實を演ずる時、彼等は肉も踊り、血も湧き、骨も鳴るのである。一種の敬虔の念と誇りとを感じるのである。だから、此劇は彼等に取つては遊びではない。美の神の指揮の下に、自由の神に捧げる貴い神樂である。普通の興行本位の劇よりか、却つて遙かに藝術的良心と精神とに適ふのである。千幾百の演者、三百の奏樂隊、三個の射光燈。色に光に音に形に如何にもよく調和の美を發揮するのである。新劇運動、審美劇の一形式として見るペーチェント劇の特色も相當によく表はされたと思ふ。

最初之をアメリカのオーベルアムメルガウ (オーベルアムメルガウは獨逸の一村落であつ

て、十年毎に村民自ら基督受難劇を演ずるので世界に名高い。同村民に向つて人生の目的は何かと聞くと受難劇を演ずる事であると答へるさうである。とならしめる爲めには何んた費へをも惜まないと云ふ意氣込であつたが、事實は其希望を裏切らなかつたと思ふ。

序でに一言附け加へて置くが、一體、ペーチェント劇では演ずる者を役者と云はないで、参加者(共演者若しくは共作者)と云ふのである。これはペーチェントの内面的使命から來るのである。ペーチェントは共演若しくは共作本位の民衆藝術(民衆が自分の爲めに、自分で作り若しくは演ずる藝術)の一種である。受動的な鑑賞本位の藝術が人の藝術的衝動を満足せしめるのは勿論でもあり、必要でもあるが、能動的の共演、或は共作本位の藝術が其れと同じく、若しくは其れ以上の働きをなして、高等な藝術的教化を施すことの出来るのもまた勿論でもあり、必要でもある。共演又は共作本位と云ふことは個人單獨の藝術的活動でなくて全の中、團體の中にあつての個の活動である。個と全との調和である。大きな物に小さい者が参加するのである。個を除いて全がなく、全を除いて個はないのである。畢竟、ペーチェント劇は人類をして能動的な、全的な、人間的な、同胞的な生活をなさしめようとする高等な藝術的使命を果

さうとするのである。人は手を携へて藝術の泉に浸る時、脈々として動く生の鼓動と愛の血潮に知らずく淨化せられ純化せられるのである。だからペーチェント劇の演者は専門の役者ではなくて、村なら村、町なら町の民衆自らである。

又千幾百人の衣裳、道具なども皆プリマスの町民又は近郷の者が相集り相助けて作つたものである。實に老若男女の相集つて奏でる郷黨の大音楽、如何に彼等の心に和樂協調の美を感ぜしめる事ぞ。

此ペーチェント劇は、四段、二十三場面から出來てゐる。因みに記すが、ペーチェント劇では普通の劇の様に一段即幾場面の集つたものをアクトと云はないで、エピソードと云ふ。併しそれを普通譯す様に「挿話」とか「間の狂言」とか譯してはいけない。と云ふのは、主幕があつて其間に挿む間の狂言のものではなくて、エピソード其物が主幕なのであるから。ペーチェント劇では間の狂言的の物はインタールドと云ふ。これは音楽であることも、狂言的のものであることも、行列的であることもある。以上には皆それ／＼相當の理由があるが、長く

なるからそれは此處ではよして置く。

第一段は米人祖先清教徒 (Pilgrim Fathers) が未だプリマスに來ない頃の狀態を現はす、第二段は劇中最重要な、最嚴肅な部分で、清教徒 (Pilgrim Fathers) が新陸地に來るに至つた由來を現はす、即亞米利加人の祖先が信仰の自由、内面生活の自由を求めて勇奮努力した歴史を活現する。亞米利加民族發展の根本精神、米國デモクラシーの根源を明かにする。第三段は清教徒 (Pilgrim Fathers) が先づ信教の自由を許すオランダに行き、長く其處に住する間に、子弟が母國の言語習慣を失ひ、全然和蘭化する恐れがあるのを見て、快からず、遂に意を決してアメリカ新陸地に來る過程を表はす。實に民族的心理の動く機微をよく表はしたものである。第四段に至つて初めて清教徒 (Pilgrim Fathers) が新陸地に足を入れ、プリマスに上陸して今日の基を開く最初の狀態を活現するのである。

x

x

x

海中に少し突き出た大西洋沿岸の砂原、左の波打際には樹が生ひ茂つて、遙かに見渡す大海原三百年前米人祖先清教徒 (Pilgrim Fathers) 上陸當時の態。夕暮の影が此戶外劇場

を襲うて來て、彼等が初めて足を下ろした左端のプリマス岩 (Plymouth Rock) をも其衣に包む。涼しい北海の夕風は夏を忘れしめる。八時半薄闇の中から華やかな喇叭の音が響き出して、次第に他の音も加はつて、嚴かに又活氣のある奏樂にベーチェント劇は初まる。樂の音が消えると、暗い舞臺の左端から光がパッと輝き出る、かと思ふと、プリマス岩から、どつしりとした強い聲が高く響き出て物語をする――

「吾、プリマスの岩、汝等亞米利加人に語らん。――吾は太古より此處なる泥中に住みぬ。或はノースマン或はイギリスの水夫、或は佛蘭西の航海者或は和蘭の冒險者など吾が周圍や上を往き來しぬ。インディアンも亦我が側や上を往きかひて働き遊び、日を暮しぬ。されば吾は此濱邊を徘徊する萬人の岩なりき。然るを惡疫襲ひ來つて、インディアンをば此地より掃蕩し、殘る者としてはなかりき。吾が周圍の無人の原野、魚の群がる入海、野獸に豊かなる森は吾と共に待ちぬ。英國に生長せし人の靈を、熱誠に聖書を研鑽して、英國々教より逃れ出でたる清淨教徒を、思想の自由、眞實生活の自由を求めて英國から追はれたる道者を。英國峻酷なる母國は彼等を容れず、彼等は自由を求めて逃れ、乳母の地オランダをも去つて、

尙自由を求めて、西に航し、吾に来る。偶然か、故意か、神ぞ知る。彼等道者は吾に來り、吾を踏んで甲乙相繼いで上陸しぬ。此處に彼等は道を成ぜん、これをこそ吾は待ち居たれ、吾をこそ彼等は共和國の柱石となしたれ。」  
此様な趣意の序詞が終ると闇黒の幕。奏樂。

## 第一段

(米人祖先清教徒渡來前プリマスに來た歐洲人共の狀態を現す)

強い光が射光塔から海岸近く放射せられる。夕闇の中から、黄色に黒の裘、銀の兜を冠つて、右手に槍を掲げ、左手に盾を持ったノースマンの荒武者が帆船を漕いでやつて來る。プリマス岩の近くに小船を漕ぐ亞米利士人がそれと見て驚く。又陸上の土人も何かと思つて、運んで居た小船を地に捨て置き、初めは探り足に樹蔭の方へ歩み寄るが、それと分つて驚き退き、小船を伏せて下に隠れる。ノースマンの荒武者は上陸し、小船の伏せてあるのを見て、それと覺り襲撃を試みる。すると、土人の一人は逃げ、一人は虜へられ、他は殺されて仕舞ふ。ノースマンは勝ち誇つて船に乗り歸らうとすると、他の一隊の亞米利加土人が現はれ出



る踊てれが引に音のータギるで奏の人英。人土カリメア  
(景光の時當開開カリメア)

で、弓を放つて逆襲をやる、ノースマンも防戦して居たが、其首長が傷いたので、其れを盾に載せ乗船して漕ぎ去る。

次に千六百三年英人マーチン・プリングが部下を引連れて來り、土人と親交を結ぶ。土人は英人の奏でるギターの音に引かれ、來つて異様の姿をしながら亂舞する。一幅の活畫、二年後佛人シャムブランが部下を率ゐて來り、土人に魚類の多いことや玉蜀黍の食用となることなどを教はる。

千六百十二年和蘭のブロック提督が來り、土人を遇することが甚だ親切であつたので、土人は非常に懐き、或時の如きは、和蘭人共の群

れ居る中にやつて来て、弓を持つて舞踏をする。(前のよりは踊り方が異つて面白く、殊に其れに合はず奏樂の妙、實に見る者、聞く者をして、自ら踊るの感を起さしめる)。  
次に英人キャプテン・ジョン・スミスが来て土人と物々交換をする。千六百十五年英人トマス・ハントが来て、土人を攻撃し、或は殺し或は奴隸として連れ歸る。  
これに次いで大疫病が流行し、此地の住民共を悉く殺して仕舞つた。(其悽慘たる光景を現はすのに十五六秒暗黒の後四五十秒許りも只物凄しい光を放射する。舞臺一面荒寥たる様)。  
次に、清教徒 (Pilgrim Fathers) 上陸前の最後の渡航者トマス・ダーマーの一隊が現はれ来る。嘗てハントが連れ歸つた土人を率ゐて来る。其土人は英語や英人の風習を學んで來たので通譯の役をなし、大に助けとなる。(此場面で初めて登場人物が會話をなす。これより前の場面は無言劇)。

## 第二段

(米國人の祖先が英國で信教の自由を求めて努力する状態を表はす)

頃は千五百二十三年、英國スタートン・ル・スチーブル村の近くにある田舎の早朝の光景。十

六世紀の讚美歌の曲を以て始まる。傳説の傳へる昔風の装をした聖地巡禮の團體が故郷をさして歸つて来る。中にはローマから、中にはカンボステラから、又中にはカンタベリーから歸つたのがある。此巡禮共は通りかゝつて来るチンダルに出會はす。チンダルは聖書の精神を容易く世に傳へる爲めに自分の筆を取つて居る聖書英譯の一部分を彼等に示す。と其中の一人は彼に向つて、其んな事をして國法に觸れない様にせよ、と警告する。巡禮の群れは去る。其處に馬に銜をつけ、田を耕す若い農夫が出て来る。チンダルは其少年に向ひ聖書の英譯の事を語り、英語が分つて、其譯書が讀めさへすれば、あの巡禮の様に舊蹟の寺院などに參らなくとも、遙かによく神の清教を知ることが出来ることを語つて聞かす。(闇の幕)。

やがて小さい長方形に輝き出る紫色の光——其紫色は薄明るい悽慘の氣分を表はし、長方形は牢獄を示す心。其中に現はれる三人、二人は清教徒(ピリグリン)の服装をつけ鎖に繋がれて居る——其中の一人は頻りに書き物を急ぎ、他の一人は何か書き物を校正してゐる——他の一人は婦人で其刷物を自分の體に隠して持ち來り、今、更に他の書き物の出來上るのを待つてゐると云ふ體。二人とはグリーン・ウッドとパ、ローの殉教者。他の一人は前者の妻である。二人は聖

書に關する著書を完成し、婦人は其れを密かに世に傳へて、聖書の精神を世に播布しようとするのである。

其處に青年ジョン・スミスがフランス・ジョンソン(前の二人の友人)の使者として来る。パローは信教自由の嘆願書を青年に與へ、友人ジョンソンに渡す様に頼む。青年はそれを帽子の中にかくす。

二人の役人が來て、囚人に向つて翌曉タイバーン河畔で死刑に處せられることを宣告する。グリーン・ウッド夫人は夫の兩腕に身を投げて泣き悲む。すると、彼れは妻を慰めて云ふ。

「吾々と同じ運命にゐるジョン・ヘンリーの言葉を記憶してお置き、若し私の血が大海であつて、其一滴毎が私に取つて生命であつたら、私の告白を主張する爲めに、其れをみんな捨て、仕舞ふ。」

妻「どうぞ私の血を、良人ではありません、良人ではありません。ひよつとしたら刑の猶豫があるかも知れません。」

夫が妻を慰めて居ると、其友パローは祈りを初める。遠くに十時の鐘の音。夫人は其鐘の音

を聞いて、

「もう夜明け迄僅か七時間だけ！ 僅か七時間だけ！」

と云つて歎歎、(實に悽慘の景)。

三方の射光塔から放射する光は廣い戶外劇場を隈なく照らす。ドウ〜と響く大太鼓の音で次の場面は初まる。帝王進行曲の愉快な曲。それに伴つて英國ジェームス王はきらびやかな盛装をして馬に跨り、多くの先驅や、扈從や、王侯貴族や外國使臣などを従へて靜々と練つて出る。時は紀元千六百三年エディンバラからロンドンへの行列の體。民衆が多く集り來つて歡呼の聲に迎へる。(此登場人員總數二百餘。其うち騎馬の王侯、朝臣、貴女四十餘。民衆の中には市民も居れば僧侶も居り、男も居れば、女子供も居る。此場面は劇中最派手な最賑かな場面の一つである。兵士共の派手な深紅の上衣に銀の兜、飾立てた馬に跨つた貴女の種々色取りをした美しい服裝——是等が殊に目立つ)。

其行列が中央に來たと思ふ頃、ハタと止る。民衆の誰も彼もが前に進んで丁寧に敬意を表す。中に黒の異様の帽子服裝をした清教徒の一團が居て、其首領が王の前に進み出でビュー

リタンを代表して嘆願書を奉る。王は其れを受取つて読み、種々の言葉の末、「彼等に國教を遵奉さす。さもなければ、彼等を國外に放逐しよう」と云ふ言葉を残して馬を進める。風笛の音につれて美しい行列は堂々と王に前後して進行する。民衆奉迎の聲。清教徒の一團は恨めしげに其れを見送り、最後に悄然として他の方向に消えて行く。それから清教徒の一同は會合して協議の末、比較的信教の自由なオランダに行くことにする。もう大部分乗船した所に奉行がやつて来て、乗り後れた者(主に老人女子供)共を逮捕して去る。

### 第三段

(オランダに於ける  
米人祖先清教徒)

舞臺一面眞暗闇。其處に和蘭大都市の市民が各都市特有の服装をし、旗を押し立て、炬火を點じて練り進んで来る。其人數總て二百五十許り。樂の音につれて先づ中央に進み、後、右に左に進行して、廣い舞臺に圓形を作る。と射光塔から舞臺一面に光を放射する。中央部は紫色、兩邊は黄に照らされる。(中には炬火がない爲め薄暗く、兩邊は炬火に照らされて明るい)と云ふ心。種々異様な衣服の色、配合殊に美しい。其處に赤の矢縞の衣を着流した六人の傳



面場の場登王國スリギイ

令使、同じ色、同じ縞の馬衣を着けた馬に跨つて駆け來り、「十二年間の平和を確信す、宗教の自由も」と王命を傳へる。全民衆これを聞いて歡呼の聲を發す、同時に旗を中心に六團となり、愉快な音曲に合はせて、民踊を踊る。其れがやがて、離れては合し、合しては離れ、果ては珠數の如くなつて踊りながら左右に消えて行く。炬火を持った者丈が一番最後に歡呼の聲に散つて行く。(此場面は色と形と音と光との配合調和殊に美しく、觀衆は非常に喝采、前の王の行列の場と共に全劇中最人の目を引くものである)。

此清教徒の仲間は其後十餘年もオランダに

暮して居る中に言葉を初め、風俗習慣等すべて父祖と隔たり來り、末は全然和蘭化して仕舞ふ恐れがあるので、矢張父祖の國を愛し、何處迄も英國人でありたい彼等は相集つて協議の結果、新陸地に行くことに決する。併し老年の者共は行きかねて止る。で決志の士百五十許りは老若相別れ、メイ・フラワ、May Flower (船名)に乗つて出帆する。

間の曲 (Musical Interlude) 「新世界への航海」 「The Voyage to The New World」 が奏せられる。

#### 第四段

(清教徒 (Pilgrim Fathers) の航海中からプリマス上陸後の状態)

射光燈から發射する光は先海上にメイフラワ (船名) を照すこと暫時。靜かな、低い樂の音、と前の光は消えて、舞臺に圓形の光りが放射せられる。千六百二十年十一月二十一日コッド岬の沖、メイフラワ船室の態、中で彼の有名なメイ・フラワ契約書が讀まれ、同志の者に署名せられる。此契約書は亞米利加民主政體の源をなすもので、「全世界に於ける政治は萬人の最大幸福となるやうに、彼等が自分の爲めに自分で營まなくてはならない。彼等の國

體の公益に適ふ様、法律には互に服従する義務を有する」と云ふ意味のものである。

千六百二十年十一月二十五日彼等はプロヴィンスタウンに上陸したが、住居するのに適しないので、千六百二十年十二月廿六日初めてプリマスに來り、例のプリマス岩を踏んで上陸。其翌年土人との交渉問題が起り、其酋長と條約を結ぶ。

二十一年四月十五日彼等に乗せて來たメイフラワは出帆して歸路に就く。彼等は名殘惜しげに、又故郷慕はしげにそれを見送る (萬里の孤客となつてゐる私には殊に其當時の情が思ひやられた)。

其後彼等より後れて來た殖民共が彼等に反抗し、勞しないで彼等の糧食を得ようとし、果ては附け火などをしたので、公益の爲め、又各人の自由を保護する爲めに、嚴肅な裁判を開いてそれを吟味する。さうして、自ら勞して物を得なくてはならないこと、公益、及自由保護の爲めに罪を罰する。が罪人に對しては憐みを垂れてやると云ふ趣意を現はし、亞米利加合衆國の法の精神を明かにする。

右の場面が終る一闇の幕。



と蔭にかくれた唱歌隊から「涙の中に種播く人は歡喜の中に果とる」と謡ふ。歌が段々進むにつれて、舞臺面は次第に明るくなる。其中にブラッドフォード（ピルグリム、ファザの一人）でプリマス最初の統治者（ガット）が机に寄り、蠟燭の光りにピルグリムス（清教徒）の歴史を書いてゐるのが現はれる。樂の音が終ると、彼は書くのをやめて考へる。直き側には同志の友が七人立つてゐる。ブラッドフォードは一寸其友を眺めた後頭を擧げて見渡す。

「蠟燭一つが千の人を照らすが如く、此處に發せられたる光が多くの人、吾吾全國民にぞ照り輝く。」

ブラッドフォードが尙見つめて居ると、光りは一層遠く迄輝いて、中にジョージ・ワシントン、エイブラハム・リンカンが現はれ次々に話す。

ワシントン 政治を組織したり變更したりする人民の權利こそ吾政體の基である。

リンカン 人民所有の、人民の爲めの、人民の行ふ政治は地上から滅びることがない。

此言葉が終ると、現代式の背廣姿の二人が登場、右と左とに遠く離れて、掛合ひに次の意味



景光の場登び再と々徐が百四千者演共全で面場の後最  
アワラフーメは船るえ見に沖

の事を語る。

此プリマスが吾々の自由の入口である、人がそれを持つて来て、西の方へ播き散らしてくれた、それで吾々には自由があるのだ。吾々は其れを完うしなければならぬ、彼等の遺してくれた自由が吾々の自由である、彼等の自由に近代の衣を着せたのが吾々のである。

其聲が止むと、鐘の音、太鼓の響。

光りは舞臺の彼方、濱邊を照らす。と其處から英國、佛國、日本、米國と云ふ様に、大戰當時の聯合國の大きな旗が出る、先づ、英、佛の國旗が振られると、後のが其れに

應じて右に左にと大きく振られる。と俄かに鎮靜。と思ふと、暗中メーフラワアの船上から勇ましい喇叭の音が響き出る。と同時に、光りはかすかに船體を照らし始める。岩からの聲。

メーフラワアの船路は永久に妨げなかるべし。

此聲を合圖に、此ページント劇の第一場面の群が表はれて来る。舞臺面は海から陸に一杯光を浴びる。第二の喇叭が響くと、第二の場面の演者が表はれ、それから次々に各場面の演者が全部前の儘の扮装で練り出る。三百人の大樂隊は樂を奏しながら “The Return of the Pilgrims” の曲を謡ふ。千四百の共演者が見事に列ぶと、最後に四十八人の逞しい女が白の帽子、赤の條の入つた僧侶の衣の様な服を着け、四十八州の旗を持つて出で來り、一番前に參差として列る。すると千數百の者一同方向轉換をして、海の方、メーフラワアの浮ぶ方向へ。The Return of the Pilgrims の曲が

吾等は汝の與へし賜の良き保護者たることをぞ誓ふ。

と終りを結ぶと共に、舞臺は暗くなつて、メーフラワアの船上にだけ光は漂ふ。其時プリマ

ス岩から、リンカンの有名な言葉を發す——

誰にも悪意を懷かず、萬ての人に慈悲深く、神の護りの此國に、

新しき自由の誕生を齎らさんと吾々こそ決心すべきなれ。

と光はメーフラワアの上に消えて、舞臺を包む大闇の幕。

x

x

x

此劇は少し場面をかへれば戸内劇としても成功するであらうと思ふ。普通のページント劇よりか臺詞が多く、中には随分長いのがあるが、戸内劇として演ずると、そんな場面が一層引立つであらうと思ふ。素より、あの廣い戸外劇場であつても練習の功か、其臺詞の聲がよく響き渡つて、而も抑揚巧妙、第三段第三場面のロピンスンの臺詞などは臺本で二頁にも渡る長臺詞であるが、観客をして少しも飽かしめなかつた。

(一九二二、七、二五、プリマスにて記す)

## 受難劇の本地を訪ふ

霧が未だ全く晴れやらぬ三月半ばのロンドンの朝、日曜新聞「オブザーヴァー」は世界に有



トスリキの冠 荆

名な獨國山間オーベルアムメル  
ガウ村の受難劇が五月から九月  
迄行はれることを報じてくれ  
た。一體十年毎に行はるべき筈  
の此受難劇は前回のが一九一〇  
年に行はれたから、一九二〇年  
に行はるべきであつたのだが歐  
洲大戰は其れを不可能ならしめ  
た、即一方經濟上では戦亂の爲

め、重税に苦しみ、窮乏に陥り、朝夕命とも思ふ寺の鐘へ砲弾用に取上げられて、昨今や  
つと再調した位の状態にあり又他方血税として出征した村民の中には六十七人も戦死し、多  
くの廢疾者負傷者を出だし、經濟上の傷痕と共に容易に癒えなかつたので、經費の調達難と  
出演者の補給難との爲め、村民は遺憾の涙を飲みながら、已むなく二年も延期したのである。  
此新聞上の報道を得てから、大陸旅行のプランを立てる爲め、其相談にヴィクトリア停車  
場脇のトーマス・クックのオフィスに行つた所が、偶ま受難劇見物旅行の小さい案内書があつ  
て、其上演日取は次のやうに書いてあつた。

五月十四日 二十一日 二十五日 二十八日  
六月五日 十一日 十八日 二十五日 二十九日  
七月二日 五日 九日 十二日 十六日 十九日 二十三日 二十六日 三十日  
八月二日 六日 九日 十三日 十五日 二十日 二十三日 二十七日 三十日  
九月三日 十日 十七日 二十四日

クックの事務員は私に忠告して、成るべく早く行つた方がいゝ、七八月頃になると非常に込

んで宿もなくなるし、諸物價も高くなる恐れがあるからと云つてくれた。

五月廿六日(一九二二)朝八時五十分獨逸の首都ベルリンを立つて、ミュンヘンに着いたのは夜の十時十三分であつた、豫ねてから知らせて置いたので此處に一年も留學してゐるS君が迎へに来てくれた。同君はミュンヘン市の警察が外人の滞在に非常に八かましいので、少し離れた郊外に寄寓してゐたのであるが、餘り遅いので、停車場近くの某ホテルに案内して、同宿してくれた。ロンドン出發以來八九日も入浴し得ないで、殊に數日來の暑さに汗になつた體を一浴びしたいと思つたが、矢張遅いのに祟られて、それも出來ず床に入つた。

翌早朝入浴した、早く立たなければ、警察に出頭し、入市税を添へて届けなければならぬとの事に、朝食も濟まさずに八時五十分發オーベルアムメルガウ行の汽車に身を急がせた。

汽車は吾々を乗せて、段々爪先上りに、緑の野や森の林の中を走せて行く、野には赤黄紫と色々の草花が咲き満ちてゐる。行く手に大きな湖水が光つて見え出した。スタルンベルゲル湖がそれで、汽車は湖畔の同じ名の驛に一寸憩うて、又暫く其水に沿ひ、森や野の中を突

き進んで行く、湖面をながめては、其底に姿を隠したかの非常にロマンチックな藝術愛好者、擁護者で、ワグナーの大崇拜者、大知己であつたルードキヒ二世の一生を思ひ、又悲哀の最後を追懐する。十時半頃ムルナウと云ふ驛に着いた。此處でオーベルアムメルガウ行の電車に乗りかへた。降りたり、乗つたりする乗客を見ると、男女子供の差別なく、背囊を背負つた者が多い、中には同じ旅装の女學生らしいものもある、男子は中折のやうな帽子に綺麗な鳥の羽を飾つて、半ツボンに厚靴下といふ扮装、見るからに彼等の山間生活を思はしめる。彼等も矢張パッションプレー見物に出かけるらしいが、胸にはバヴァリア民族の血潮に古來流れてゐる藝術慾求の熱と宗教渴仰の情火が漲つてゐるやうに思はれた。

電車は吾々を乗せて、山と山との間アムメルの谷を上つて行く、眼を窓外にやると左には山又山の彼方に雪を頂いたアルプスの連峰が繪のやうに聳えてゐる、右にはスタッフェル湖が、鏡のやうに靜かにあたりの自然をうつしてゐる。私等と同じ客車中に獨人としては瘠せがたの小柄の男がゐて、よく話し、よく談ず、餘程親切さうな男だ。聞いて見ると、オーベルアムメルガウ詰のバヴァリア旅行案内所の役員で、名をジョゼフ・シュワルツと云ふ。初めベルリ

ンからS君に豫報して、トーマスクックでなりと周旋して貰ふやうに、切符や宿の事を頼んで置いたのであるが、ミュンヘンに着いてみると、全部賣切れである、満員であるとの事に、一旦は落膽したが、行けば何とかして貰はれると事情に通じた人の言葉を頼りに出かけたのである。でシュワルツ君に其事情を談すと、これ／＼であるから自分が同道して、よろしく取計つてやるとの事で非常に嬉しかつた。語り合つたり、窓外の景色に眼をくれたりしてゐる中にウンテル・アムメルガウを過ぎ、段々上り行く儘に、受難劇の本地に近づいて来た。海拔二千五百呎の狭長い高原、それを護るが如く、圍む山壁は櫛り上げたやうな<sup>アッシュホルツ</sup> 柵に飾られて四方に聳えてゐる。其間から遠い雪の峰が顔を出し、近く最高く聳り立つコフェル山の頂上に、大きな十字架が天を指さして立つてゐる。何と清く静かな天地であらう。此處に自然の偉大と威厳とが見られる。而も又其中に大きな安靜が宿つてゐる。其偉大と威厳は神の力であつて、其安靜は神の愛である。山頂の十字架は更に其象徴化である。

十一時半頃列車は停車場に着いた、此處こそ、戸數約四百人口約千九百を有する山村オーベル・アムメルガウである。馬車や自動車の客待ち面にしてゐるのを他處に見て、吾々はシュ

ワルツ君に隨いて緑の樹のまばらに兩側を飾つてゐる山間町をテク／＼と歩を進めた。平和の氣分が満々と漲つてゐる。途中髪を長く肩に垂らした大人や小兒に出遇ふ、此處の村民だ、——而も小兒は多く跣足である。丁度バイブルの繪に見る古代の風習さながらで、基督の時代に有る感がする。清く流れるアムメル川に渡してある小橋を渡ると、窓際の壁にアラベスク式の模様を畫かれた家があるのが殊に目につく。小さな郵便局や銀行、トマス・クックの出張所や受難劇の繪葉書などを賣る店、彫刻の賣店やら、受難劇の博物館などの前を通過し、右折して、やがて、シュワルツ君は某建物の中に吾々を連れて入つた。其處は何か云ふ銀行の出張所でもあり、案内所でもあつた。シュワルツ君はやがて、例の髪の長い、跣足の子供に某素人屋を私等二人の宿として、案内させてくれた。此受難劇の季節には世界中の旅人が澤山入り込んで、迎も専門の宿屋だけでは足りないもので、丁度我邦軍隊行軍の際、山間で、素人屋が宿所として徴發せられるやうに、村中の家で部屋に餘裕のあるものは残らず俄か拵らへの宿屋とせられるのである。髪長の子供は町裏の丈な十草花が咲き亂れた畑中の小綺麗な家に私等を案内してくれた。チップとして十マーク（當時一マークが日本の三厘）をやると其

子供はさも有りがたさうな態度をして去つた。

私たちの部屋は三階の屋根裏部屋であつたが、ベットも、衣裳戸棚も粗末ながら新調のものらしく、バルコニーには草花の鉢が置いてある。其處に出て見ると、彼方には遙かに雪の峰が見え、コフェル山頂の十字架は手に取る様である。昔アレクサンダー公が其兄弟ブラジルの皇子と受難劇を見に来たが、宿るに家なく、大降雨の夜を、乗つて来た馬車内で明かした事や、某亞米利加人が郵便局長の家で、設備もしてない部屋に強ひて泊らせて貰つた事や、食堂にでも寝せて貰つて有難がつたり、枯草の堆積した中に眠つて夜を明かしたりした者のある事やを聞かされると私等の宿は金殿玉樓の感がした。

宿の籬根から擴がつて、千々に咲き亂れてゐる草花は二丁許り行つて、緑の樹の二三に遮ぎられてゐる。其枝越しに白壁作りの一棟の建物が見える。これこそ受難劇に次いで、此山村を天下に名あらしめた彫刻を教へる學校である。生徒は約百人許り、主として此村の子弟である。

後でシュワルツ君に案内せられて、其學校を訪れ、親しく校長に會つても聞き、又シ君から

も聞いた話であるが——此邊りは昔は茂つた森や林が澤山あつて、熊や狼の棲處であつた、僅かの住民共は瘠せた原野を耕して食を得、野獸を狩つて其れを補つた。

果しなく續く森が朝夕陰鬱の影を投げる此山谷には春夏秋の間が短くて、冬の間が長い。開墾耕作收穫の期が過ぎると、間もなく澤山の雪が此處を訪れるので、戸外の仕事はもう出来なかつた。で農民共は爐邊に坐して、手當り次第幾らでも得られる木にナイフを動かして彫刻を始めた。人類の有する藝術衝動は彼等のナイフを驅つて、簡單ながら、屋根の端や、窓の縁、腰掛の背などを飾らしめた。スノープを啜る匙も、ナイフの柄なども出来た。アルゴイのセント・マグナスが此荒野に来て、遠い國で十字架にかゝつて死んだ人の畏敬すべき物語を説教してから、其話は永い冬の日々にナイフを動かす此村人の口に幾度か繰り返へされ、遂には其姿を木片に生かさうとするに至つた。後ライテンブーフの大僧正が折々此地方に派した頭巾、草靴掛けの僧共は、基督受難の光景を一層合點せしめるやうな繪も像も持つて来て、村人共を集めて、見せたり、語つて聞かせたりした。此純樸な自然の民は非常に深い印象を得て、一層生き／＼とした其面影を木片に表はした。ライテンブーフの僧はこれを見て

激賞し、彼等の數人を連れ歸つて寺院の器具などに彫刻せしめた。此様にして此地方の民は一方宗教的感化を彌々深く受けると共に、彫刻而も宗教的彫刻に段々長するに至つた。其後バヴリアのルイス帝はエタル大寺院建立の時、其處から三哩隔つた此オーベルアムメルガウの村民に、彫刻の技で、其工事を助けたと云ふ廉で、地租を免じた。こんな事からして、此村民の彫刻が世に知れ渡ると共に、彼等も一層其技に勵むに至り、今日の如く上達發展を見るに至つたのである。

かやうにして、此村の主なる職業は彫刻となつたのである。受難劇の演者の大部分は此職業に従事する者である。彼等は朝夕木片に對して古來血潮に流れてゐる宗教心の對象、基督の像や十字架や受難悲劇の光景を如何に活かさうかと工夫するのである。作り出された彼等の藝術には命があり、熱がある。此様な宗教的の生活からバッション・ブレイは十年毎に作り出されるのである。演出される藝術は彼等が久しく朝夕頭に畫き、鑿に現はした姿であつて、只形式を異にして現はれたに過ぎない。殊に實演中の活人畫を目にした時には、何處で見たのよりも藝術的で、彼等の彫刻部屋から抜け出て來たのではないかと思つた。

私たちは着いた翌日バッション・ブレイを観た。朝八時から午後五時半迄續くのであるが、途中晝飯の爲め十二時から一時迄一時休演する外に休憩は更にない。

S君は其夜か其翌朝ミュンヘンに歸るので、私は其夕かた彫刻學校の直き近くに轉宿して、シュワルツ君と同宿した。家は少し古いが落着いた宿だ。私等の室は二階だつたが、路に面し山に向つた室が私のゝで、後ろの方の室がシ君のゝであつた。

月はないが星の輝く晴れ渡つた静かな夕であつた。翌朝寺の鐘や、牛羊をよび出す牧童の角笛の音に目が覺めた。牛羊の頸に鳴る鈴の音や、牧童の牛羊を追ふ革鞭のパチ／＼と云ふ音が、朝の静寂を破つて聞える。やがて、私の部屋の前にあるバルコニーでシ君と山をながめ、お寺の鐘を聞き、牧童の羊追ふ影に目をやりながらパンと紅茶で朝食を済ました。此日は前日入場し得なかつたり、近郷から集り來る人の爲めに、既定の日取以外に臨時に受難劇の開演があつた。

此日はシ君に伴れられて、再び其れを觀に行つた。晝飯休演の時、シ君に伴れられて、舞臺監督であるジョーデラング(彫刻家)を其作業場に

訪ひ、舞臺の内部を見せて貰ふことを頼んだ。すると彼は心よく承諾してくれ、五時半閉場後舞臺内全部を見せてくれた。

彼此七時頃であつたか、シ君に伴れられて、例のエタル寺院に参詣にと出かけた。途中危い糸の様な岩の小路を匂ひ／＼登つて、斷崖の洞穴にマリアの像が安置してあるのを見る。其處を下りて、少し行くと又路傍の岩石にマリアの像の彫りつけたのがある、丁度我邦の山間などに観音像が安置してあつたり、彫りつけてあつたりするのによく似てゐる。雪を頂く山が段々近くに見える、谷は愈々迫る。谷川の流れる音がする、山の麓には一軒家が見える、炭小屋然たるものも近くにある。夕暮家の少し群れてゐる中に、山を背負つて、一際高く大きく見えてゐるエタルの寺院に着いた。これこそ、オーベルアムメルガウをして今日あるに至らしめた古刹である。寺を中心に學校がある、丁度其生徒が食後の運動らしく、盛に遊戯をしてゐた。寺院の中に入り、彼方此方見物して、最後に有名なマリアの像の安置してあるお堂に入り、集り来る善男善女と共に夕暮のサーヴィスに列した。それが終つたのが八時過ぎであつたが、門を出ると新月が空に輝いてゐる、阿部仲麿の昔も思ひ出でられて、懐郷の情が

頻りに動く、近處のレストランに立寄り、エタル寺院のある爲であらう、山間としては意外に大きな、氣のきいたものだ。少し時が後れたので、客としては私たち二人だけ、ビールを飲みながら語り／＼夕食をすました。其處を辭して外に出ると、新月も影を隠して、星のみが澄み渡つた空に涼しく輝く、静かな夜の道を踏んで二人は宿へと急ぐ、蛙の鳴く聲がする、谷川の音が響く、生れ故郷の山間さながらである。朝夕念頭を去らない病母の身が頻りに思はれる、

故郷を萬里の餘處の谷川に

母思へとや蛙鳴くなり

清く流れるアムメル川の邊りに牧羊の首に鳴る鈴の音が闇を通して響いて来る、モー／＼

と鳴く聲は親牛を慕ふ仔牛の聲か。宿に着いたのは十一時頃であつた。

其翌日彫刻學校を參觀し、村役場を訪ね、三度基督の役に選ばれたアントンラングに遇ひパッション・プレーに關し種々の事を聞いた。

(此様にして見たり、聞いたり、更に讀んだりした事を素にして、便宜分類して、記することにする)



## パッション・プレーの由來

人間として、自分の内的生活を言葉に表はし、更にそれを何等かの劇的動作に表現しようとする者はない。而も其慾望の最強く起るのは内的生命に最も強く生きる場合である。古代の民が自己の全生活を擧げて、内的生命の根柢に生きんとし、若しくは生きるのは自己の内的生命を悉く神に委ねて、生きんとし、若しくは、生きる場合であつた、蓋し彼等には科學もなかつた、哲學もなかつた、彼等は直觀に依つて神を見、想像に依つて天國を作つた、彼等の生活意識の燈明となるものは只神のみであつたからである、そこで彼等は悲嘆や歡喜を劇的動作に表はして神に訴へたり、告げたりした。それは丁度幼兒がちだんだを踏み手を振り、泣きわめいて、自己の悲哀を慈母に訴へたり、足を踊らし、手を舞はして、笑ひ興じながら自己の歡喜を慈母に告げるのと同じである。従つて又劇的動作は人のハートを動かし、感化を與へる點に於て其效果他の表現よりも大である。世界何れの國でも演劇の濫觴が宗教に發し、更に演劇が教化の手段として重んぜられたのも不思議ではあるまい。ローマの

文明を呪つて生れた基督教も早くから劇を生んだ、カトリック教の祈禱書は高尚な詩である、劇である、殊に福音書や聖者の傳説を材料にした本當の劇も疾くに現はれ、四世紀の頃には已に其影が見えた。六七世紀の頃、それが、一層具體的に表はれ、パッション・プレーも生じて來た。それは二千六百の詩句から出來てゐて、基督の捕虜、虐待、裁判、磔刑、復活の六場面から成つてゐる。其後此種の宗教劇が生れたが就中ミラクル・プレーが最勢力を得て、中世紀に於ては歐洲各國行はれない所はない程であつた。併しパッション・プレーは臺本こそ異なれ、主として獨逸に最隆盛を極めた。其後宗教劇は歐洲各國に段々勢力を失つて來たが、獨り、獨逸就中バヴァリア地方には宗教劇殊にパッション・プレーが依然として盛に行はれた。今から百餘年前には此地方の殆んど各都市各村落で、それごとく此パッション・プレーを行つた。由來、パッション・プレーは一種の民衆劇で、各村各部落が共演するものである。素より初めは僧院などの僧侶連中のやつたものでもあるが、後には民衆自らがやるやうになつたのである。

バヴァリア地方は受難劇のみならず、他の民衆劇が古來盛に行はれてゐた、一五七四年にミ

ンヘン市で演ぜられた「コンスタンチン帝」と云ふ祝祭劇はまる二日も続き、飾り立てた全市が舞臺となり、千有餘の市民が共演した。市の門からコンスタンチン帝が四頭立の戦車に乗り、四百の騎士を引具して乗り込むと云つたやうな大袈裟なものであつた。其二年後に行はれた「エステル」の民衆劇も二千人の市民が出演した。是等がワグナーの上演法にも影響を及ぼしたと云はれてゐる。今でも近代文明の餘り入り込まない村落などでは村民が自ら劇を作り、自ら共演してゐる。

あの年中雪を頂くアルプス連山をながめながら大きくなつたバヱリアの自然の民は丁度子供のやうである、詩想は理性よりも強く、想像は物質界の現實よりも遙かに生を動かす原動力となる、其處に藝術が生れ、宗教が命を現はす、彼等の間に民衆劇が盛なもの、パッション・プレーが勢を得たのも無理はあるまい。

原始的な、近代文明に毒せられない自然の民に取つては雷霆も電光も雨も風も悉く神の現はれである、彼等は事々物々に神を見、物心兩界に區劃を立てない。

バヱリア山間オーベル・アムメルガウに疫病の襲ひ來つた時に其自然の民は神の手にすが

るより外に道を知らなかつた——一六三二年疫病が歐洲殊に獨逸に猖獗を極めた、處がアムメル川の上流オーベル・アムメルガウ丈は山に隔てられてゐる爲か、其難を免れてゐた、が村民シーレルと云ふ男が此村から夏中、山越の隣村へ出かけて、働いてゐた所が、教會のお祭も近づいて來たので、郷里の村民共の作つた隔離線を破つて歸り、家族と楽しい日曜を送らうと決心し、遂に山を越してアムメル谷に下りて來た、處が其翌日、彼は隣村から傳染して來た疫病の爲めに倒れた。それから其疫病は村中に蔓延して、數日にして八十四の死者を生じ、一村全滅をも呈しかねまじい形勢となつた。村民共は他に取る方法とてなく、遂に神に救助を切願した、而も、若し神が自分等を此災厄から救助して下さるなら、十年毎に必ず基督受難の劇を演じますと誓を立てた、不思議な事には其時から疫病は此村から去つて仕舞つた、との事である。そこで其翌年神への誓約は履行せられた、即此村に於ける最初の受難劇は演ぜられた。其年から十年毎に行はれて、一六七四年迄續いて來た、がそれが或事情の爲めに一六八〇年迄延期せられ、爾後此年から起算して、十年毎と改められた。かくて、次の世紀即十八世紀の中頃中止しなければならぬやうになつた。其理由は斯うである——

其當時歐洲諸國に盛であつた宗教劇は宗教的精神に適しないやうな分子を取り入れるやうになつた。即俗情に媚びて、徒らに道化た非常にグロテスクな形をした寓意的の物を用ひ、観客を笑はしめる事に力を注ぐやうになつて來た。そこで宗教界に反對の聲が湧き出で、教會長の異議に依り、政府もこれを禁ずるやうになつた。獨逸も矢張其例に洩れず、宗教劇殊に基督受難劇の上演を禁ずるに至つた。所がオーベル・アムメルガウの村民はこれを肯ぜず一七〇年バヴァリア政府からの禁令に對し、同年四月、神に對して昔の誓約を履行しなくてはならないからとの理由の下に、解禁を其筋に嘆願した。だがそれは無駄であつた。其後再三嘆願を繰り返へしたが矢張其効果がなかつた。それでも、村民等は何處迄も素志を貫徹しようと思つてゐた矢先、一七七七年時のバヴァリア王マックス・ジョゼフが死し、チャールス・テオドルが位に即いたので、一七八〇年更に嘆願した、所がそれが幸に受入れられ、飛ぶ鳥も落さん許の時の宰相の權勢も禁ずることが出來ず、オーベル・アムメルガウにだけ基督受難劇の上演を許された。其後又一八〇〇年上演が終ると翌年四月十四日に又其禁令が出たが一八一一年三月三日に又許可せられた。其後引續き行はれ來つたが、段々好意を以て迎へられ、一

八九〇年にはオルデルブルグのピーター公が躬ら其上演を觀覽し、「我國に此様な教區のあるのを誇とする、爾今全力を擧げて此大企圖を助けよう」と公言するに至つた。

此様にしてオーベル・アムメルガウのバッション・プレーは中世紀宗教劇の最大遺物として、今日に至り、其名聲を世界に博するに至つたのである。

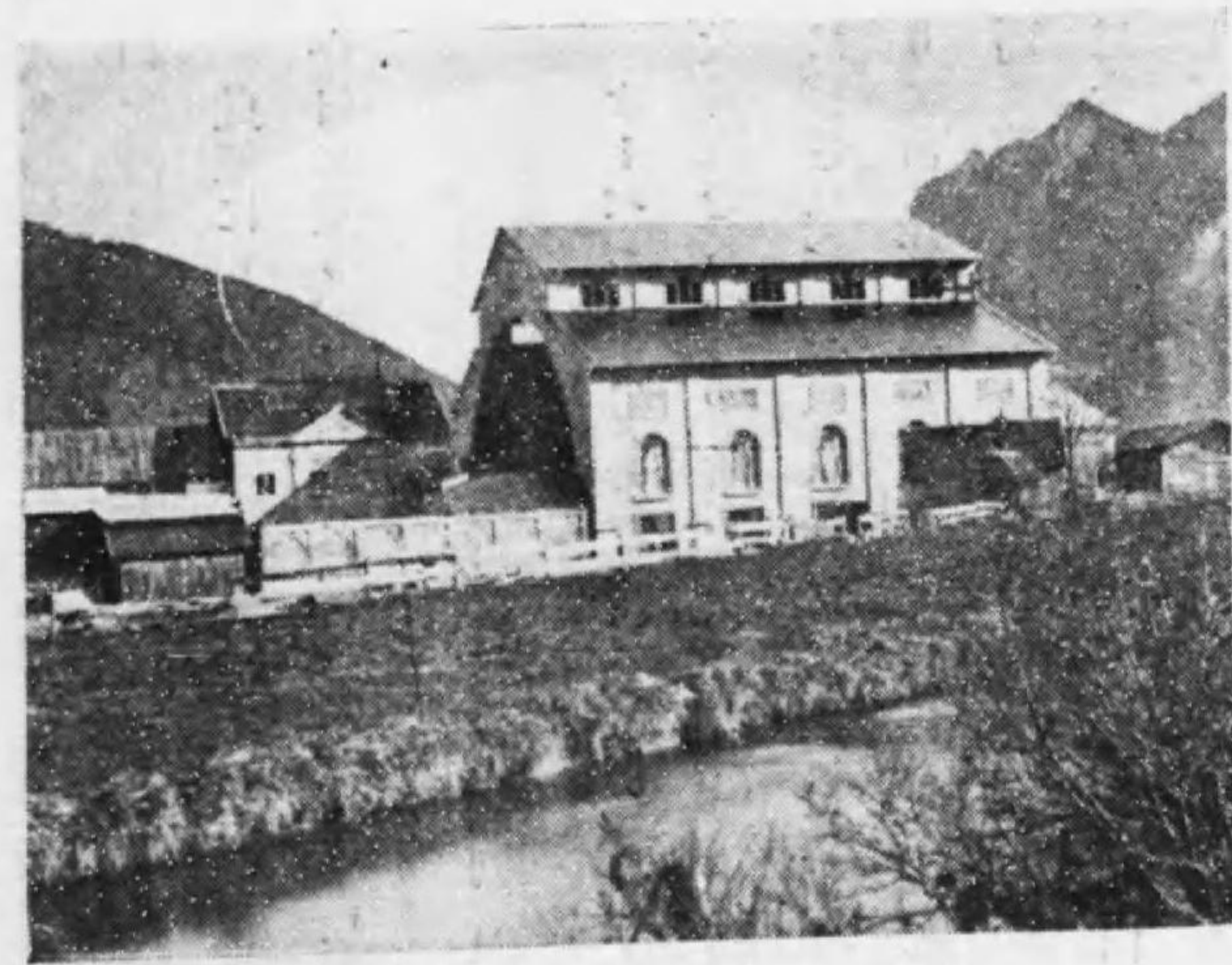
### 基督受難劇場

オーベル・アムメルガウのバッション・プレー最初の劇場は何れの國の宗教劇の場合と同じく教會内であつた。所が數十年後には見物人が段々増加して、狹隘を感じたので遂に教會の庭に移された。が一八三〇年には其處も亦狭くなつて來たから、今度は村の北アムメル川の邊りにある牧場即現在劇場のある場所に移された、それは可なり大きくはあるが原始的木造の、而も演了後は一部取り壊はされるやうな甚だ粗末な建物が舞臺として立てられた。其後十年二十年と経過するにつれて益々擴張の已むなきに至り、遂に一八七〇年には一萬マールを投じて、全部舞臺を改築し、木造ではあるが、見物小屋をも建築するなど大に新擴張をやつた、



。るあが根屋で臺舞内が央中。臺舞の劇難受  
いなが根屋で臺舞外は他

議とか、最後の晩餐とか、十字架上、磔刑とか、昇天とかの場面、又更に活人畫などが演ぜられる。前舞臺は全く野天で後には自然の山が見え、時には鳥が鳴いて、空を飛んだり、電光が凄じい光景を添へることなどもある。此處では基督のゼルサレム入りとかピレリタスの基督懲戒とか、基督の十字架を運んでゴタードへ行く場面とか、總て幾百人の群衆の登場する場面を演ずる所で、コーラスも亦此處で奏せられる。横舞臺は屋根があつて、人の住家のやうに設へてある。向つて右がアナナスの館で、左がピレリタスの館である。ブーネン・スト



場劇難受のウガルメムア・ルペーガ

所が、一八九九年には見物小屋だけは壊れた爲め、今のやうな鐵骨の大建物としたのである。舞臺はソフ・クリーズと沙翁のとを偲ばしめるものである。即ギリシヤ式エリザ朝式の半野天のものである。舞臺の幅は全部で四十二メートル、内舞臺の間口が十メートル、高さが十六メートル、奥行が二十五メートルある。舞臺は四の部分から出来てゐる、即内舞臺、前舞臺、横舞臺、ブーネン、ストラッセ、(内舞臺の兩側に沿うて、奥に走る通路で、市街をかたどるものである)である、内舞臺のみは普通の舞臺のやうに屋根があつて、其處で高官の會

ラッセはエルサレムの町を現はすもので、無論屋根がなく、内舞臺の兩側に沿うて、見通しとなつてゐる、モップ・シーンや群衆集散の光景を現はす爲めのものである。

舞臺は西に面してゐるのであるが、北背には二十二の仕度部屋、道具部屋、休息所などがある。

オーケストラは前舞臺の前の低い所にある。

見物席には屋根があつて、それは六つの大きな鐵穹から出来てゐる、其費金は廿五萬マアク許りを要したとの事。座席が全部で四千五百、尙ほ二三百人は立見の出来る餘地がある。

兩側は自由に開くことが出来、十二の門戸からは四千有餘の見物人が三四分に出てしまふ様にしてある。

殊に注意すべきは見物席が、普通よくあるやうな、バルコニー式になつてゐない事である。

現今歐米では新劇運動の盛になるに伴れて、其精神は見物席の建築法に迄及んでゐる、新しい劇場は總てバルコニー式を採用しないで、平土間式の後上りに設へる。一番理想的だと云

はれるミュンヘンの藝術座も、ベルリンのラインハルトの劇場も、パリのコッポアの劇場も、ロンドンのエヴリマン劇場も、ニューヨークのリッルシアターも皆さうである。是は新劇運動の理想は演劇を総合藝術と云ふ本義に適はしめ、観客の受けるエフェクトを最效果あらしめようとするからである。観客のムードを混亂せしめない爲めに劇場の色でも金ピカなどにはしないで、落ち着いた色にする。此等の點ではパリ人の最誇るかの大オペラ劇場などは最も時代後れのものである。ロンドンのコート・シアターなどは非常に古い劇場だが、近年全部卵色に塗りかへた。光線などでも、足下から出る不自然なフライトは新しい劇場では用ゐない。其れ位だから、横から見たり、餘り上から見たりするやうなことを観客に強ひて、不自然なエフェクトを與へるやうな事は避けるのである。

であるから、オーベル・アムメルガウの受難劇場の見物席は昨今歐米に唱へられ、實行せられてゐる新舞臺藝術の精神に適するものと云つてよい。

### 衣裳、音樂、出演者其他

十七八世紀の頃にはパッション・プレーを演ずる村が約五十もあつたが、其出演に用ゐる衣裳の費金は大したものではなかつた、時には寢臺用の敷布で間に合はしたとさへ屢々あつた位である。後パッション・プレーを演ずる村を保護してゐた僧院の多くが演出法を指圖するやうになつてからは、僧院がそれに適當な材料を供給したり、金錢なども與へたりした。ワイルハイムの町が一六〇〇年初めてパッション・プレーを演つた時などはウイルヘルム公の子マッキンミラン公が衣裳の費金一切を提供したとの事である。

所がオーベル・アムメルガウ村では村民自らの費金で材料を求め、自分等の圖案に依り、自分等の手で作るのである。近來衣裳には二三萬マークの金をかけるのであるが、主役になる者には純毛や絹のきれに金の縁取などをしたのを着せる。猶太人とかローマ兵などには古來の傳説に依り、それに適する衣裳を作つて着せる。殊に兵士のピカ／＼光る甲冑や、磔刑吏や婢などのエキゾチックな服は人の目をひく。又コーラスの着るギリシヤ風の長い服はゆつたりした、氣持のよいものである。

現在用ゐてゐる音曲はオーベル・アムメルガウ村の生れで、村の教師であり、教會音樂の指

南役であつたデドレルが作つたものである、其音樂が子供らしい、原始的の基調を有し、而も其中に素樸な宗教的感の漲つてゐるのは慥かに此平和純樸の民の心を代表し、かねて此宗教的環境の響を傳ふるものである。而して、舞臺やオーケストラで演奏する歌手、樂手は男女共此村以外で音樂を學んだ事のない者許りであつて、よく其曲を解し、其精神や心持を奏で出だすことが出来るのである。其悠然として、靜かな調子は、其服裝とよく調和する。

パッション・プレーに關係したり、出演する者は生え抜きのオーベル・アムメルガウの村民でなくてはならない。又其中でも結婚した女子は登場する事が出来ない。又其中でも世に後ろ指をさゝれる事のないやうな者でなくては選ばれない。であるから新來者でなかつたり、既婚者でない限りパッション・プレーに出演すると云ふ事は非常な名譽な譯である、であるから村民に人生の目的は何かと問ふと、パッション・プレーに出演する事であると答へる、婚約の成立つてゐる女でも受難劇が済むまでは結婚しないのである。

こんな譯だからパッション・プレーが一度済むと後五年間位は其時の噂を兎や角と爲續ける、其後になると今度は五年後の登場人物の噂をする、誰が此次には重な役に選ばれるであらう

とか、前の誰々が矢張残るであらうとか、但しは新しいのが選ばれるであらうとか、集る度に話し合ふのである。現に三度基督の役を務めたアントン・ラングは最早年を取つてゐるので、此次には是非若い者が代る事になつてゐるが、私の此村を訪ねた時にも、已に未來の基督の演者は甲であらうとか乙であらうとか噂されてゐた。

次の上演年月から約三年許り前、村民は先村役場を集り、次に受難劇を演すべきか、何うかを議す、これは一種の形式であつて、可決されるのは勿論の事であるが、單に形式的だと笑つてはならない。パッション・プレーは舉村の大事業であり、大生命であつて、何處迄も村民全體の意志を代表するものであるから、先其出發點に於て、是非此形式を取らなければならぬ。數ヶ月後村民は再び村役場を集り、それから受難劇委員會を組織する爲めに、村會議員十四人に更に加はるべき新會員六人の候補者二十人を推薦する。而して其委員の會長としては村長を戴き、名譽會員として、村の教會牧師を加へる。それから數日の後前に推薦した候補者二十人の中から六人を選び此處に初めて委員會を組織する。

此様にして組織せられた委員會は受難劇一切の事を委ねられる、同時に全部の責任を負は

され、又權能をも附與せられる。而して此委員會の討議や計畫は嚴秘に付せられる。

それから委員會は政府に向つて、受難劇上演の許可を乞ふ、許可が下りると、委員會は金錢の支出、収入の處分其他一般の問題を議し、直に特別委員會を他に幾つも組織し、演藝、音樂、印刷、寫眞、旅客宿所、切符等巨細に渡る一切の事をそれ／＼處理せしめる。

かくして、出演者選擇の時期が来る。それは大抵上演の前年十月半頃である、此時期になると委員會は古例に倣ひ、村の教會に參詣し、此むつかしい企圖に幸を惠まれんことを、と神に祈る。其式が終ると出演者の選擇に取りかゝる。かうして舞臺監督、副舞臺監督を初め、消防隊、警護隊などに至る迄約千人許りが選定せられる。

此様にして、舞臺に立つ者は、前年の十一月の頃、本讀みを始め稽古に取りかゝる。各一人前の役を持つ者は誰れでも、誓約書に署名し、自分に當てがはれた役を喜んで引受け、練習を勵み、全力を盡して、演了することを誓ふ。若し其誓約に背く者は嚴罰に處せられる。

思ふに若し for the people, of the people, by the people が民衆藝術の根本原則だとすれ

ばオーベル・アムメルガウのパッション・プレーこそ實に其理想に近いものと云つてよからう。脚本は嘗て此村民の渴仰を受け、村民を愛し、村民を導き、よく村民の意を解し、身を擧げて此村の爲めに盡し、果ては此村の土となつた牧師ダイゼンベルゲルの筆になり、これに附する音曲も亦生え抜きの此村人の手になり、千八九百の村民中千内外は或は舞臺に立ち或は其雜役に任ずる、既婚の女や老弱の男子や其他幼者、病人、不具者等を除くと、全部受難劇の演出に加はるのである、イヤ其加はり得ない者すら、嘗ては加はつた者、これから加はり得るものである、中には内にあつて父母兄妹の出演を授けるものもある、中には通信宿泊などの任務にたづさはつて、受難劇進行を間接に助ける者もある。況んや劇の上演が全部合議的に村民全部の意志に依つて左右されるのを思ふと、オーベル・アムメルガウの受難劇は村民擧つて作り出だす一大共作藝術であつて、他に容易に見出し難い民衆劇と見ることが出来る。

## 基督受難劇の臺本

### 一、其由來

基督受難劇臺本の最初の作者は、誰れであるか判然しない。其最古いのは前にも記したやうに六七世紀のものであるが、其廣く用ゐられてゐたのは今ミュンヘンの圖書館に残つてゐる二つのものである。其一つは九世紀の作で二千六百四の詩句から成り、他の一つは十一世紀の作で二千七百の詩句から成つてゐる。時には此兩方を取捨し、一つにして用ゐたこともある。オーベル・アムメルガウの木彫商ギド・ラングの持つてゐるのは一六六二年の古い四ツ折版で百五十一頁四千五百の詩句から成つてゐる。此臺本はオーベル・アムメルガウで眞の僅かの間用ゐられたが、一六八〇年にはウエルハイムの牧師に依つて餘程改訂せられた。後十八世紀になつて前にも述べたエタル寺院の僧が新しく作つたが一七五〇年及一七六〇年の僅か二回だけオーベル・アムメルガウではそれを採用した。が一七八〇年には同寺院の他の僧



が又新しい臺本を書いて提供した。後又同寺院の僧オットマン・ワイスが更にそれに改訂を加へ、偶意的部分を省き、一層藝術的の言葉に書きかへた。其上オーベル・アムメルガウの生れで、村の教會音楽隊の指導者であるデッドレルがそれに音楽を附した。所が其後デッドレルが其音楽を少し作りかへたので、一八一五年ワイスは其臺本を全部書きかへた、十九世紀の半に至り、ワイスの弟子でオーベル・アムメルガウの牧師であるダイゼンベルゲル (Daisenberger) と云ふ智徳兼備の僧が二年間かゝつて、全部修正を加へた。併し、種々の理由からして歌の部分だけは少しも改めなかつたので、音楽は矢張デッドレルの作其儘である。一八六〇年には新しい臺本に依つて初めて演ぜられた。それから今に至る迄、オーベル・アムメルガウで用ゐてゐるのは此臺本である。

附記、受難劇臺本の最後の改訂者ダイゼンベルゲル (一七九九年五月誕生——一八八三年四月死去) は只に宗教劇に筆を染めた許りでなく、村民の爲めに、多くの普通一般の劇を作り、冬の夜や祝祭日などに、村民にそれを演ぜしめた。又彼はグリースの古劇にも造詣が深かつたので、村民の爲めに、グリースの古劇なども譯してやつたのである。こんな譯だか

らパッション・プレーにもグリースの要素が多分に吹き込まれてゐる。で彼は宗教上の師である許りでなく、藝術上の指導者としても村民の爲めに身を捧げ、終には慈父の如く愛惜せられて此地の土となつた。

受難劇の音楽の作者デッドレルは一七七九年一月オーベル・アムメルガウの宿屋の息子に生れ、幼にしてエタルやローゼンバッハの僧院に入つて樂隊童子となり、傍ら學問にいそしみ、後首都ミュンヘンに出で、哲學を研究すると共に音楽に身を委ねた。彼は天性音楽的天才を有し、年がまだ二十になるかならないかで、新王都入の際のオペレットを作つたほどである。

## 二、其梗概及舞臺上の印象

脚本は序曲、三部十七幕、終曲から出来てゐる。各幕の初には前口上、活人畫、コーラスがある。尤も活人畫は最後の二アクトだけにはない、其題材は次のアクトのと同じ精神のものを舊約聖書から取る。コーラスは三十五人の守護天使から成り、大抵の場合活人畫の意味

を諺ふ。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

此バヴァリア山間の傳説と風習とに依り、八時十五分、打出す砲聲は靜かな山間に響き渡つて、受難劇開演を豫告する。

八時になると舞臺の前面の凹んだピットに姿を隠してゐるオーケストラから前奏が嚴かに響き出す、其樂の音が未だ消えやらぬ内に、例の青天井の前舞臺——ギリシヤ式の野天舞臺——の兩側から三十五人のコーラス——守護天使が威儀正しく、列を作つて、しづくくと現はれて來る。皆白、赤、紫、黄など種々色を異にした筒袖様の長衣を着流し、締めた帶紐を色美しく前に垂れる、其上に羽織つたガウンは踵をかくすほどに長い。中に十字架のついた冠様の帽子を蒙つてゐるのが男で、髪を長く後ろに垂れ、美しいリボンで、それを鉢巻様に飾つてゐるのが女である。此一隊が出るかと思ふと、十字架のついた錫杖を手にする合唱隊長を中央に一字形に並ぶ。と、隊長が先づ

人々よ恭しく身を屈め

神の御前にぬかづけよ

と諺ひ出す。

それが終るか終らないかで、コーラスは八字形に左右に開く、と同時に中央の内舞臺の幕が上がる。

活人畫——アダム、イヴがエデンの樂園を追はれる景

と、コーラスは

人は暗き罪にエデンの園を追はれ

命の樹に行く路を絶たれぬ

されどカルヴァリーの峰よりは

旭日の光輝ぎ出で、闇を照らし

命の樹よりは平和の風現れ出で、

世界のはてまで吹き互る。

と静かな平和な曲を合唱する。

やがて幕が下りて、合唱隊は再び一字形になる。

とプロローグは「吾々の爲めに身を棄て、死出の旅路に赴かれし救主の愛の絆いとづなにひかれて此處に集れる人々は、眞の愛と感謝とを捧げて、主をば仰ぎまつれ、慕ひまつれ」と云ふ意味の事を謡ふ。

活人畫——「十字架の禮拜」

コーラスの讚美、感謝の歌を奏づ、或者は跪き、或者は首を垂れ、或者は身を屈め、各禮拜の姿態を現はしながら。

## 第一部

（基督のエルサレム入りからゲツセマネの園で捕虜となる迄）

### 基督のエルサレム入り

346  
ホザナ（神を讚美する謡）と叫ぶ聲が聞える。と幕が上つて内舞臺は寺院の景。老若男女子供等五百許りの群衆、手に持つ棕櫚の葉を振り、歓迎讚美の歌を謡しながら市の門から出で來

347  
り、前舞臺、内舞臺に一杯擴がる、それに迎へられて、基督は驢馬に跨り、前舞臺の中央に現れて來る。と基督は驢馬から下りる。使徒に導かれて、群衆の中を悠々と歩み、手を伸べて、彼等に祝福する。

見ると内舞臺の寺院には兩替屋や市場商人が澤山込み合つてゐる。商人は此通りかゝりの人——基督——に羊や鳩を賣りつけようとする。基督は民衆から目を轉じて、寺院庭内の此賣場をながめ、つかんと商人共の只中に進み、是迄黙してゐた彼は憤然として色をなし、「何たる様ぞ。吾が天父の家はかくも潰がされるか、それは神の家か、但しは市場か、汝僧侶共よ聖者の番人共よ、汝等は此んな不埒な事を見ながら黙つてゐるのか——」

と叫ぶ。これを聞いた僧侶や商人共は大に憤る。基督は尙言葉を次いで——  
「主はのたまふ、吾が家は祈禱所とこそ云ふべけれど。汝等はそれを泥棒の巢窟とした。」と聲高らかに叫びながら、兩替屋のテーブルや、鳩の籠などを顛覆して仕舞つた。すると故たれた鳥は此野天舞臺から嘖々として、外に向つて飛んで行く、太古の色に聳えてゐる山と更にそれを覆ふ悠久無限の蒼空とは、これを迎へて、何千年の昔さながらの光景を感じしめ

る。

此様にして大悲劇の幕は開かれる。

寺庭商人、僧侶、パリサイ人などは相結んで、基督に復讐を謀る。僧侶と商人等は民衆を使喚して、基督に對し敵意を懐かしめる。

### 法廷の場

348  
幕が上ると内舞臺、高等法廷の態。高僧で又高等法官であるアンナスとカイアフスとが中央の高座に席を占め、他の役員は右に左に二列に坐す、基督に罵倒せられた怨を晴らさうと思つて、訴へて出た僧ナザナエルが基督の罪狀を數へて求刑する。又彼の要求に従ひ、侮辱を受けた商人共も證人として出廷する。カイアフスは此ガリラヤ人に國法を冒される危険があると説き、アンナスは基督を殺さなくては胸を安んずる事が出来ないと主張する。そこで其會議は終に基督の逮捕を議決する。其結果基督の弟子の一人を誘惑して、其破滅を來

349

たさしめる策を講ずる。

### 基督母子の別れ

活人畫の示す舊約聖書中の「トピアスと兩親との別れ」、ソロモン歌中の「花嫁が別れた花婿を慕ふ情」に泣く涙はやがて、基督母子の別れに注ぐ涙である。

コーラス

何處に背の君行きました、オ、何處に

人の子の中の最も優しき君よ。

あゝ、我眼は溢れに溢る

君を焦がるゝ愛の涙に

來ませ、オ、來ませ、再び歸りませ、

見ませ吾が絶えず流るゝ涙を

などか愛しの君よためらひ給ふ  
君が優しき胸に我を抱くことを

オ、來ませ我胸に、オ、來ませ、

かくて再び我を君が胸に抱けかし

されば片雲だも曇らし能はざらめ

其再會の幸をこそ

とコーラスの奏でる歌曲は人の胸底に悲哀の調を送る。

基督はベサニイでペテロ、ヨハネ、ユダに自分の身の果ての來たことをほのめかす。

基督は彼等を従へてシモンの家に行く、とラザラスは感謝の念を以て喜び迎へる。彼の妹  
マグダレンは泣いて自分の愛人基督の行くを惜む。基督の足を高價の塗油で洗ふ、すると、  
金にきたないユダはそれが浪費だと云つて非難する、基督は其言葉を責め、マグダレンの好  
意を謝し、天父は御身に報い給ふべし、と云ふ。

かくて基督がシモンの家を立ち去らうとする時、數人の婦人が向ふからやつて來る、其中  
の一人が基督の影を見ると急ぎ足に寄り來つて、

「オ、お前が出かけない中に今一度遇ひたくて、急いで來たのぢや。」

と憂はしげに、基督の手を握り、縋りかゝる。

基督「母上、エルサレムに行きかけてゐるのでございます。」

マリア「エルサレムにとや、エホヴァのお寺がある所だ、神様にお前を捧げようと思つて、  
お前を抱いて行つた事のある所だ。」

基督「母上、神様の思召し通りに私の身を捧げなくてはならない時が來たのでございます。  
私は犠牲になる覺悟をしてゐます。」

マリア「ア、私はそれがどんな犠牲であるか、ちやんと分つてゐる」とマリアは悄然。

マリア「私は神様の婢だ。神様の思召しなら何でも我慢する、が一つ、ねお前！ 一つお  
前にお願ひがある。」

基督「何ででございます？ 母上！」



神は昔不思議にもイスラエルの子等に供したる。

かくて又彼等の胸を喜ばしたり

カナンより得たる葡萄にて。

されど天より降れる尙ほよき糧を

ジーザスは今吾等に賜ふ

彼の肉と血との神祕より

恵みと救ひとが

吾等の爲めに流れ出づれば。

#### 活人畫

一、荒野に降れるマンナ(甘露)

二、カナナからの葡萄

天樂の如く神々しく、甘露の如くスキートなコーラスの奏樂につれて活人畫の幕が閉ぢ、やがて次のシーンに幕が開くとエルサレムの一室、最後の晚餐は用意せられてある。基督は

長いテーブルに十二の使徒と共に座を占める、レオナルド・ダ・ヴィンチの名畫に彷彿した状景、基督は座を立ち自分の上衣を脱ぎ、盤に水を注ぎ込み、使徒等の足を洗つてやる。こゝが終ると基督は再び座に復し、一同に食を分ち、共に食ひ、共に飲み、且自分の最後の近づいてゐることをほのめかし、種々教訓を垂れる。彼が其使徒中に反逆人のゐることを豫言すると、ユダは驚いて、私に其座を去る。基督はユダを除いた十一の使徒と共に前舞臺に出で、天に祈りを捧げる。やがてオリヴ山に向つて行く。

#### ユダの反逆

幕が上がると最高法廷の場、七十一人の裁判官中ニコデマスとヨセフとが基督の味方をすゝめるのみである。例の商人ダタンがユダを伴れて来る。ユダは稍々躊躇したが、遂に三十銀を貰つて主に反き、主を賣ることを約す。それから彼は基督捕縛の役目を承つてゐる兵士共と出で行く。ニコデマスとヨセフとが基督に味方して烈しく論争したが、結局其議が容れられないので憤然退場するや、法廷は終に基督を死刑に處することを可決する。

オリイヴ山上の基督

幕が上るとオリイヴ山を圍む原野の景、ユダは數人の商人や兵士と共に其處に現はれる。ユダは基督逮捕の機會を報らす合圖に基督に接吻することを約す。

基督は使徒と共に山路を辿り進んで、ゲッセマネの園に出る。基督は死の自分の身に近づくのを感得し、悲嘆の情が其面に現はれる、使徒共がこんな悲しい御様子を見たことがないと云ふほど。

基督は跪いて神に祈る——

「嗚呼！ 闇が吾れを取巻く、死の悲哀が我を圍む、神の審判の重荷が我を壓する、オ、！ 此世の罪人共が我を押し倒す、オ、！ 恐しの重荷よ！ オ、！ 此盃の苦さよ……」

苦悶悲痛の情を吐露して天に訴ふる其さま、神としてよりも寧ろ人間としての基督の心情躍如として現れる。

其處へ天使が現はれ次の如く告げる——

「——汝の闘ひから出で来る幸福を見よ、天父は汝に其れをあてがはれた。……其れを果たし終うせよ、さすれば天の父は汝に榮光を與へ給はん」

基督はこれに神の光明を得て、俄かに苦悶の眉を開き——

「至聖至善の父よ、私はあなたの神命を崇めまつります。私は其れを果たします、御言葉に力を得ました、オ、父よ！ 私は御命令になつた事を喜んで果たさせよう。」

と神に感謝し、神に誓ふ。

ユダは兵士と共に近づき來り、基督に接吻をする。とそれを合圖に兵士は進み寄り基督を捕縛して去る。

(第一部はこれで終る。時に正十二時、晝食の爲め、午後二時迄休演)

第二部

(基督の審問から死罪の宣告に至るまで)

アンナス館前の基督

(此場面になつて初めて前舞臺の向つて右に設らへてあるアンナスの館が用ゐられる)



アンナスは三人の僧を引つれて、彼の館やうたのバルコニーに現れて来る。

アンナスは平和の攪亂者(基督)が手に入るまでは夜も眠られないといふ。

と四人の使者共はユダと共に歸つて来て復命する。

これを聞いたアンナスは大に喜び――

「我が謀成れりだな！ ユダ！ お前の名は此國の歴史に特筆大書するぞ、あのガリラヤ人は死刑に處する」

ユダは此言葉を耳にするや、

「死刑？ 死刑ですつて？」と愕然きやうぜんとして「私は基督あかの生死には責任を持ちません、――

私が基督あかを貴方あなたに手渡したのではございません――」

と一旦は利慾に眩んだユダの心も良心の聲に覺め初めて、自己の責任を免れようとする、終に其席に居たまらないで、あたふたと其處から姿をかくす。其後に基督が兵卒に追ひ立てられて入り來り、訊問を受ける。

基督がアンナスの間に對して、

「私は何も秘密に教へを垂れるやうな事は致しません、私の話を聞いた者にお尋ね下さい。」と云ふや、兵卒は基督の頬をしたゝか打つ。アンナスが退場すると、兵士共は基督を取巻き引率して去る。

やがてペテロとヨハネとが出て來り、心配げに師の身の上を尋ねる。

### カイアフアスに審問を受ける基督

プロローグや活人畫やさてはコーラスが或は語り、或は示めし、或は諷ふ浮世の罪――ナボスが讒言の爲めに刑場の露と消え、ヨブが妻の無情に苦しめられる様、恩師に弓をひくユダに賣られた基督の身の上を思はしめ、同情の涙を催さしめる。

内舞臺の幕が開くとカイアフアス寢室の態。基督は兵卒に引立てられて其處に入り來り、審問を受ける。同時に召喚せられた證人共は基督に對し無實の罪狀を數へ立てる。そこで基督は遂に死刑の宣告を受け、其處から再び拉し去られる。

ユダの改心

ユダは爾後彌々良心の覺醒に自分の罪を悔い、如何にかして、基督を救はうとする。其懊惱の様は活人畫の示すやうにカインが自分の弟アベルを殺した後、良心の苛責に得たまらないで、安息所もがなと徒らに處々方々をさすらひ歩いて、悩み苦しむ様にも比べるべきか。ユダは自分の叛いた師を救はうと思つて、法廷に行き、基督の無罪であることを申立てる。が遂に其甲斐がないのを見て、悄然として、かねて貰つた不義の金を判官の足下に投げつけ、けたましく出て行く。やがて、人影もない寂しい森の中に入り、我身の罪に悩み苦しみ、果ては自責の念に得たまらず、自分の帶紐を樹の枝にかけ、自ら縊れて死んで仕舞ふ。

知事（ローマ政府から任命せられ、地方の行政、裁判、兵事一切を司る）の面前に引出された基督

ダニエルが其土地の領主共に告訴せられ、ダリアス王の前に引出され、獅子の洞窟に投げ込まれやうとする其昔が、今や基督の身の上に再現するのである。

ユダヤの高僧で高等法官である輩（てんこ）は堂々たる扈從を數多引具し、（吠犬）でも追ひ立てる様に、基督を縛して、知事の館（やぐら）につれ來り、最後の判決を仰がうとする。

多くの野次馬は口々に基督を罵り、  
「死んじまへ、此偽豫言者奴！」  
などゝ悪口を吐く。

カイアファスは巧言を弄して、基督の罪狀を擧げ、自分等の審判通り、基督を死刑に處することに同意を求める。

併し知事は基督を館（やぐら）の階段の上に招致し、親しく審問を試み、寧ろ基督に好意を表す。彼は此被告人がガリラヤの生れであることを聞くと直に基督をヘロッド王に送ることにする。訴へて來た高等法官共は知事の命令に従はざるを得なかつた。

ヘロッド王宮殿の場

アンナスやカイアファスは多くの僧侶や兵士共に基督を追ひ立たせて、ヘロッド王の宮殿を

訪れ、王から基督の死刑宣告を受けようとする。が王は基督の死刑宣告に對する責任を自ら負ふことを欲しないで、彼等に同意を與へない。基督を「何も知らない、何も爲すことの出來ない馬鹿者」として取扱ひ、白衣を着せ再び知事に送り返へした。

### 基督再び知事の館に引かれて

高僧や商人等は兵士に基督を追ひ立たせて、再び知事の館を訪れた。彼等は何處迄も基督の死を主張する。群衆は高僧や商人等に使喚されて、基督の死を要めて、囂々と叫ぶ。知事は躊躇し、何とかして基督を救はうと云ふ下心から、古例に慣ひ、踰越節の際一囚人を特赦しようとする。で彼は民衆に基督と殺人犯のバラバスの一を選ばしめる。すると民衆は高僧等の意を受けて、後者の特赦を望み、基督の死を要望する。そこで知事は已むなく、民衆の怒を静めようと思つて、兵士に基督を折檻せしめる。で、基督は紅い衣を着せられ、手に蘆の笏を突き差され、頭に刺の冠を押し頂かしめられる。

知事は高僧等を先頭に、わめき騒いでゐる群衆に此痛々しい刺の冠に苦しむ基督を見せたけれども、更に靜まる様子もない。高僧の群衆を使喚すること益々烈しくなり、群衆の言動彌々猛烈となり、基督の死を迫ること愈々急となつた。

知事は此光景に怖ち遂に次の如く宣告する。

「私は皆共の強暴に強ひられて、已むなく残酷な要求を容れる。彼を引取つて十字架にかけよ。併し其の罪のない、正しい人を殺す残忍非道の罪には自分は與らない。」

昔は救主と呼ばれ、ホザナの聲、芭蕉葉の影に取巻かれて、群衆に迎へられた基督は今や同じ群衆に罵られ、苦しめられながら、死出の旅路に追はれて行く。

### 第三部

(十字架の道から復活に至るまで)

#### 十字架の道

右の街路から出て來る喧しく騒ぎ立てる群衆、百人隊長の率ゐる兵隊、高僧の群、次に刺の冠を頂き、大きな十字架を苦しげに曳く基督、これを取巻く刑吏、其他兵士、パリサイ人



道の架字十が督基

の群。

左の街路からは基督の身の上を氣遣つて、ベサニイを旅立つたマリア、マグダレン、ヨハネなどが現はれる。右の街路からはシモンが出て来る。

基督の母マリアが群衆の蔭から此恐ろしい光景を見ると、

「あれだ！ オ、我が子だ、ジーザスだ！」と覺えず聲を發して、よろめき倒れさう。隨いて來た婦人共の手に支へられる。

基督は十字架の重荷に、つまづき、たちたちと進んでゐたが、母の影を見ると、恩愛の情にひかれて、力頓に弛み、膝を突いて倒れる。

通りかゝつて來たシモンは此様を見て驚き、基督を助けて、重い十字架を運んで行く。ヴェロニカはハンカチーフで基督の額の汗を拭つてやる。基督は刑場にとせき立てられながら、これが此世の見納めと、母の面を熱々ながめる。同じ心に見交はす慈母の眼！ ヨハネはマリアが基督の最後の光景を見るに得堪へないであらうと慮つて、此處から直き郷里に歸ることを勧める。

と、マリアは

「如何して人の母が我子の最後を見届けられないで歸られやう？ 私は彼と共に苦しまう、罵詈も侮辱も彼と分たう。彼と一緒に死にもしよう……」

と云ひながら我子の死出の旅に上るのを見送つて行く。

### 十字架上の基督

コーラスは黒い上衣、黒い帯、足には草靴を穿き、頭には黒い花環で飾つた冠を頂く。先、次の場面の概況を語るプロローグ（メロドラマ）、續いて獨唱、合唱。

オ、誰か此高き愛を認め得るや、

殺さるるも愛し、

打ち殺す手をも憎まず、

却つて彼等を免し、其幸を祈る。

オ、此偉いなる愛に捧げよ

汝が敬虔の胸の情を、

十字架の神壇の上に

大なる供物として。

ブローログやコーラスの聲に悲哀の調を添へる槌の響が幕の後背から聞えて来る、それは基督の手や足に釘を打ちつける悲惨の響である。

幕が上がると、内舞臺には基督と同じ刑場の露と消える囚人二人が已に十字架上に載せられてゐる。基督は十字架に釘づけられた儘、地上に横はつてゐる。兵士、僧侶、パリサイ人、

民衆の幾群が其側に立つ、基督の母や、マгдаレンヤヨハネは其後方にゐる。

やがて基督を載せた十字架は靜かに立てられる。

二人の死刑囚が先づ殺される。續いて、兵士が基督の上衣の胸をかき開き、それを引き裂き、胸上をしたゝか打つ。

群衆は架上の基督に向つて、口々に嘲罵の言を吐く。

マリア マгдаレン、ヨハネ十字架に近づく。

基督渴を感じ、水を要める。酢を浸した海綿が與へられる。

「我が神よ、我が神よ、何ぞ私を見放し給うたか」と基督の口から洩れる。(實に人間としての基督の聲、身は十字架上に肉の苦しみを嘗め、目は慈母の姿を下にながめる。此聲の發するの蓋し自然である。)

やがて又基督の最後の言葉――

「愈々最後でございます、天の父よ、あなたの御手に私の靈を御まかせいたします。」  
此言葉と共に、基督は頭を垂れ、息が絶える。

やがて大地が恐しく揺ぎ出して、凄惨の景を呈す、人々恐れ慄き、兵隊長は、基督が正しく神の子であることを自白する。

後、兵士は最後の止めとして基督の脇に槍を突き刺す、流血淋漓、見る者眼を掩ふ。其死體は十字架上から下ろされ、白布に包み、後方の洞穴に入れ、石の蓋で閉ざされる。

### 基督の昇天

コーラスは哀悼の服を脱ぎ捨て、再び綺麗な服を着けて現はれ、埋葬の曲を奏ぶ。大きな地響がすると思ふと、やがて、墓の石蓋が開いて、基督は白衣姿で番兵の前に現はれる。

### 終曲

コーラスの上帝讚美の歌、歡喜の曲が奏せられるにつれて、名残の幕が上つて、雲上に立つ基督昇天の聖姿！

ハレルヤ！

勝利！ 勝利！

英雄は敵の力に勝てり、  
唯暫し陰鬱の

墓に彼は眠りたり、

彼に讚美の歌を謡へ、

彼に勝利の芭蕉葉を撒け、

主は蘇へれり、

喜べ、天よ、

謡へ、地よ、此勝利者に、

復活せる君に萬々歳、

ハレルヤ！

全體、背景と云はず、演出法と云はず、非常に寫實的であつた。磔刑の場などは流血淋漓の惨景を演じ人をして眼を掩はしめた。今少しシムプリファイして、暗示的、印象的にしたらばと思つた。ユダ煩悶の場、基督母子別離の光景など非常によく演ぜられた。

—了—

◀ 記象印藝文米英 ▶	
印刷所 東京市小石川區西江戸川町 電話小石川五九二番 富士印刷株式會社 印刷者 佐々木俊一	大正十三年十一月十一日印刷 大正十三年十一月十四日發行 (定價貳圓貳拾錢) 著者 日 高 只 一 發行者 東京市牛込區矢來町三番地 佐 藤 義 亮 發行所 東京市牛込區矢來町三番地 新 潮 社 電話牛込 八八八八 〇〇〇〇 九八七六 番番番番 番二四七一(京京)替振

吉江喬松氏著

### 佛蘭西文藝印象記

總布表紙特製  
定價 貳圓  
郵送料 拾錢

これ身を以て佛蘭西 讀みたる人の一大批評であり、人類生活最高の指標たる佛蘭西精神の深刻なる解剖である。「南國」「ボール・ロワイヤアル訪問」「ヴェルサイユ」以下十數篇、或は歴史を説き、或は文藝を語り、その視野は飽くまでも廣く、その興味は飽くまでも多角に、而してその研究と考察は、常に日本現代の生活を背景とし規準とすることを忘れない、而もこれを貫くに氏獨特の詩人的情懷を以てし、流麗の筆、時に全篇悉く詩なるを思はしめるものがある。佛文藝に心を寄する人の必讀書である。

### 南歐遊記

柳澤健氏著

價貳圓貳拾錢  
郵送料拾貳錢

篇を、「伊太利遊記」、「シチリア遊記」、「南佛遊記」、「西班牙遊記」及び「歐羅巴を一巡して」の五に分ち、或はフイレンツエの春に文藝復興の盛時を偲び、或はバルセロナに闘牛の壯觀を興じ、或はニースの風光に神をやるの行程を描く。印象記にして批評を兼ね、南歐の風物と藝術とは、此の一卷のうちにその精を凝らしてある。

グリアスン著 日夏耿之介氏著

### 近代神祕說

四六版特製天金  
紙數三百頁  
定價壹圓八十錢  
郵送料拾貳錢

世界現代三大神祕家の一人として、マアテルリンク、ベルグソンと併稱せらるゝグリアスンの處女作にして、同時に其の代表作と云ふ可きものである。將來の思想界の渦心となるべき新神祕思想の見地より、音楽、宗教、小説、戯曲、批評等の各方面の問題を論じた十二の論文を收む。その英語の粹と佛語の雅とを併せ得たる、エマスン以上と稱せらるゝ文品は、譯者が、精緻にして簡潔な邦語によつて遺憾なくその佛を傳へられ、譯者の筆になる著者小傳と「歐洲神祕思想の變遷」と題する長論文とは、近來の好研究として、此の譯書を一層價值高きものとしてゐる。切に一讀を薦める。

### 貧者の寶

マアテルリンク著  
吉江孤雁氏譯

定價七拾錢  
郵送料六錢



## 海外文藝新選

(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)
ベ ラ ン ジ エ	愛 の 物 語	秋 の 胡 弓	卵 の 勝 利	ギ リ シ ア の 踊 女	バ ス ク 牧 歌 調	ア グ ラ フ エ ー ナ	吸 血 鬼	盲 人 國 そ の 他
(戯曲)	(小説)	(戯曲)	(小説)	(小説)	(小説)	(小説)	(小説)	(小説)
サ ア シ ヤ ・ キ ト リ イ	宮 原 晃 一 郎 氏 譯	ス ル グ ー チ エ	吉 田 甲 子 太 郎 氏 譯	大 槻 憲 二 氏 譯	笠 井 鎮 夫 氏 譯	松 永 信 成 氏 譯	矢 野 目 源 一 氏 譯	石 井 眞 峰 氏 譯
〔佛〕	〔諾〕	〔露〕	〔米〕	〔埃〕	〔西〕	〔露〕	〔佛〕	〔英〕

各册中版百六十六頁◆價各拾六錢・送料六錢

## 海外文藝新選

(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
長 い 歸 り の 船 路	三 分 間 の ロ ー マ ン ス	彼 女 は 眠 れ り	エ フ ラ ム リ ン カ ー ン	影 の 彌 撒	勝 利 者 と 敗 北 者	イ ス カ リ オ テ の ユ ダ	チ ヤ ッ テ ル ト ン	死 刑 を く ふ 女
(戯曲)	(小説)	(小説)	(戯曲)	(小説)	(戯曲)	(小説)	(戯曲)	(小説)
ユ ー チ ン ・ オ ニ イ ル	青 木 武 雄 氏 譯	梅 田 ウ イ 寛 氏 譯	横 山 有 策 氏 譯	山 内 義 雄 氏 譯	山 田 松 太 郎 氏 譯	米 川 正 夫 氏 譯	小 林 龍 雄 氏 譯	永 田 寛 定 氏 譯
〔米〕	〔獨〕	〔露〕	〔英〕	〔佛〕	〔英〕	〔露〕	〔佛〕	〔西〕

一册中版百六十六頁◆價各拾六錢・送料六錢

トイKW-6P

近代思想十六講

中澤臨川著  
生田長江著

近代思想の種々相を根本より知らんとする人の爲めの絶好講話。需用益々急、遂に七十版を超えた。

社會問題十二講

生田長江著  
本間久雄著

社會問題、勞働問題より、婦人問題、兩性問題の一切に涉つて委曲を悉くせる現下萬人必讀の書である。

近代文學十二講

長江、草平著  
白川、曙夢著

精密精到なる世界近代文學の講話である。何人も文學者たるの根本的修養を得べき紙上の一大講堂。

近代劇十二講

楠山 正雄著

劇文學界はじめて出でたる大講話を見よ。四部十二講七十餘章、劇壇劇術を説いて細大洩す所がない。

改造思想十二講

宮島新三郎著  
相田隆太郎著

レニン、クロボトキン以下世界改造大運動の中心人物十二家の人と説とを詳述して明快を極めた。

日 近代世文學十二講

高須芳次郎著

徳川時代の文學の講話である。新様の組織、新様の説述、明快の行文、眞に空前の名著と稱せられる。

日 現代文學十二講

高須芳次郎著

明治大正六十年の文學史である。文學と文壇と作家と其時代と併せ論じ、併せ説き、詳密且つ明快。

◆「社會問題」十二圓「近代劇」五圓「近代思想」十二圓「改造思想」十二圓「近代世文學」十二圓「現代文學」十二圓。その外「社會問題」五圓「近代劇」五圓「近代思想」五圓「改造思想」五圓「近代世文學」五圓「現代文學」五圓。送料各拾貳錢。

終